

散々の大味噲を附けた翁に對し、赤岡の友人達は、惡聲を放つと思ひきや、苟くも翁を識る程の者は、何れもその蹉跌に心から同情した。遊ぶことも随分遊んだが、それでも不思議に非難する者が無かつた。自然に具はる「徳」と云ふものだらうか、比喩は大袈裟かも知れぬが、恰度源頼朝が最初の旗揚げに大敗し、杉山に遁げ込み、朽樹の洞窟中に匿れ、杉山を出で、再び箱根山に匿れなどし、漸つと命拾ひをした、然るにこの敗軍の將に對し、一人の離叛者がなきのみか、却つて敵方から歎を通ずる者が擡頭した。宇田翁の赤岡崩れが即ちこれで、岸本は申すに及ばず、赤岡、徳王寺などの友人は、失敗の翁に心を寄せ、必ず再起の日あるべきを豫期した。就中溝淵喜十郎氏の如きは、赤岡出身の先輩濱陽太郎氏に身を委ね、三菱汽船に入らむことを熱心に慫慂した。濱氏は三菱汽船新潟支店長で「越後王」と呼ばるゝ程の羽振りであつた。海運業は翁の宿志なものであるから、萬更ら意が動かぬでもなかつたが、兎も角、一旦高知を雨宿りとし、然る後方向を決定する肚で、失意の中にも、悲觀はせず、友人の好意には感謝した。溝淵喜十郎氏は、溝淵樂彌氏の令兄で、冒險家を以て知られ、曾て井上俊三氏に奨め、小笠原島の檀木や、鱈鱈に手を出さしめたのも、此の喜十郎氏であつた。

雪耶花耶曲猶多。 幾個周郎不憶家。 醉裏誰爲殺風景。 繁絃唱出力人歌。  
 水樓宴罷燭光微。 一隊紅粧帶醉歸。 纖手煩張蛇眼傘。 二州橋畔雨霏々。  
 鯨海醉侯



崧翁畫識

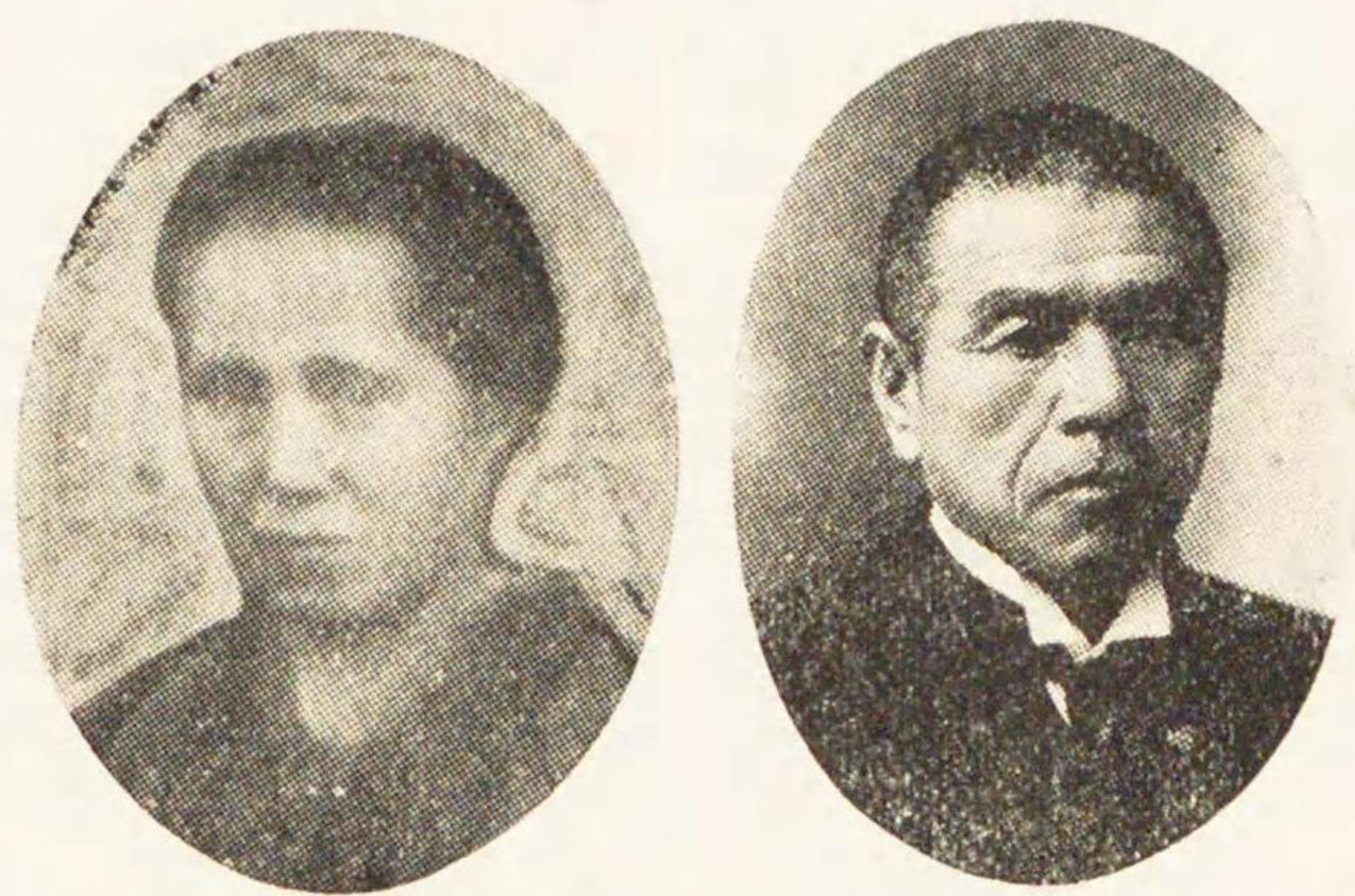


## 雌伏時代

### 一 臼井家の居候

高知には、叔母の居る通町の岡村家もあり、姉の居る種崎町の臼井家もある。義兄臼井鹿太郎氏は城下切つての大商人であり、海運業、珊瑚業、金穀貸附業を手広く営み、多数の店員を使用してゐたから、今度は此の方に身を寄せ、居候格で店の手傳ひをすることになつた。姉の市子の中々の確りもので、弟の身の上に就ては萬遍となく氣を利かし、陰になり日向になつて、世話がつて呉れたが、鹿太郎氏の頭には、赤岡でお茶屋遊びが過ぎたと云ふ、第一印象が刻み附ひてゐるから、惡癖矯正の意味も加つて、他の店員同様に追ひ使うことに些の遠慮がなかつたから、居候の第一日から相當辛い目にあふたと云ふのが事實である。やがて翁の生涯思ひ出の種となつた明治十五年は暮れて、翌十六年の新春を迎え、翁の齡も二十四歳に達した。勿論翁は長く親戚の内に厄介となる意志はないが、未だ自己の出頭地が見つからぬので、暫らく雌伏の臍を決め、義兄の命令通り、或は嶺北方面へ資金の回収に出掛け、或は幡多郡地方へ珊瑚樹の買ひ占めにに向きなどした。嶺北は即ち土佐郡、長岡郡の北部で、本川、大川、森、田井、本山、東西豊永等々が、その貸附先であり、幡多郡は主として渭南、





妻夫氏耶太鹿井白代初

即ち東は清水、三崎、下川口より、西は月灘、古満目、柏島等々の珊瑚採取地である。當時土佐の珊瑚樹は盛んに伊太利に輸出され、海内無比の折紙を附けられてゐたから、其の賣買を大規模に取り扱つた白井商店の利益は、相當莫大であつた。此の時代には、三菱汽船の高知支店は農人町に出来てゐたけれども、東西の沿岸航路には手を着けず、高知から二十里離れた幡多郡へ行くにも、脚絆草鞋履きで出掛けねばならざつたから、渭南地方を徒歩で行くその難行苦行は、並大抵ではなかつた。嶺北地方とても同様で、又山の山嶽地帯に入り込んで、坂を上り、坂を下り、山を越え、谷を渉るその苦勞は、決して一通りや二通りで無い。白井商店の居候となつた翁は、時としては店員と與に、時としては單獨で、此等の地方へ往復することが、課せられたる日常の職務であつた。鹿太郎氏は性頗る嚴格、店員の養成法も亦た酷烈で、西山覺次氏以上だと評された。此の店に入つた翁が、徹底的に人生の辛酸を嘗めさ、れた處に、將來の幸福が宿つてゐたことを思はねばならぬ。

## 二 自由色の城下街

赤岡、岸本に三、四年の歲月を過し、今度再び高知へ来て見ると、世は自由民権の世の中で、各街幾んど自由色に塗り潰され、料理屋に自由亭、湯屋に自由湯、自由餅、自由豆腐、自由團扇等々々、自由ならでは、猫も杓子も夜も明けぬといふ有様に一驚を喫した。恰度その頃、各社の青年安藝喜代香、弘瀬重正、宮地茂春、徳弘馬城郎、明神安久、青木茂樹、小笠原鹿太郎、野村直彦、後藤猛太郎、能勢源之助、森田馬太郎、佐野義一、葛目成茂の諸氏、三十三名連署して、高知新聞紙上に挽車の趣意書を發表し、四民平等、勞働の神聖を實踐躬行し、社會の注目を引いてゐた際であつた。

## 三 唯一の交通機關

人力車は、當時陸上唯一の交通機關で、數百臺の車が、晝夜市中を縦横に馳せ廻り、各辻々には立場があつて、數台の車が客を待ち受けてゐた。諸物價低廉の時代とは云へ、升形から菜園場邊までの賃金、僅かに四錢位なものだから、今日の電車、バスの如く、廣く一般に利用せられた。醫師自家用の外は、悉く二人乗りで、蹴込みの縁には、長さ三尺許の尖端を曲げた削竹に、ブラ／＼提灯を附け



兩側背部の三面は、彩色浮き塗りの美麗な芝居畫を描いてあつた。翁は夜間、時折鹿太郎氏の目を偷み、二人乗りの俵に乗つて、某方面に出掛ける事もあつた。

#### 四 政界一瞥

こゝで今少し政界の事に觸れなければならぬ。自由黨一色に塗り潰されたかのように見へた高知城下にも、十四年には、水野寅次郎氏の社長たる新町の共行社が、聲明を發して立志社より離脱する騒ぎが擡頭した。立志社は言ふまでもなく自由黨の母胎で、地盤は高知市並びに土佐郡を中心とし、幡多郡の一部を占めてゐた。その主義とするところは、フランスの民主思想で、直譯的の民定憲法論を唱へ、國會速開を主張したが、これに對抗して、君主立憲の政體確立を標榜し、縣民の指導に任じたものが、國民派であつた。

國民派は、自由黨の如く、中央政權の獲得を目的とする大衆的行動を取らざつた代り、郷土に於ける有志の結束に力め、修身齋家に重點を置く主張のもとに、浮誇なる黨人的運動を避け、縣民の實力涵養を專として、殖産振興の方策を講じ、又た年少子弟のため、所在に私立學校を興し、教育の普及と、立憲思想の涵養に努力した。幡多郡の高陽社並びに修道社、高岡郡の猶興社、土佐郡の中立社、

香美郡の嶺南社等は、かうした國民派の建前から、創設されたもので、互に訂盟して、立志社系統の各社に拮抗した。

國民派の主義、本領とするところは以上の如く、外來思想の誘惑を卻け、日本の國粹を發揚するといふのも、一つの旗印と爲つてゐたから、長岡郡の池知退藏氏、香美郡の大石彌太郎氏などを中心とする古勤王黨も、之に加盟し、それらの關係に絡み、瑞山先生の幕下にあつて國事に奔走した河野敏鎌氏、先生の知友たる谷干城將軍、土佐における勤王運動家の巨擘佐佐木高行侯、田中光顯伯、土方久元伯等が、國民派に多大の同情を持つてゐられたのは、云ふ迄もなきことであつた。

當時の縣令は伊集院兼常氏、書記官は太田卓氏、警部長が安樂兼通氏、國民派が自由黨から官權黨と呼ばれつゝ、自由黨と鎬を削つた政黨の開黨期に、他日土佐政界の大御所と稱せられた宇田翁は一商店の店員として、汗水を流してをつた風景を想像し、人間の運命は、人間の智慧では、測量が出来ないとの結論に到達する。

#### 五 臼井時代の裏面



人間の歴史には、表と裏がある。臼井商店で、他の店員並みに、扱き使はれた翁も、休養時間の裏面には、持前の陽氣が時々發散したものでらしい。本店の南側は支店で、その二階に、翁をはじめ、番頭の太田直太郎、田中友次郎、その他四、五名の店員が寝起きた。孰れも獨身の青年だから、店を仕舞うと飲み屋へ出掛けることが珍らしくなく、翁は番頭の太田を引張つて、よく九反田の①樓や、青柳樓などで遊び、間々鶏鳴時頃に歸つて來て様子をうかがうと、鹿太郎氏は、早くも店の雨戸を開け、ランプを點けて、店員に掃除を命じてをるやうな場面に出喰はすこともあつた。左様な場合には頼光の横町で、風や雨に晒されながら、夜明かしをするのが例であつた。然るに鹿太郎氏は、態と知らぬ風を粧ひ、店を仕舞うと共に、翁等の合宿所へ外から鍵を卸し始めた。すると翁等も亦た直に一策を案じ、裏口から船に乗つて相變らず、九反田方面へ發展したものだ。

×

當時、一般商家の習ひとして、店員の食事は並べて粗末であつた。臼井家は副食物が干鰯三尾、大根漬二片と極つてゐた。岸本浦に育つた翁は、干鰯が大の好物だつたから、三尾では足りない。そこで今一二尾特別に増して貰ひたいと云ふので、得意の外交手腕を用ゐ、コロリ女中を參らせて、五匹の潤目が皿の上に並ぶやうになつた。

×

臼井が、砂糖商にも手を出すことになり、鹿太郎氏の令弟鈴吉氏に、金を持たし九州へ仕入れに遣つた。然るに日を経て音沙汰が無いものだから、鹿太郎氏がシビンを切らし、翁に「行つて見届けて來い」との嚴命を下した。翁は喜んで出發したが、何日経つても、これ亦た一片の通知が無い。そこで更に他の店員を差し向けて見ると、二人は飲み浸つてゐたと云ふ逸話もある。

鹿太郎氏は、時々翁に訓戒を加へた。表坐敷の眞中に端坐して、長時間説諭するのが恒とされてゐた。余り聲の高い時には、姉の市子が氣轉を利かして、息子伊太郎氏に耳語し、翁の側へ何氣なく竝ばすやう取計つたこともあつたが、鹿太郎氏の癖は、説諭中そろそろ睡氣を催ふし、長い訓戒をつゞけてゐるうち、コクリ／＼眠り出すことである。此の癖を知つてをる翁は、義兄の白河夜船が始まつたと見るや、こつそり遁げて行く、そして其の跡は、姉の市サンが氣を利かして、工合よく取り繕ふた。姉弟の情とは云ひながら、姉サンの氣苦勞も、並大抵でなかつたことが判る。

## 六 自覺發憤

「天の將に大任を此の人に下さむとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞す」と云へる古語は、實に濟世利民の政治家や、宗教家や、軍人などの身の上のみならず、苟くも何等かの事業を爲さんと欲する者の總べてに向つて、當て箴るべき言葉である。翁の如き天成の非凡人に在つても



亦た先づ非常に心志を苦しめ、筋骨を勞する後にあらざれば、その大本願は遂げ得さ、れぬのである翁が白井時代の約三年間、肢體の勤勞は實に一通りでなく、心志の苦勞は異常であつた。斯くその心身に一大試煉を経來つて、茲に始めて年來の本願を達する資格が具備された譯で、翁が七十九年の生涯を通し、この白井商店時代こそ、最も價値ある修養期であつたことが首肯される。

×

翁の天分は所謂棟梁の材で、一個人商店の使用人たるには餘りに太過ぎた。鹿太郎氏も適にその點をば、認識したものと見え「大簿」の綽名を附けると與に、三年目頃からは吐言を云はず、諸事大目に見るやうになつた。氏の令弟鈴吉氏、令息伊太郎氏などは、最初から翁に切々の好感を寄せてをり全部の店員は、次第に翁に心服し、終りには衆星の北斗を繞るが如き状態となつた。

×

白井商店には、種々雑多の人物が出入し、知らず識らず人間學習得の一助と爲つた。殊に手廣き金貸業の關係から、多數の仲持業者の出入が頻繁で、此等とも接衝する場合があり、天賦の商略が、その場面に應用されるので、海千山千の仲持が時々手古摺り、この連中から「宇田友」と一目を置かるゝ迄に、その持味が出て來たのである。

×

要するに白井の三年間は、一大試煉、一大鍛鍊の時代で、人知れぬ間に、又た自らも知らぬ間に、おのづから識慮が練られ、その結果、精神的に過去の一切を清算して、勇敢に新生面開拓のスタートを切つた。時は明治十八年一月、青年期より壯年期に入らむとする二十六歳の初春で、翁の生涯を決定する自覺發憤期たることを特記する。

×

×

欄干曲々映波摧。 捲盡珠簾意快哉。  
細草含烟城影遠。 暮潮沸月櫓聲來。  
夢中聚散雲千里。 眼底高山酒一盃。  
他日壯遊重相問。 鳳笙玉管浪花堂。

岩崎東山



## 波瀾時代

## 一新スタート

翁が自覚發憤の第一歩を踏み出した明治十八年は、日本の海運史に、新紀元を劃する日本郵船會社の生れた年で、高知の農人町に掲つてゐた「三菱汽船高知支店」の看板は、早速「日本郵船高知支店」と書き替へられたが、支店長には異動なく、久米弘行氏が其儘支店長に任命された。當時の久米氏は、九反田に邸宅を新築し、其處から毎日人力車で農人町へ通ふてをつた。現在の大松閣が久米氏の邸宅だつたと言はれる。宇田翁は、嘗て久米氏とは相識つてゐたかなれど、數年間消息を絶つてゐたので、義兄鹿太郎氏の紹介を以て、下級書記に採用してもらつた。翁の家は代々の船流しで、翁の血管中には、傳統的に濃厚なる海運の血球が流れてをる。時運一たび會して、宿昔の本願に雙手が届いた以上、これを不動の足場として、着々地歩を築くだけの聰明と、堅忍を持合はす翁である。草履取から出世した藤吉郎は、翁の爲に好き手本であつたに相違無い。打入りの肩書は、高知支店の下級書記で結構だ。「更生の友四」が、臼井の世話で、資本金一億一千萬圓の日本郵船に、採用されたと云ふ吉報が、岸本に着した時、慈母の喜びは言はずもがな「友四には困つた」との嘆聲を發してゐた

長藏氏の愁眉が、花の如くに開けたのであつた。

×

後年、土佐財界のナンヴァーワンとなり、時の政黨とも一聯の關係を繋ぎ、有力なる背景となつた翁の將來運が、新スタートの第一歩において、既に定つてゐた宿命的因果律を、此のところで財界、政界の兩方面から検討して見たい。翁の入社した日本郵船は、その實質に於て三菱會社の革命したのと同じのものたることは、次の事實がこれを説明する。——乃ち初め岩崎彌太郎氏が、土佐藩の汽船八隻を譲り受けて、海運業に乗り出した時には、後藤伯も、板垣伯も共に援助を與へたが、爾來岩崎氏が好運つゞきで、黄金の雨が降るやうな暴富を贏ち得るや、板垣伯はその倨傲、驕奢を快からず思ひ、自派の機關新聞が、海坊主退治の毒矢を放つても、それを制しやうとせず、兩者の間に鳴きな渠が造られた。そして當時の一奇觀は、改進黨側の巨頭にも、土佐出身の河野敏鎌氏、小野梓氏、大石正巳氏、馬場辰猪氏等のあるのみならず、大隈侯の兵站部たる岩崎の三菱會社があり、自由黨側は、總理の板垣、副總理の後藤、その他片岡、林等の頭目は土佐人で、爭覇の魁傑が、双方共に土佐人であつた事だ。斯くして政府に要位を占めて、國家の財權を握つてゐた大隅侯が、北海道開拓使官有物拂下事件にかゝはつて政府を逐はるゝや、農商務大輔品川彌二郎子が第一線に立ち、三井と關係の深い井上馨侯が、背後の推進力となり、三菱會社に匹敵する大汽船會社「共同運輸」を起し、以つて大



隈、岩崎高壓の手段に出たのである。共同運輸會社のいよ／＼成立するや、豫て岩崎に快からず、三菱の獨占を憎みたる土佐の自由黨員は、敢へて手段を擇ばず、三菱の汽船を土佐航路より排除すべく、隠約の間に共同運輸と交渉し、同汽船の一隻を割いて土佐航路に充てむことを熱心に慫慂したが、板垣伯部下の西山志澄氏であつた。そして氏は共同運輸の高知代理店長として、汽船駿河丸を高阪航路に備へ、三菱會社の浦戸丸と競争の戦端を開いた。

此の時の事だ。岩崎家が最後の膽を固め、刀折れ矢竭くるまで血戦死闘し、若し資糧全く竭盡するに至らば、自己會社の汽船は、残らず之を品川沖に艦集せしめ、一炬に附して焼き拂ふまでだとの一大勇猛心を鼓して、戦鬪の火蓋を切つたのは。斯くして土佐航路をはじめ、全國沿岸至る處に、兩社汽船の競争が猛烈に行はれ、兩虎相傷つき、幾程もなく運輸會社の株式は、日一日と價格を落し、遂に停止する處を知らざる状態となり、忽ち株主の大恐慌を來したので、政府當局は今更の如く狼狽し兩社に命令を下して、搭載の貨物、乗客の運賃に協定を爲さしめたかなれど、騎虎の勢ひ最早制止の餘地が無く、その反目疾視は益々劇烈を極め、角逐は文字通り白熱の燒點に達した。かゝる劇戦の最中において、三菱會社社長岩崎彌太郎氏は重患に罹り、終に復た起つ能はず、五十二歳を一期として黄泉の客となつたが、同社は英傑の社長を喪つたけれども、實弟彌之助氏の才幹機略阿兄に譲らず、直に社長の任を襲いで阿兄の爲に弔合戦の陣頭に立つた。此の時に方り天下の輿論は、兩社の角逐長き

に亘るは、國家の不利である、宜しく之を打つて一丸とすべしとの風潮に向ひ、纏てこれが事實となつて兩社は斷然合同した。これが即ち宇田翁出世世双六の振出しに當る日本郵船會社で、同社の資金は三菱の出す五千萬圓と、運輸の提供する六千萬圓と、合計一億一千万圓を資金とし、政府は年々その利子を保證するに八朱を以てし、且つ各航路に對しても政府は助成金を交付することにした。表面は此の通り圓滿な合同劇に見えたが、その實、兩社の競争激烈で運輸會社の株券暴落するや、岩崎は尙かに他人名儀を以て、之を買占めたから、内面的には三菱が共同運輸を併呑したことになる。翁が宿願の新生涯に第一步を印した明治十八年は、海上王岩崎彌太郎氏が逝去した年、日本の兩大會社が合併した年、又た官制改革第一次の伊藤内閣に、谷干城將軍が農商務大臣として、登場したことを記憶せねばならぬ。

美 譚

赤岡の海濱に、弘田宅平翁の墓があり、その墓の裏面には「從四位勳三等岩崎彌太郎因「舊誼」建之」といふ文字が記されてゐる。宅平翁は、弘田徳三郎氏の父で、井ノ口時代には、幾度も岩崎家の生計を助け、何かと其の便宜を計つたので、さしも傲岸不屈の彌太郎氏も、この宅平翁の親切だけは、一生恩に著て忘れなかつた。だから後に彌太郎氏が出世して、日本一の大富豪と謳はれるやうになつた時、弟の彌之助氏と連名で、「われら、今日の地位を得たるは、全



く以て貴家の庇護に因る。岩崎家の續く限り、此の事を傳へて、貴家の恩は忘却致させまじく」といふ意味の一札を入れたとの説さへある。之で見ても、宅平翁がどれほど、岩崎家の爲をした人であるか分る。従つて宅平翁の生存中、岩崎家の之に對して、盡したること、いふものは、大したもので、老夫婦が、たまさか東京見物にでも出ることがあると岩崎家では、之を床前に坐らせて歓待したさうだ。今日でも岩崎家の土佐に於ける家庭關係と、土佐に於ける資産關係は、故宅平氏の子孫、弘田家の當主の手を経て處理することになつてゐる。

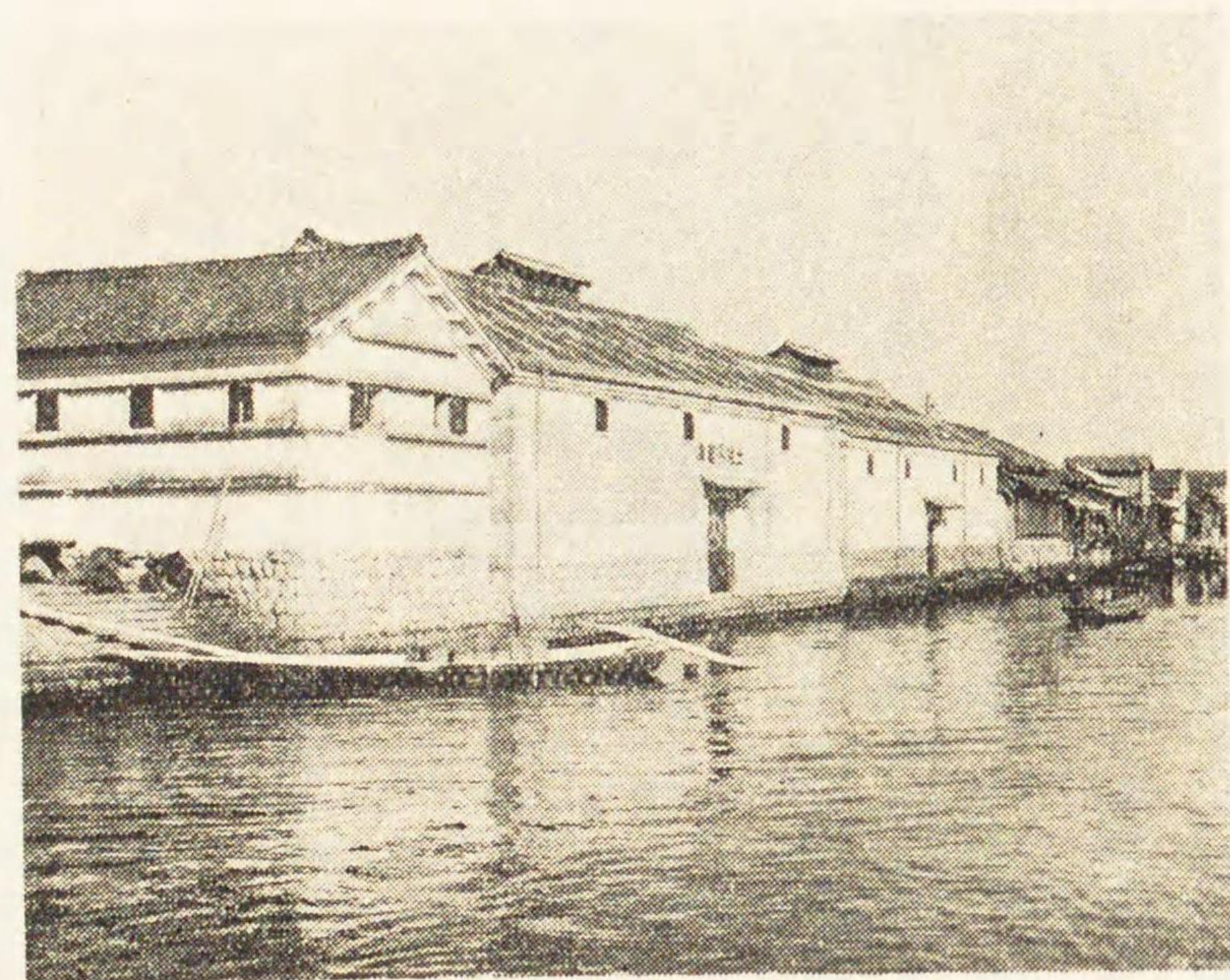
井ノ口の弘田家は、宇田翁の青年時代に赤岡へ出て來て『永田屋』の所有家屋を買ひ取つた。永田屋は、宇田翁の親友、溝淵樂彌氏の家である。或時翁は樂彌氏から、右の話を聞き、彌太郎氏が、永久に恩誼を感銘したその心根に痛く共鳴し、それを實踐したとの美譚が、赤岡地方に傳へられてゐる。

×

×

## 二 下級書記

明治十八年十月、日本郵船會社の成立と共に、從來三菱會社に專屬した土佐航路も、その儘をもつて、郵船會社に引繼がれ、農人町の三菱高知支店（今の土佐倉庫所在地）が、郵船支店の事務所となり、同時に三菱の汽船であつた浦戸丸が、郵船の汽船として、土佐と阪神間を往復する舊態に還元し元の共同運輸に屬した駿河丸は、浦戸灣から其の影を没するに至つた。此の創業當時の高知支店には



農人町土佐倉庫附近

久米支店長の下に、次長の森田銀太郎氏が采配を振り、更にその下に四、五名許りの事務員が机を並べ下級書記の翁は、その末席に腰を掛け、與へられた事務を、片つ端から捌いて行つた。時に翁の齡は二十六歳であつた。

## 三 高知共同運輸

日本郵船會社は、創立の際の事として、改良の方法が未だ土佐航路に及ぶ能はざる事情に累せられ、單に三菱の汽船を一隻だけ動かすばかり、別に目新しい施設の見べきもの無き爲め、土佐人の期待は、裏切らるゝ形となり、且つ時勢の進運に伴れて、浦戸港には荷客次第に増加する状態となつたから、舊共同運輸會社の高知代理店長たりし西山志澄氏は、翌明治十九年に土佐一部の荷主を糾合し、高知共同運輸會社なるものを起し、往年の汽船駿河丸を備用し、以つて日本郵船に對抗した。西山氏は



「土佐航路は土佐人の手に收めよ」の趣旨で、荐りに畫策する處があつたけれども、何分新會社の基礎未だ鞏固ならず、天下の郵船を對手に競争を試みるは、謂ゆる螻蛄の斧の譬えて、一年ならざるに早くも郵船に壓倒され、果ては郵船へ共同運輸の資産全部を買収せらるゝの不始末に終つたのである。

### 高知汽船生る

西山志澄と云へば、土佐自由黨領袖の一人にして、片岡健吉氏、林有造氏と比肩する先輩株だつたから、郷黨の推重もあり、且つ霸氣に富む人物であつた。だから其の一失敗位に頓着せず、持ち前の執拗振りを繰り返して、遂に初一念をつらぬき、土佐航路をその手裏に收むる目的を達成した。氏は共同運輸の失敗に鑑み、更に新汽船會社を高知に設立するには、先づ日本郵船を説き伏せて、土佐航路の讓渡を受けるやうにしないと、前日の失敗を繰り返すのみであると思ひ、自由黨の勢力を背景に數々上京して「土佐航路は土佐人において經營するから、郵船はこの航路を棄て、他の世界的航路に勢力を伸ばすやう努力されたい」との理由を強調し、大に奔走した結果、その運動が遂に効を奏し、郵船當局の意漸く動き、土佐人にして、いよゝゝ強固なる基礎の上に、新汽船會社を起すならば、土佐航路を讓渡してもよろしいとの内



西山志澄氏

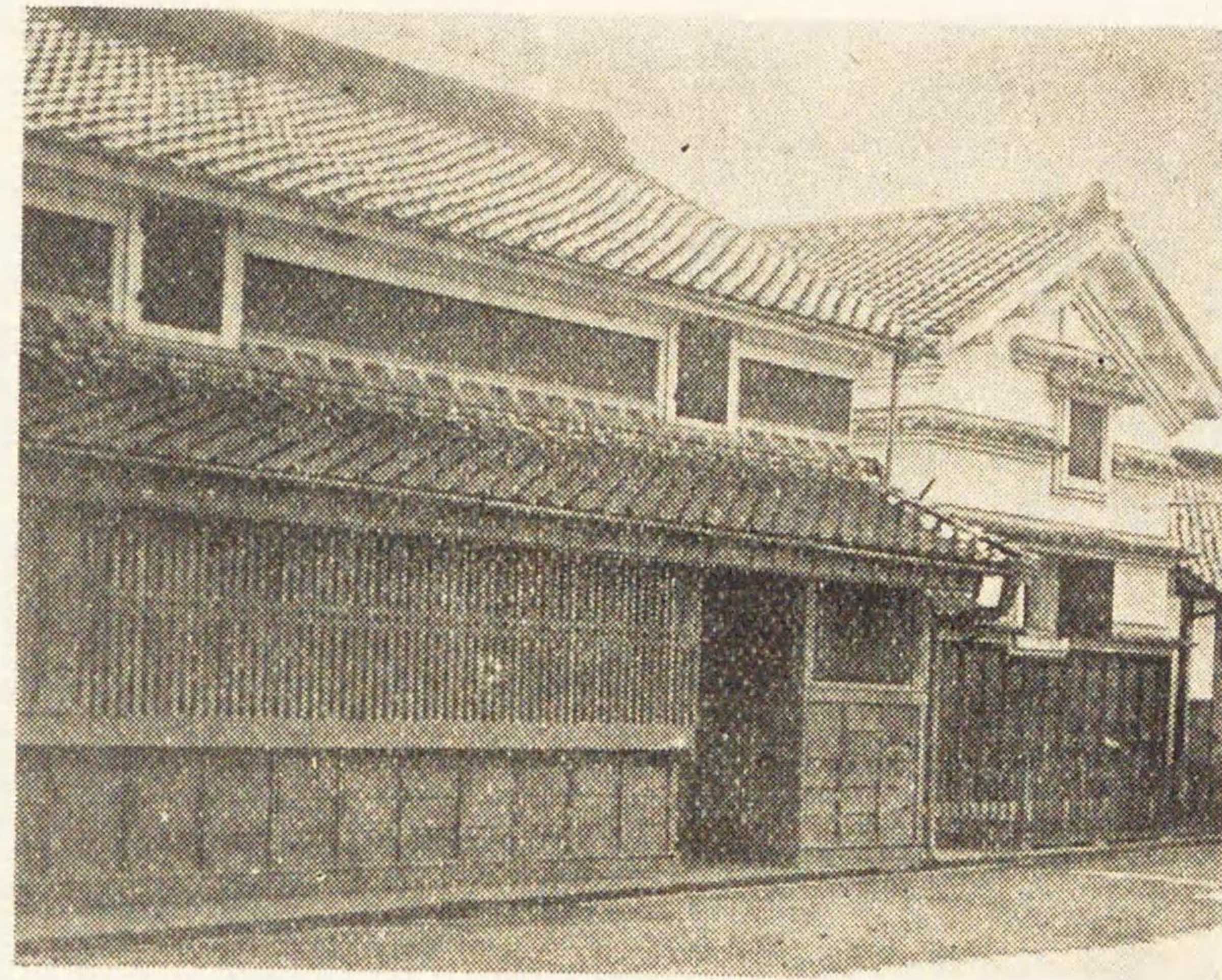
諾を與へたので、氏は大に悦び、土佐に歸り、堺町横山宗太郎（横山慶爾氏の令兄）納屋堀伊藤修兩氏と提携して、高知汽船會社と稱する新會社を起し、西山氏が社長となり、汽船金剛丸を購ひ、尋で汽船日高丸を新造し、高知、阪神間に隔日航路を開始した。西山氏の策動により宇田翁の入社した郵船支店は、約三年ばかりで廢店の運命に遭遇したのである。

### 五 最初の縁談

翁が最初の縁談は、二十五歳の時、野市の親戚藤田萬之丞氏の肝煎りで始まつた。藤田氏は伊野と長濱の二箇所で、花嫁候補を物色したが、伊野の方は氣乗り薄とあつて、白羽の矢を長濱青木家の長女に立てた。見合の結果、双方異存無しと云ふことになつたけれども、事情のため、足掛け三年間、結婚式を擧げるに至らざつた。當時の見合に就き、左の如きロマンスが傳へられてをる。

青木の長女は、絶世の美人との評判が高く、先年その親族に當る安藝の須藤家へ往つた時にも、往復が駕籠で、安藝の横町の婦人達が、途中に待ち受けて其の顔を見やうとしたけれども、左右の戸を鎖してあるので、横顔の影さへ眼に留まらざつたと、話題に上つた程の箱入だから、二人の月下氷人と翁とは、兎ても尋常一様の方法では近づく事さへ叶ふまいと大事を取り、かねて用意の錢束を熊と青木家の門前で落した。その錢束と云ふのは、一厘錢、八厘錢の穴明き錢縋、十錢差し、





長濱青木家

### 六 華燭の典

明治十八年から十九年は、翁の心身兩方面に重大なる革新が行はれた。その一つは即ち前段記述の

二十錢差しを誤つて落し、その爲め繩がちぎれて澤山の錢が地上に散亂し、收拾に困つたと云ふ風體で、喧ましく騒いでをると、何事ならむと内側から青木家の夫婦が出て来て、三人を玄關に連れ込み、藁を提供するやら、落した錢を拾つてやるやら、種々親切を盡すものだから、箱入娘の左右サンも、眞逆奥の方に隠れてをる譯にもならず、茶菓を運んで娘らしき劬はりに力めた。是に於て一行の目的は、完全に達し、門を出ると、翁の面は大ニコ／＼に崩れた。斯くて一行は凱歌を奏し長濱から屋形船で高知へ歸り、翌日岸本へ委細を報告した。

新スタートであり、他の一つは生れて初めて家庭を持つたことである。

郵船支店での最初の月給は六圓であつた。當時小學校長の月給が大概六圓、巡査は四圓といふやうな標準だつたから、下級書記とは云へその待遇は、決して悪い方ではなかつた。元來聰明多智にして、且つ人間學の修練が足り餘つてをる翁である。間もなく其の實力材幹が認められて、明治十九年四月には地位の進むと共に、月俸も八圓に昇給した。當時警部の給料が八圓であつたから、知人連は素晴らしい出世だと羨望した程だつたが、九月又た復た昇進して、次席書記月俸十圓也の辭令を頂戴した。「たまるか警部サンより給料が上ぞよ」との評判を取り、紹介者たる臼井氏は勿論、岸本の兩親達は目を細ふして「友四は大出世ぢや、もう媳を娶つても大丈夫ぢや」といふので、十九年の暮、再び藤田氏を煩はし、長濱青木家の快諾を得て、芽出度く華燭の典を擧げた。

### 七 青天の霹靂

翁は、長濱青木氏の長女を妻に持ち、高知の新町で新家庭を営むことになつた。夫人はその容色の端麗なるのみならず、貞淑で理性が勝れてゐた。そして夫唱婦隨、琴瑟相和し、四時春風吹く理想の生活が始まつた。出で、は日本郵船會社高知支店の次席書記として、日々縦横の才幹を揮ひ、翌明治二十年五月には、更に昇進して主席書記となり、事實支店長の仕事を委され、入つては賢妻にかしづ



かれて、しみじみ内助の難有味を満喫し、社会的にも、家庭的にも、潑刺たる新光明の輝きに、若き希望の血汐が躍動した。然るに明治廿一年に至り、土佐自由黨の領袖西山志澄氏の策動により、翁のためには其の登龍門たる郵船高知支店の戸が閉鎖さるゝ意外の出来事が、天降りに落下した。實に突如たる青天の霹靂で、物に動ぜぬ翁も此の時だけは大きな衝動を受けた。翁個人の立場から云ふならば、自己の進路に障害を與へたものが、土佐の先輩西山志澄氏であることにおいて、些の見當違ひはない筈だ。人間は感情の動物だから、如何に寛容の翁と雖も、西山氏に對しては、決して好感情は持たなかつたであらう。

### 八天の配劑

日本郵船會社は、既に説明せる如く、三菱會社の革命せるものである。三菱は多年改進黨の總理大隈重信の兵糧方として、自由黨からは手厳しく攻撃されて來た。翁が新生涯のスタートが、故意か偶然か、自由黨から敵視せらるゝ三菱系の日本郵船たりし事實が、翁將來の政治的方向に、或る示唆と或る因縁を附與したその宿命觀を、何人も否定することは出来まい。これが所謂天の攝理、天の配劑といふもので、人力では如何ともし難い微妙の作用たるを思はしめる。

×

×



直入畫讚



その頃の豊川良平氏

翁が、土佐の天地に於て、青年實業家の花形となりかけた頃、嘗て翁と大鼻漬垂れの好對照に引き出された豊川良平氏の消息に觸れるのも一興たらう。その頃の豊川氏は浪人時代で、三菱から生活費の給與を受け、諸方面に顔を出して變幻出沒極りないと云ふ風で、當時の名流大家と交際し、大隈侯を首め、大石正己、仙石貢、末延道成、千頭清臣氏など、知り合になり、宇田翁の結婚した明治二十年頃には、己に一女子を挙げ、本郷龍岡町に住居し、明治二十一年を以て、後藤象二郎伯が大岡團結の大風呂敷を擴げるや、氏は大石、犬養等と樂屋の一人となり、川田小一郎氏との間を奔走して、後藤伯の入閣に骨を折り、その間加藤高明伯とも懇意となり、朝吹英二氏と共に財界における政治狂の一幅と稱せられた。氏の政治道樂は、主義政策よりも概して友人關係が基調となつたから、政黨の部屋その物に偏した譯でなく、寧ろ部屋に屬する力士その物に肩を入れるといふ流儀であつたから、何の政派からも反感を持たれざつた。宇田翁の後年が亦た多少似寄つた點があるやうに觀ずる。

×

×

九 當時の銀行界

この邊で一吋高知金融界の状態に筆を染めておきたい。何んとなれば、事業を生命とする宇田翁の爲めに、資金を提供する者は、銀行界の人物であつたからだ。翁が明治十年に給仕として、緣故を生じた、第七國立銀行は、年と俱に發展して、取締役にも大脇克信、二代川崎幾三郎、野中幸右衛門、



水田正夫などいふ新顔が擧げられ、この一方、明治十一年に争ふて設立された第八十、第三十七、第二百二十七の三國立銀行も、明治二十年前後には、それ／＼相當の陣容を張つてゐた。然し銀行界にも一種の色があり、第七と第八十が仲の善い同色配合で、第三十七と第二百二十七が亦た握手の親善振りを示した。第八十の幹部は、寺田亮、安田幸正、孕石元愷、西野丹下、村田孝光の人々をもつて組織されたが、この中の寺田亮氏が、宇田翁と密接の關係を有つことになる。

### 一〇 翁と土佐運輸

西山志澄氏社長の高知汽船會社が、土佐航路を獨占し、日本郵船高知支店の閉鎖となるや、翁は間もなく郵船神戸支店に迎えられ、重要な一椅子を與へられた。然るに伊野の紙商組が中堅となつて高知汽船に對抗する新汽船會社を起す計畫の熟する頃、翁は紙商組に見込まれ、その計畫に参加すべく、郵船を辭して高知に歸還した。翁の生家岸本の増田屋と、伊野紙商組の縁故關係は一日の故きにあらず、増田屋時代に紙の買子で東郡地方を出歩いてゐた伊野の紙商連は、この時協同一致して丸一組合を結成し、中田相次、上田虎次、中田勘左衛門、土居伊太郎氏などが大阪、東京方面に出張つて種々販路の調査を遂げ、大阪東區久太郎町に、最初の丸一支店を開設し、次いで高知東境町にも高知支店を置き、盛んに土佐半紙の縣外移出に乗り出さむとする際であつた。翁は高知に歸るや、寺田亮氏

を説いて創立委員長と爲し、中田相次、上田哲二郎氏を兩翼に備へ、一瀉千里に株式會社土佐運輸會社を創立し、茲に企業家としての天分を初めて發揮したのである。この時翁は三十にして立つの年齢であつた。

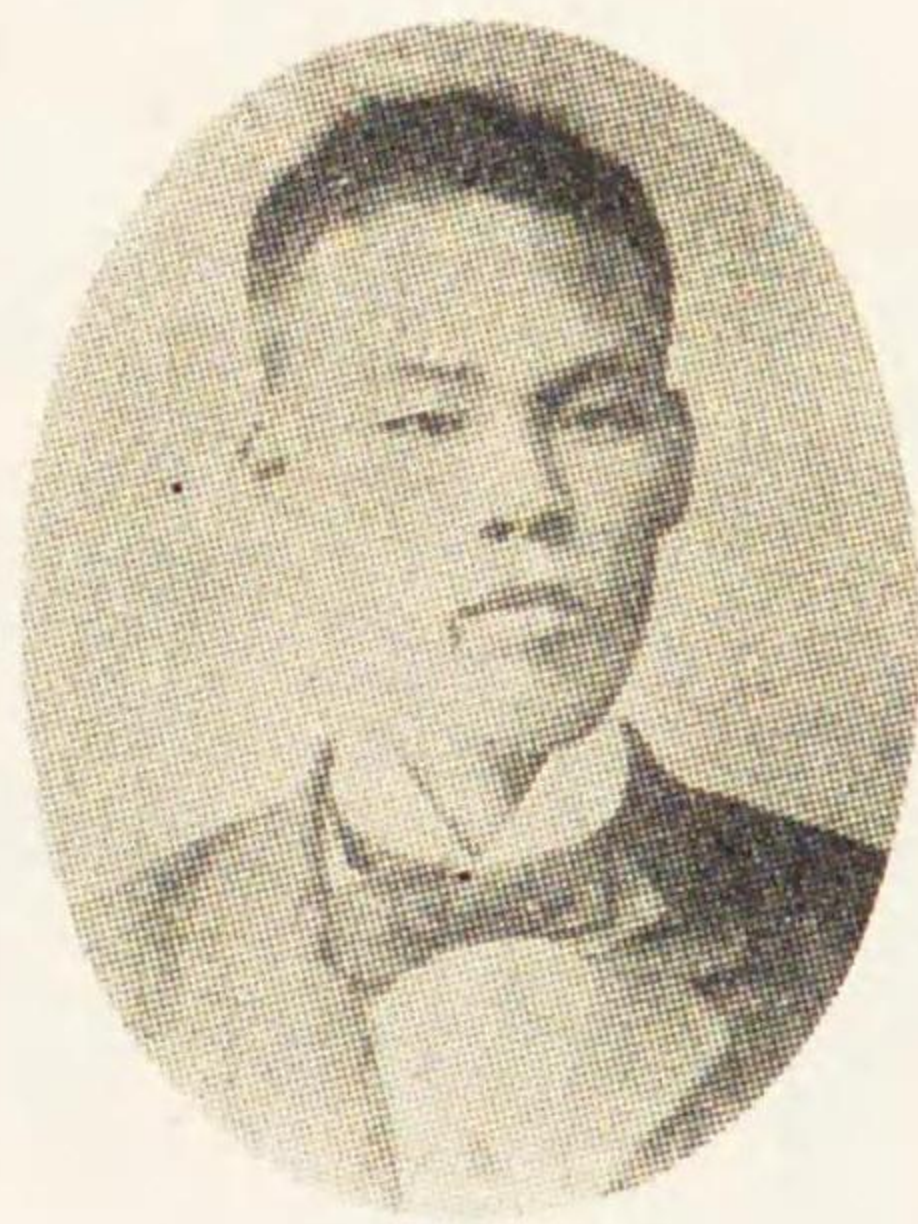
寺田亮氏は、土族社界には珍らしい實業家型の人で、企業上の計畫に秀で、就中海運業に關する智識は専門家を凌ぐものがあつた。事業家にして初めて事業家を識る、翁は斯の人を社長に推戴し、自ら支配人となつて采配を打ち振り、颯爽として土佐の海運界に活躍した。高知汽船の西山志澄氏は、この一大敵國の出現に内心愕然たるものがあつたが、當時は所謂土佐海運界の群雄割據時代に屬し、川中島から桶狭間の合戦をやつて見なければ、英雄の實力は未だ一般から認められる時期に達しない。土佐運輸は取り敢へず間に合せに豊川丸を備船契約したところ、ボロ船で塗が入り紙などが濡れて苦情が多い。これでは仕方が無い、競争にも負けると云ふので、翁は阪神地方へ船の物色に出掛け、紀州の柏屋といふ仁から幸運丸（二百廿九噸）を購ひ入れた。この船が土佐運輸の持船となつて土州丸と改稱した。鐵の船で、一等室が兎ても立派ぢやといふところから、忽ち人氣を博し、乗客も荷物もグ／＼増加し、高知汽船をして顔色なからしめた。

### 一一 翁と土佐郵船



土佐運輸と、高知汽船が、舷々火を發する競争を續けてをる最中、滋賀縣人淺野又藏氏が獨力をもつて、汽船江州丸を土佐航路に浮かべ、横合から競争渦中に投げ來つたものだから、土佐航路は土佐運輸、高知汽船、淺野と鼎立の勢をつて巴狀の爭鬪戦を演じ、混戰二年に亘つたが、此の眞劍勝負によつて、翁の手腕力量は遺憾無く認められ、怪雄西山志澄氏をして、密かに舌を捲かした結果、終に居中調停者が現はれ、合同の交渉を重ねた。斯くなると横合から來た淺野は、自然に圏外に立ち、土佐運輸と高知汽船の談判に進み、西山氏を無關係者たらしむる條件附で、兩社共に解體融合して、新たに土佐郵船株式會社の名の下一體となり、元の土佐運輸寺田氏を社長に、舊高知汽船の横山宗太郎、伊藤修、舊土佐運輸の上田哲二郎、並に新顔の横山慶爾、安岡貞三郎、中田勘左衛門の諸氏を取締役に擧げ、翁は支配人として益々天賦の才力を發揚した。この時代支配人の地位が非常に重要視され、寧ろ常務取締役以上であつたことは、他の銀行、會社の實例に徴しても判る。斯く陣容を整へた翁中心の土佐郵船會社は、高知丸と土州丸の二隻を使用船と爲し、翁の提案にて従前の隔日航を毎日航に改め、茲に本縣の交通は一段の便捷を開くに至つたから、縣官民は旺んに土佐郵船を謳歌し、同社は順風に帆を張るの隆運に向つたのである。

### 一二 初の檜舞台



大脇克信氏

明治二十七年、日清戦争の始つた頃、翁および川崎幾三郎、横山慶爾、大脇克信氏等十一人組の間で、土洋商船合資會社なるものを起した。外國船の古船を買ふて白洋丸、高陽丸と命名し、土佐航路以外即ち阪神より高濱、北海道等の沿海に航業を営むもので、本店を高知に、支店を大阪に置くことになつた。翁は土洋商船の計畫に着手する時、土佐郵船を勇退してゐたが、翁の産婆役だつた土洋商船は、營業の關係上、重點を大阪に置くのが常識的であり、社内の輿論は最高給を以て翁を大阪の探題に据へ、縦横にその快手腕を揮はしむる膳立とした。そこで翁は百五十圓といふ破格の待遇をうけて、大阪支店長たることを諾した。當時の百五十圓は、今日の千圓相場だから、如何に會社が翁の手腕に信頼したか分らう。翁時に三十五歳、これが抑も大阪の檜舞台に乗り出す最初である。

當時、日本で最大の汽船は、日本郵船會社の土佐丸（五千七百噸）であつたが、土洋商船の購入した土洋丸は、これに次ぐ二千七百噸の大汽船だといふので、今日の一萬噸の船のやうに大層評判となつたものだ。いよく日清戦争が始まると果然御用船として、政府に借り上げられた。



### 一三四社の解散

最初、土佐航路以外を營業範圍とした土洋商船は、海運界の狀勢に伴れ、遂にその範圍を擴張して土佐航路にも手を着けることになつた。由來戦争と海運とは付き物であるところから、戦争の波に乗り林有造、竹村太郎兩氏の發企に依り、土陽商船株式會社が組織され、高知と阪神間の航海に割り込んだ。そこで土佐郵船、土洋商船、土陽商船の三社が又た復た競争の汽笛を物凄く鳴らし始めた。そして三社鼎立のこの大波瀾中へ、大阪の共榮汽船會社がもぐり込み、その社船を土佐航路に派して、漁夫の利を占めやうとかつた。此の共榮汽船會社といふのは、古船七、八隻をもつて、中國航路を經營する會社で、千噸以上の船を三隻程動かしてゐたけれども、始終經營難に祟られ、内輪は借金もつれの狀態であつた。その頃、土佐出身の片岡直温氏は、日本生命保險會社の事業に全魂を打ち込み、大阪の實業界に漸く重きをなしてゐたが、氏の斡旋により、土佐郵船、土洋商船、土陽商船、共榮汽船の四社を解體し、この四社の資本を集めて帝國商船株式會社が成立した。

### 一四 帝國商船時代

帝國商船株式會社は 本社を大阪西長堀三丁目に置き、社長岡崎賢次、常務取締役宇田友四郎、支



松山支店帝國商船會社

配人久川管介の顔觸れで、土佐人の汽船會社たる觀があつた。社船は合計十八隻、内地は北海道から日本海沿岸、南は九州、四國、台灣に及び、更に滿鮮支那、南洋方面にまで航海した。然るに同社は、最初から三十餘萬圓の借金を背負ふてをり、その方へ毎日百十圓づゝ支拂ひをしなくてはならぬ行懸りとなつてゐた。債權者は共榮汽船の株主といふ譯で、之が大きな障害物であつたが仕方が無い。常務取締役たる翁は、最善の努力を拂ひ、日夜肝膽を碎いたけれども、何分一日百圓以上の拂ひに追はるゝものだから、會計の手許は、二六時中火の車であつた。こうなると大阪側の株主が、不平を鳴らし出し、須田善繼なる者を常務の椅子に据へるべく、翁の排斥運動を始めた。そこで土佐派の幹部が協議して、その運動に先手を打ち、一時翁を北海道小樽の支店に、體好く遁避せしめた。折柄の酷寒時であり、次長の木崎健太郎氏夫妻が、大に同情して、防寒



用の外套を新調し、これで翁の身體を温めたのであつた。その時の外套は記念となり、今に残つてを  
る。

斯様に、内訌の擡頭した帝國商船は、次第に經營難を加へ、且つ戦後海運界の反動景氣に祟られ、  
萬事休するに至つたので、明治三十二年に至り解散の止む無きに至つた。

×

×

池田辻太郎翁の談

池田翁は、宇田翁との縁故が中々に古く、宇田翁が新婚勿々、高知市北新町に家を構へた時、その一室に同居し、爾  
來帝國商船の解散まで、宇田翁の爲め犬馬の勞に服した人で、現在大阪飛鳥組の會計部に居る。この翁の思出話に、帝  
國商船の最初の勢は、實に物凄き程で、日本郵船、大阪商船と鼎立し、三社の協議會の席上、自分は帝國商船を代表し  
て、思う存分意見を吐いたこともあつた。その當時、宇田サンの大坂に於ける評判は、將來畏るべしといふのでありま  
した。今日から回顧して、土佐勢力の爲めに残念でなれませぬ云々。

×

×

一五 其頃の土佐銀行

第七國立銀行は、明治二十八年四月、資本金を二十萬圓に増加し、支店を大阪西長堀に設置したが

間もなく國立銀行營業滿期前特別處分法の發せらるゝに際し、當時日本銀行總裁に納つてゐた、土佐  
の先輩川田小一郎氏の懇懇により、第八十銀行を併合し、資本金百萬圓を以て、株式會社土佐銀行を  
新に設立した。最初の頭取は大脇克信氏であつたが、同氏が夭折したので、川崎幾三郎氏がその後を  
襲うた。そして土佐銀行の出來た年、同行と相隣りして、高知貯蓄銀行が設立され、野中幸右衛氏が  
その常務取締役に擧げられ、川崎、野中の名コンビによつて、本縣金融界に貢獻するところ著大であ  
つた。

一六 落魄の極

帝國商船が、解散と決定した際、翁は二人の同志と相謀り、獨立營業の建前に於て、會社持船の鯉  
洋丸を譲り受け、捲土重來の旗揚げに取りかゝつた。然し身に貯へのあるでは無し、汽船を買うとは  
云ふものゝ、實際は儲けつゝ、割拂ひにして皆濟するといふ諒解のもとに、營業を開始したところ、惡  
運と災難は重なりたがる諺通り、折角譲り受けたその鯉洋丸が、遠江の御前崎附近で沈没の難に遭遇  
した。保険も附けてなく、金の拂ひも濟んでゐないのに、此の不慮の事故に出喰はずや、二人の同志  
はその儘遁げ出して了つた。そこで全責任は翁一人が背はねばならぬ始末に立至つたので、翁は扇を  
差して株主間へ一々挨拶に廻つた。株主間で勢力を有つてゐたのが、伊野の紙商組であつたが、此の



組が翁の境遇に深く同情し、沈んだ船は死んだ人間も同様だ、今更ら金の無い宇田氏の前へ、古證文を突き付けて見たところで仕方が無いではないか、宇田氏の災難は即ち會社の災難であると思ひ、宜しく棒引の雅量を示すべきだと高調し、他の株主も伊野組に引き摺られ、とうとう文句無しに此の貸借關係が無事解消した。

帝國商船は潰れるリ、自分の買った船は沈むリ、弱り目に祟り目の長堀生活は、その振り出しから慘風暴雨の行路難を犇々満喫せしめられた。帝國商船の解散と共に、無収入無一文の境涯に轉落し、赤手空拳の無理算段で事業を始めかけたのである。事業の爲なら赤裸になつても構はないと云ふ信念の持主である。それに二人の同志が事業の前途を樂觀して、事業への投資金を出来る限り借り入れたものだから、忽ちその方面の煽りが猛烈となつて來た。債権者は四名、金額合計二萬圓餘り、いよいよ拂へぬと云ふ事が判ると、四名の債権者が、長堀四丁目の借家へ遣つて來て二階で評議を始めた翁は自分の着物は申すに及ばず、夫人の衣服から指輪、髪道具類一切を揃へ、その上に時計を添へて之れ以外に一物無しと評定の席上へ持ち出した。翁の性情に任かせ、全財物の總動員には違ひないが二萬圓の勘定へ十枚にも足らぬ着物なものだから、債権者も面を見合はせて呆然にとられた。併し翁の責任感と、翁の誠意は、四名の債権者達が十分に認識した。そして其の結果、翁を二階へ喚んで「この着物を無くしては、乍ち明日からは活動に困るだらう、それでこの品物はそのまま返却するこ

とにするが、その代り何とか名目を付けて貰ひたい」との相談であつた。翁は突嗟の場合、別にこれと云ふ目處はなかつたけれど、三年間の割拂にして貰ひたいと交渉し、その契約書を入れて案外容易に諒解濟みとなつた。

### 一七 夫人の激勵

借金の事割は出來たが、楮て次に待ち設けてゐる問題は、けふよりの生活と、今月からの家賃である。八方塞りの時には、勇者も勇を揮うところなく、知者も知を揮ふ餘地がない。此の時だけは、流石の翁も悲鳴を擧げ、夫人に向つて「いよいよ行詰つた、大阪に居つたところで仕方がない、いつそ土佐へ歸らうよ」と、何時になく減入り込んで弱音を吐いた。すると夫人は襟を正し、凜然として言ひ放つた「あなたが錦を衣て歸るなら、一緒に歸りませうが、襤褸を下げて故郷へ歸ることには、絶對に反對で御座います、あなたは歸りたければ、御歸りなさい。私は縦令大阪の山奥へ這入り、芋堀りをしてなりと過します。此の有様で何うして國へ歸へられませうか」、賢夫人の斯の一言は、意氣銷沈の極にある翁に、忽ち脈々たる生氣を興へた。

### 一八 川崎氏の俠援



恰度この途端へ、親友川崎幾三郎氏が東京から戻りかゝり、長堀の土佐銀行支店に立寄つた序に、長堀に借家住ひをしてゐる翁を訪ひ、種々近況を訊くものだから、其の友情にほだされ、ぎつくばらんに昨今の窮状を語り、何んとかこの苦境を打開せねばならぬと考へてはをるが、何分八方塞がりて途方に暮れてをると話したところ、川崎氏は大に同情し、面白い仕事さへあるなら、金の方は僕が心配するが、その仕事は無いのかと、熱を罩めて問うものだから、翁は大に感激し



川崎幾三郎氏

大阪でぼろい仕事といへば、汽船へ金を貸して、その利鞭を取得する商賣である。大阪の銀行は汽船へ金を貸し出さない申合せとなつてをり、船主側が非常に金融の不便を感じてゐる際だ。この仕事を遣ると中々面白い

とて具體的に説明した。川崎氏は平生翁の事業眼に信頼し、且つ翁の責任觀念の強いことを知つてゐたから、その説明を聴くや、一も二も無く首肯し、歸高の上、早速取り計らうことにしやうと、力強き言を残して別れたが、數日後川崎氏から相當纏つた金を送つて來た、そして後から後からと金を廻はして呉れるものだから、送つて來る金を一方の端から、極めて手堅く、極めて有利に汽船へ貸し付け、豫期以上の成績を擧げるので、川崎氏も大に安心するし、翁の手許は次第に潤澤となるし、昨日まで家賃も拂へなかつた長堀の借屋には、急に何處からか、打出の

小槌が轉び込んで來たやうに、明るき生活振りとなつた。畢竟川崎氏挾援の恩賚だから、翁はこの時から深く川崎氏を徳とし、川崎氏も亦た深く翁に許す機縁を生じたのである。

×

×

おちふれて袖になみだのかゝる時

人のこゝろのおくそ知らるゝ

古歌



## 雄飛時代

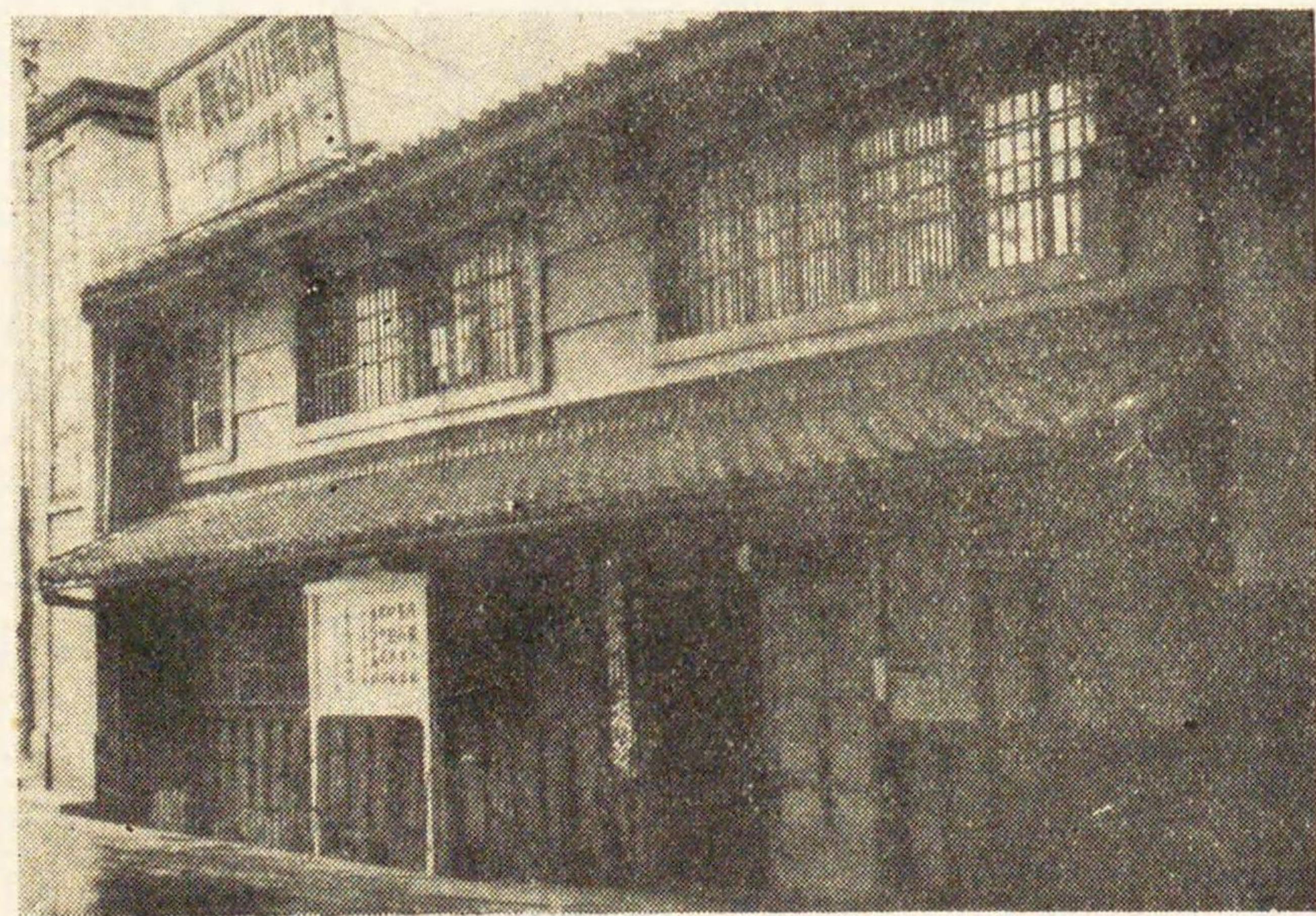
### 一 梅花麗らか

天の將に大任を是人に降さんとする、必ずや先づその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を饑やし、その身を空乏にすといふ孟子の言葉通り、患難は天の試練で、艱險窮苦の經歷なき人は、富貴利達の眞味を解しない。雪に耐へて梅花麗らかに、霜を経て楓葉丹し。多年慘風悲雨の行路難中に七轉び八起きの鍛鍊を積んだ翁は、一蹴を經れば一智を生ず（王陽明）活學問を體得し、雪霜に磨かれ出づる冬の月の境涯に到達した。つらく、翁の過去を回顧するに、その一起一伏は、單なる時相變轉の興味ばかりでなく、人の運といふものが、いかに敷奇に富むかを考へさせられる。我をして洛陽負郭の田二頃あらしめば、豈に能く六國の相印を佩びんや（蘇秦）の言は、直に之を翁に移すことが出来る。翁の雄飛時代は、土佐商船株式會社の創立に、その端を發する。「磨かすは玉も光は出てさらん人の心もかくやあるへき」の昭憲皇太后御歌を拜誦し、火は黄金の純惡を判じ、艱難は人の強弱を判する一大教訓の前に、何人も頭の下がる思ひを禁じ能はぬであらう。

### 二 土佐商船の陣容

是より前、明治三十年六月、土佐人の間において、帝國商船の向ふを張るべく、反對汽船の計畫を

進めるものが現はれた。帝國商船の株主中には、伊野紙商組の如き輸出荷主が多かつたが、これと利害相反撥する輸入荷主の組合が、結束して土佐共同汽船會社を起し、土佐航路に第一浦戸丸、第二浦戸丸の二隻を浮かべ、帝國商船の新高知丸、土州丸、土佐丸の三隻と、舷々相摩する競争戦を激成し、約二年間猛烈に抗争を續けた爲め、兩虎共に傷つき、相互の損失莫大に達した際、兩社の間を居中調停する者があり、双方交讓の結果、明治三十二年一月早々、兩社解散して、合同に歩み寄り、遂に土佐商船株式會社となつて、茲に再び土佐航路の統一を見るに至つたのである。斯くして同社は、同年五月十一日創立總會を開き、假定款を議定し、役員選舉の幕となつた。無論同社は、宇田翁中心の會社だから、満場



(院病川谷長は今) 物建の店支船商佐土



一致の衆望、歸せずして、翁を仕事の本場たる、大阪に居つてもらはねばならぬと云ふので、大阪探頭常務取締役の重任をくゝりつけ、事実上の社長たらしめたのであつた。同社の陣容は

社長横山慶爾、補佐役井上善次、常務取締役宇田友四郎、取締

役安岡貞三郎、同森木彦三郎、同野中幸右衛門、監査役中田勘左

衛門、同山崎重光、支配人久川晋介

諸氏の顔觸で、本店を高知市農人町、支店を大阪西長堀三丁目

設置し、翁の自由手腕を揮はしむることにした。



井上善次氏

### 三 餘裕綽々



久川晋介氏

翁が土佐商船の常務に推擧されたのは、四十にして惑はざる齡で、知慧と力が乗りさかつた、人生の最高潮期であつた。この當時、翁の身には、曩の鯉洋丸に絡まる借金の瘡痍が、猶ほ残つてをり、常務取締役の給料だけでは、この方の支拂が出来かねるから、釘付けにせず、暫らく幾分の自由を與へて欲しいとの希望を、重役會議に提出し、異議なく承認せられた獅子兎を搏つに全力を以てする諺とは反對に、翁は綽々たる餘裕を

もつて、會社の經營を擔當する傍ら、個人事業たる宇田船舶部（白洋汽船の前身）にも、一半の力點を注ぐといふ一身兩様の立場を取り、この諒解のもとに、土佐商船は、同年六月十五日より颯爽と開業した。翁は茲に文字通り、好個の時と、處と、位置を得、多年研きのかゝつた大手腕を、縦横に揮揚する舞台を與へられた。

### 四 慈母の歡喜

親の身の日々のいのりは生の子の末榮への外なかりけり——翁の嚴父長藏氏は、翁が未だ風雲に際會せざりし明治三十一年一月十九日（土佐商船創立の一年前）岸本の本宅にて「誓願寺」の謡曲を謡ひながら、聖者に比すべき大往生を遂げられ、孝心厚き翁をして、風樹の嘆を深からしめたが、母堂久満子刀自は、翁が春風春水一時に到る人生の春に、めぐり合された明治三十二年には、六十四歳の壽齡に恵まれつゝ、いとも健やかに、岸本の邸内において、安穩なる生活を送られてゐたのであるが、末子の出世を眼のあたりに眺めた母堂の歡喜は、如何許りであつたらう乎。當時毎日、脇ノ磯神社へ、御禮参りをしたといふ美談が、昭和の現代、尙ほ姫倉山の松籟、岸本浦の壽聲に和してゐる。

### 五 最初の小手調



開業當初、土佐商船の汽船は、舊の兩社所屬の大小汽船を合せ、高知と阪神間の航路には、新高知丸、土州丸の二隻を充て、東西の沿岸航路には、土佐丸及び第一、第二の浦戸丸を配し、土佐航路の全部をその手中に收め、更に白洋丸を買収し、之を土州丸と新高知丸の間に交へて、益々阪神航路を強化することに努めた。ところで此の時、幡多郡西部有志の企て、汽船日高川丸會社が、突如として出現し、高知下田間の直航を始めたので、土佐商船は特別に、その方面への直航汽船を構へ、競争せしめることになった。林有造氏その他の有力者が居中調停を試みたかなれど、日高川丸の株主が調停案を納れやうとせぬから、折角の調停も水泡に歸し、競争は一層猛烈を加へ、土佐商船の西沿岸には少なからざる打撃となるばかりなので、支配人久川晉介氏が急遽上阪して、委細報告すると、翁はその場で妙案を出し、直航を宿毛まで延長して敵の根據を衝く策を授けた。日高川丸は根據を宿毛に置き、下田、高知間を直航してをつたから、翁の案は果然効を奏し、跳梁の敵を漸次制壓することが出来た。これが翁最初の小手調べである。

## 六 支那航路の開拓

翌三十三年は、一般に商勢不振を極め、移出入ともに積荷の減少を來し、重役連は頭腦を痛めはじめた。加ふるに、前年阪神地方の滞貨に餘儀なくせられ、新浦戸丸を増航せしめた關係から、船費嵩

み、且つ土州丸が大修繕を要する船齡に達するなど、各種の費用傾に膨脹せる其の反對に、収入は減少する一方なので、重役の頭痛は、日に／＼募り出したのである。是に於て翁は一策を案出し、新高知丸を支那塘沽に航行せしむる準備に着手した。此の際の事だ、令兄長鹿氏が、養嗣子縁組の件で翁に相談すると、霸氣のある青年を物色するがよい、左様な人物を養子に迎えたならば、支那に土佐商船の支店を設け、その方の仕事を遣らさすことにするがとの意見を述べた。併し翁の希望する人物は、終に探がすことが出来ずして止んだ。この一事によつて、翁が如何に塘沽航路に重きを置いてゐたか判る譯だが、果然新高知丸の塘沽航行は、翁の着眼通り、往復の収益豫期に違はず、これがため、土佐航路の損失を補填することが出来、同年度の損益決算期に於て、赤字の報告を持出す不體裁を免がれたので、他の重役から感謝された。

## 七 紀州蜜柑の味

翁の住居する長堀北通四丁目から、土佐商船大阪支店へは、僅々一丁ばかりの距離だ。翁は此の支店へ通勤のかたはら、個人事業の一つとして、紀州蜜柑の東京積出しを思ひ立つた。

紀州蜜柑の入札は、毎年十一月から始まるのが例であり、それと同時に、運賃の入札、即ち一箱に付幾許錢の競争入札が行はれる譯だ。その結果、落札者は、三隻の汽船を用意する定めとなつてをり



浪と港の関係から、四百噸級の船が、手頃だとされ、入札人は、自己の船名と共に、一箱の運賃を記さねばならぬ。儲ていよく、競争入札が行はれたところ、荷主側は、船さへ氣に入つたなら、運賃の高下は、左程の問題でないと言ふので、福運は翁の頭上に落下した。翁は此の入札に當面するや、豫め山本組の手を経て、三隻の船を借り受けたのだが、斯かる場合に、翁の船に對する鑑識眼は、百パーセントの鮮かさを示すので、船主側の認識を得たのに、些しも不思議はない。

儲て紀州から東京へは、従来の慣例により、一ヶ月何回の定期航海と、云ふことになつてはをるけれど、回数を増したところで、傭船料を増す必要はない。翁の明敏なる頭腦は、乍ちこゝに働き、定期以上船を動かしたならば、一航海に付、全船員に對し、これゝの奨勵金を支出すると云ふ内規を作り、巧みに船員を操縦したのだから、幾航海しやうが、何等の苦情もない。それに、その歳の冬は、仕合にも西風が少なく、往航は蜜柑の満載、復航は空船、この調子で超スピード主義を採つた爲め、豫想以上に儲かり、一冬の蜜柑で、宇田商船部の新基礎を確立した。

### 八 天 照 丸

事業が主であり、金錢を従視する翁は、紀州蜜柑で儲けた金は、直にこれを自己の事業に活用し、伊勢の大湊に在る造船所へ、四百噸級の汽船を注文した。此の頃から近親の溝淵辨助氏が、商船部に

關係することゝなり、大湊の造船所へは、度々翁の代理として出向いたものだ。やがて注文の新汽船が竣工したから「天照丸」と命名し、茲に初めて、自己所有の汽船を浮かばす時代が到來し、大阪の船主間に「宇田」の存在を、認識せしめる幕が開けたのである。

斯く幸運に恵まれて來ると、鯉洋丸に附帶する舊債も、期限前に全部返済して、四名の債權者を感じせしめたものだ。

### 九 沿岸航路の刷新

土佐商船常務取締役としての翁は、時勢の進運を見て、縣下東西沿岸の航路に、大改良を加ふべき必要を痛感した。ところで明治三十三年の秋が來ても、西沿岸に於ける同社船と、日高川丸との競争は、依然として持續せるのみならず、渭南地方には土佐商船に對するデマが荐りに亂舞するので、同地方の荷主はその蜚語に惑ひ、貨物の託送を躊躇するやうになつた。翁はこの状態を憂慮し、高知の本社へ來て事情を調査した上、社員を西沿岸に特派し、漸くその疑團を氷解せしめ、同時に各代理店を戒飾して、荷主に對する注意を喚起し、その事務取扱に大刷新を加へた爲め、日高川丸は自然に影を没するやうになつた。そこで翁は更に東沿岸の改善に手を着けた。東沿岸航路は從來室戸を終點と



定めてゐたが、時勢の進展、地方の開発に鑑み、その線を甲浦にまで延長する英断に出た。斯くの如くにして、前年西沿岸航路を宿毛まで延長したのと相俟つて、一方は土阿、一方は土豫と、海路の連絡を完成し、本縣の交通運輸に新紀元を劃したことは、翁の功績に歸すべきもので、這の間の真相に徹する方面では、孰れも翁の苦心を多としたのである。

## 一〇 船舶の整理

偕て明治三十四年の春を迎へたが、財界の景氣は、一向に回復の曙光を見せざるのみか、倍々深刻の度を加へた。だから海運界の打撃は、實に一通りや、二通りでなかつたことを知らねばならぬ。土佐商船とても、その例に洩れず、二年越しの荷客激減に、重役諸氏は、焦燥氣分となり、専ら自衛の手段方法に就いて、腐心しはじめた。そして翁の提案に依り、船舶整理以外に、途が無いといふことに、評議一決し、白洋丸を、大阪の藤野林太郎氏へ、二萬千五百圓に、開運丸を、大阪の今井久二郎氏に、八千五百圓をもつて賣却した。是より前、同社が種崎三業組に注文してあつた土陽丸が、恰度進水を終つたので、前記古船の補充に、この新船を用ゐ、尙ほ一隻を大湊の造船所に注文し、その機械は、小野鐵工所へ製作方を託した。此等は皆な翁の計らひたること言ふまでもない。

## 一一 官民の好感情

斯かる辛苦經營の間に、豫て農人町に新築中であつた、同社々屋の建造が竣工した。仍つて官民數百名を、高知公園に招待して、盛大なる落成式を舉げた。當日、常務取締役の翁が、如才なく酒間を斡旋した姿は、來賓一同の好感を買ひ、官民の麗はしき同情が、土佐商船に寄せらるゝ機縁は、この時に作られたと云はれる。如何なる場席でも、惡めない翁の態度は、これ亦た天分に歸すべきものであらう。

## 一二 獨占の素地

土佐商船は、明治三十二年の創立以來、各種の困難が殺到した。蓋しこの一兩年間は、所謂試練時代に屬し、その惡戰苦闘は、中々尋常でなかつた。然るに幸ひに、常務取締役に理想の人を得、斷々乎として、盤根錯節を伐り開き、他の重役、亦た翁の企業立案に、絶對信賴を拂ひ、翁をして、思ふ存分に、自由手腕を揮はしめたればこそ、百難を突破し、遂に同社の地盤を九鼎大呂の如からしめ、永く土佐航路を、獨占する素地を築いたのである。そして开が功勞の大半は、翁に歸すべきこと勿論で、かたゞ土佐航運史に、特記する價值たつぷりと謂ふべきである。



## 一三 縣民の聲に聴く

歳華流れて、明治三十五年の春が訪れた。翌三十六年は、商都大阪に於て、鳴物入りの内國大博覽會が、開設せらるゝ年だ。大阪探題職の翁は、時こそ來たれとばかり、妙氣早くも胸懷を蕩し始めた。三十五年には、阪神地方の經濟界は、一陽來復の曙光が見えたかなれど、僻陬の土佐には、未だその光りが届かなかつた。それに東西の農山村は、稀なる晚春降霜の害をうけ、養蠶製茶の不振なるが上に、搗て、加へて、製紙の産額が例年よりも減退した等の關係から、輸出物産が尠く、それに伴つて輸入貨物も寡少の傾向著しく、重役は年來の愁眉を開くことが出来なかつた。そこで翁は取り措かず臨機應變の策を講じ、土佐丸をして臨時に門司への航行を開始せしむる外、同船を幡多の清水港から大阪に直航せしめるなどの方法を執り、損失補填の策に腐心したが、此の一方縣民の輿論は、會社の苦心を察せず、速かに同社の汽船を改良し、土佐航路に革新の實を示して貰ひたいと云ふので、その八ヶ間敷い聲が、燎原の火となる形勢となつて來た。大衆の聲を尊重するところの翁は、早急に一石二鳥の案を提げて重役會を開き、一面この輿論の督促を受け納るゝと共に、來年度即ち三十六年には大阪で内國大博覽會が開かるゝから、之が備へとして船腹を擴張しなければならぬと強硬に主張した。固より翁の提言に異議者のあらう筈なく、直にその議を決した。そして餘裕無き經濟の中から、七百

噸の鋼鐵船を小野鐵工所へ注文し、別に木造汽船二隻を大湊造船場に依頼し、その機械は石井鐵工所へ請負はした。爾來三隻の新造船は、工事の進捗迅速で、木造の二隻は年内の十月に、鋼鐵船も同じく十二月に、契約通り竣工したので、木造船には鏡川丸、太刀丸の船號を附け、鋼鐵船には、高阪丸の名を命じた。この高阪丸は當時にあつて、其の設備の完全せると、速力の迅速なる點に於て斷然秀絶し、從來土佐航路に於ては、曾て見ざる良船だと稱せられた。これも亦た翁の知識、經驗の然らしむる處で、縣民はこれが爲、頗る便利を感じるに至り、同社の船舶改良に、満足の意を表した。

## 一四 日航の大英斷

翁の事業魂は、公衆と共に、時代の進歩に順應し、産業文化の向上に貢献せんとの基調に立つてを。この烈々たる誠意は、既に斷行した船舶の改良より、竿頭一步を進め、高知と阪神間との、從來の隔日航を、日航と爲すべしとの意見を重役會議に持ち出した。之は會社に取つて、文字通り非常の問題たることを俟たぬ。然しながら、如何なる場合にも、採算を無視することなき翁の提案である。積極主義の社長横山慶爾氏が、手を拍つて眞先きに賛成したから、一人の異議者のあらう筈がなく、間もなく此の大英斷を實行に移し、全縣の官民を驚喜せしめたのであつた。斷じて行へば鬼神も之を避くといふ翁の勇斷振りは、この一事でも能く解る。後年大阪商船會社が、土佐商船の事業を繼承し



てからの、あの日航は、翁の立案を踏襲したものと云つて、一人の異議者はあるまい。

### 一五 變通自在の妙

翁が双腕に縋よりを掛けて、待ちに待つた三十六年は遣つて來た。そして其の年三月から、大阪に於て内國大博覽會の開設となつた。翁の見透し通り、三月に入ると共に、土佐航路の荷客は、頗る増加の一路を辿る好調となつたものだから、會社多年の苦境を脱し、得意の場に轉換すべき、千載一遇の時節到來せりとて、全重役、全社員、一齋に氣負ひ立つた。全責任を双肩に負荷された翁にして見ると、苦しい經濟の中から、船舶と航程に大改良を加へたのは、この好機會を捉へて、その報償を土佐の荷主、土佐の乗客から、自然に受け得るであらうと期待したことを争はれない。然るに好事魔多く、翁が折角の期待は、不幸にして、一部の策動に成る反對汽船の出現によつて、裏切られたのである。乃ち三重縣九鬼彌太郎氏の所有船康平丸が、土佐商船の前を張つて、四月中旬より高阪間を往復する意想外の出來事は、翁當初の十露盤を滅茶々にして了つた。併し斯くなる以上、大決心の齋を固めて反對船を驅逐する以外に何等の妙案ともあらう筈が無い。翁は豫て高阪丸を小野鐵工所に注文する際、萬一の場合を考慮し、特に二個の推進機を備へ附けたのであつたが、幸か不幸か、それが役立つことになつた。いよく競争の火蓋を切るや、直に高阪丸を以て、康平丸の附船たらしめ、康平丸が

出帆すれば、高阪丸は故と後れて錨を抜き、途中敵船を追ひ越し、或は康平丸の周圍をグル／＼一周して輪を畫くが如く乗り廻し、そして敵船を尻目にかけて、速くも目的の地に着港し、船上の乗客をして、高阪丸に乗つたその快感を全土佐に放送せしめた。斯くて此の競争は、四月十九日より六月十三日に及び、運賃の如きも、高知、大阪間乗客一人三十錢に引き下げ、それと共に「六十錢出せば大阪見物が出来る」と云ふ大宣傳を行ふたものだから、七郡の豊山漁村からは、争ふて高知の阜頭に押し掛け、快速力の高阪丸は毎航超満員の盛況で、土佐商船は豫想外の収益を擧げた。變通自在の手を打つて、艱關を突破するは實に翁の獨壇場だと云はれたものだ。從來同社平時の乗客は、一ヶ月平均約四千人であつたものが、此の競争期間中には、一ヶ月平均八千六百人の數字を出した。大阪の博覽會が終つても、海運界の景氣は次第に昂る一方で、土佐商船多年の瘡痍は、この年度において恢復せられ、重役は孰れも翁の機智に、ぞつこん傾倒した。

X

### 一 飯の恩に酬ゆ

X

翁が往年赤岡で窮し切つてゐた時、一樂の胸亂を買ふて貰つた島中松藏氏を感泣せしめた談がある。明治三十六年の夏、赤岡、岸本、手結などの濱邊に鮪の大漁があり、松藏氏は思惑で五百尾程買ひ込み、土佐商船の船で大阪へ積み出したところ、腐らして大損失を招き、運賃さへ拂へぬ破日に陥つたので、大阪支店に宇田翁を訪ひ事情を打明けると、



翁は言下に一切を引受け、仲仕賃に至るまで責任を負ふた上、種々親切に松藏氏を助はり、歸りの旅費まで恵んだので氏はその眞情に感泣した。漂母一飯の恩に酬ひた韓信と好一對の美談として傳へられてゐる。

×

×

### 一六 田岡典章氏

土佐郵船、帝國商船時代以來、翁には形影相伴なう一人の益友があり、それが土佐商船時代に至つて、一層互助的關係を深めた。この益友といふのは、土佐郡旭村赤石出身の田岡小豹太（後の典章）



田岡典章氏

その人である。小豹太氏には二人の賢弟があつた。即ち文豪田岡嶺雲氏と、三菱の總理大臣と稱せられた木村久壽彌太氏がそれだ。氏は久壽彌太氏よりも人物の線が大きく、苦勞が足つてゐたといはれる。青年の頃、或日赤石の自宅で、世界地圖を壁間に掛け、熱心に眺めてをると、忽然天來のインスピレーションに打たれ、日本は海國だ、苟も海國男子として生れた以上、身を船舶に委ねなければ嘘だと決心し、斷乎上神して有力者を説き、不完全ながらも一個の簡易商船學校を起し、自らその生徒となり、節を折つて不眠不休の研究に没頭し、特に船舶の機關に就いて智識を研き、卒業後、大阪に私立の商船塾を開き、機關士をは

じめ、一般海員の養成に力を盡した變り種だ。此の人物と宇田翁が相識つたのは、日本郵船神戸支店時代で、一見舊知の如く、肝膽相照の交を訂するやうになつた。翁が土佐商船の常務となるや、自己の信賴する田岡氏を會社の顧問に推擧し、會社が新造船を引取る場合には、必ず氏をして、各種船舶用機關は勿論、錨、錨索、舵機、その他の附屬品をはじめ、車軸、推進機、汽機の裝置を検査せしめたものだ。

### 一七 宇田船舶部の地位

土佐商船の常務が、一面に於て宇田船舶部の船主たると同じく、土佐商船の顧問たる田岡氏は、一面に於て宇田船舶部の技師長格であつた。宇田船舶部は、船舶の賣買にも手を出し、更に抵當貸附にも食指を動かし始めた。船舶の賣買や、抵當貸附の場合に、最も必要なるものは、船舶の構造、強弱、船齡及び艤裝の如何を審にする眼識力でなければならぬ。かゝる船の實質を識別することは、素人筋にとつて困難なるのみならず、専門家にとつても、決して容易の業でない。然るに翁は、その天才と經驗が相俟つて、船質、船價の鑑定が百發百中であり、この大玄人の相棒に、機關博士の田岡氏を得たところの宇田船舶部の強味は、鬼に金棒以上の實力を備へたので、實物の船を見なくとも、直に取引が出来、之に越したる便利はないのだから、翁の大阪船主間に於ける名聲は、次第に昂まり、權威



と信用がそれに正比例するに伴れ、翁の存在は漸く大きくなりかけた。當時宇田船舶部の地位は、一種の船級協會とも稱すべき機關の如くに見られた。是において翁は、手廣に汽船の抵當貸附を開業すべく、出金方を川崎幾三郎氏に交渉すると、二つ返事で快諾し、同氏から高知貯蓄銀行の野中幸右衛門氏に談を付け、相當巨額の金を融通する諒解が成立した。之によつて電報一本で、川崎氏から何萬圓でも、耳を揃へて送つて呉れるから、幾んど思ふやうに儲かつたものださうな。

×

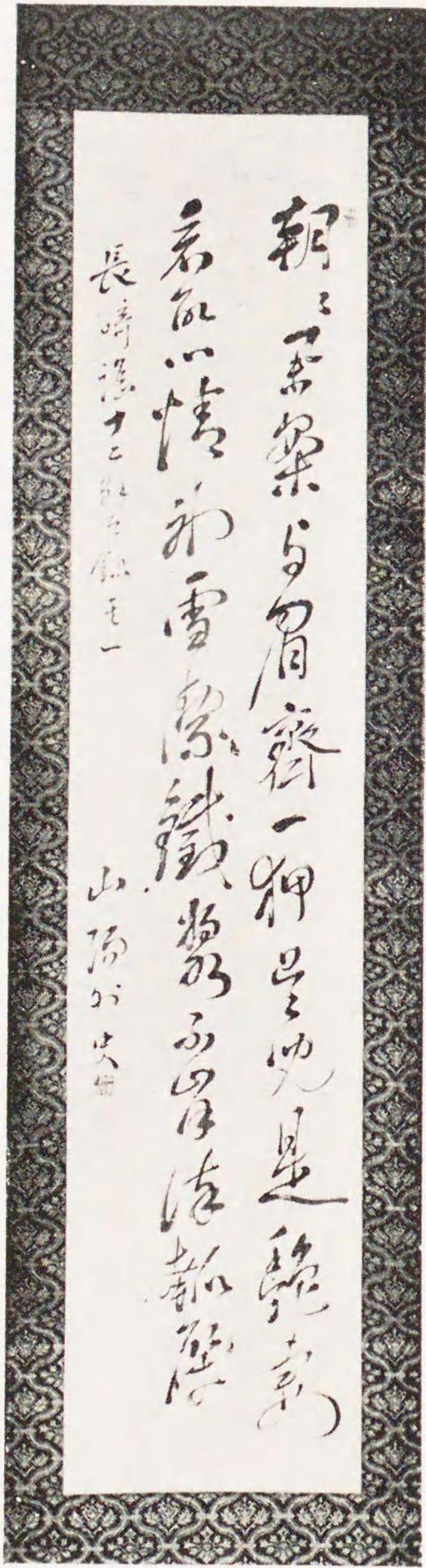
×

老忠僕の回顧談

安藝町に、島崎丑藏といふ九十歳の老人があつた（昭和十三年の暮歿）宇田翁が長嶋を本據として、波瀾萬丈の世渡りをやつた時代の忠僕だが、昭和十三年の夏、往訪の記者に對し左の如く語つた。

×

宇田の旦那も、田岡様とは、眞實の仲善しで、何事も相談し合つてゐました。それなものでから、毎日のやうに田岡様が見えられ、時々汽船を賣つたり、買ふたりの談合ひをなされます。田岡様は、汽船の繪圖面を善く役、旦那様は、その圖面を持つて賣買の契約をなさる役、番頭格（宇田商船部の主任）の溝淵辨助様が、伊勢の大湊へ船の註文に行く役でした。旦那と溝淵様とは、叔姪の間柄でありましたが、溝淵様が私に時々申されました「伊勢へ行つて見よ、宇田といふたら兎も持て切るぞ、俺が行つたら、まるで殿様あつかいだ」と



朝、一葉集ら月齋一柳是也是龍  
君の情が雪の影に照らす  
長崎港の波を渡る

山陽の書

賴山陽詩書



一八友の選擇

宇田翁に事業を持つて行くと「相手は誰か」との反問を受けるのが例で、相手が善くないと、事業が一時順調に進んだところで、屹度躓きが来るからいかぬといふのが、翁の事業哲學であつた。畢竟翁の體驗を基調とした教訓に他ならぬ。然らば翁が握手した田岡典章氏は、如何なる人物であつた乎その片鱗は既に述べたが、茲に一個の挿話めいたものを掲げて、此の如き益友と、左提し右携した翁の擇友眼を覗くことゝしやう。

田岡氏が、東亞セメントに關係する前のことだ。その頃、株界の怪物と云はれた鈴久と、神戸居留の支那豪商伍錦堂との株合戦が開始された。鈴久の背後に安田あることを看破した伍錦堂は、三菱の援助を求めて雌雄を決すべく、當時三菱銀行神戸支店長を勤めてゐた、木村久壽彌太氏を訪ふて懇請するところがあつた。木村氏は、この支那人に見込を付け、よろしいと言下に承諾の旨を答へ、伍錦堂をして欣喜雀躍せしめた。三菱が伍を援けると云ふ情報に接した善次郎氏は、何んと考へたのか、斷然鈴久の背景たることを罷めた。そして其の結果、勝利の團扇は伍錦堂に擧つた。



間もなく、伍は尼ヶ崎に在る東亞セメント會社を買収した。と同時に社長に据へるべき適役の物色に取りかゝつた。或日その會社の隣地に在る、一棟瓦製造所の工場視察に出掛けたところ、茶ッ葉を着た一髯男が、埃塗れになり、汗ダク／＼で、熱心に仕事をしてゐたから、側へ寄つて話を仕掛けると、何うも普通の職工と違つてをるのに氣付き、へりくだつて、色々訊いてゐるうちに、それが所長の田岡氏で、木村久壽彌太氏の令兄なることが分つた。伍は天の引き合せだと深く喜び、早速木村氏方へ駆け付け、令兄を東亞セメントの社長になつて欲しいから、貴下よりその交渉をして貰ひたいと頼み込んだ。兄貴の性格を知悉せる氏は、恐らく話には乗るまいが……との返事を與へて、伍の旨を通じたところ、「何んと考へて左様な使ひをするのか、支那人などに使役せらるゝ俺ではない、面を洗つて出直せ」と叱り捲られた。そこで伍は更に金子直吉氏の手で、田岡氏を動かさうとしたが、相變らずの權幕で齒が立たぬ。結局元の木村氏に泣き付き懇請方を百方哀願の末七百萬圓の金を三菱銀行神戸支店に託し、それを自由に使つてよろしいとの條件を甘諾すれば、交渉に應じやうとの意を傳へ、伍から「何分宜敷」との返事を取り、初めて社長を引き受けたと云ふ變り種だ。他日伍はその功勞に酬ゆるが爲め、慰勞金として、十七萬圓を贈つた。往年高知城西で喧傳された、田岡氏の「赤石御殿」は、この金で新築したもので、設計は宇田翁の指圖であるとは、横山又吉翁の語るところだから、間違ひはなからう。

### 一九 日露戦争の幕

明治三十七年二月八日の夜、東郷大將の率ゐる聯合艦隊の一部は、露國の軍艦を旅順港外に襲撃して、先づ戦争の火蓋を切つた。かくて日本の政治、産業、風俗、あらゆる方面に、一新時期を劃する日露戦争の幕が、切つて落された。日露戦争が始まると、桂内閣は直に一億圓の國庫債券を發行して初度の軍資に充當した。

是より先、第十九議會は、議長河野廣中氏が、開院式に際し、奉答文の中に「内政は彌縫を事とし外交は機宜を失し、臣等をして憂懼措く能はざらしむ」といふ政府彈劾の辭句を挿み、咄嗟の間に之を可決させた爲に、幕の中に解散となつたが、露國との關係は、年を越えて愈々危機に瀕して來たので、政府は斷然臨時支出を要求し、樞密院に諮詢して、京釜鐵道の速成を計つたり、第三期海軍擴張費を廻して、アルゼンタインから、二隻の軍艦(日進、春日)を購入して、著々準備をすゝめてゐた。

河野議長の朗讀した、奉答文案の起艸者は、河野氏の女婿宮崎晴瀾氏であり、京釜鐵道完成の恩人は、大江卓氏である。大江氏が、京釜鐵道を發起してから、十二ヶ年を経て、明治三十八年五月二十



五日、京釜鐵道の開通式を舉行し、軍隊の輸送に至大の便利を與へた。

×  
 緒て三十八年の二月六日には、最後通牒が栗野駐露公使の手から、露國官憲に交付せられ、八日の夜半から、九日にかけては、我が艦隊は、一方旅順港外の敵艦隊を襲撃し、他方仁川沖に敵艦二隻を要撃して、先づ戦争の火蓋を切つた。

×  
 政府が初度の軍資として、一億圓の國庫債券を發行したのは、二月十日、宣戰の詔勅が發せられて三日目のことであつた。三月一日には、衆議院の總選舉が行はれ、政友會百十六名、憲政本黨八十名、帝國黨十六名、自由黨十五名、中立七十六名といふ結果で、各黨の勢力には、さしたる變化もなかつたが、三月十八日を以て召集された第二十議會は、各政黨とも、あらゆる行が、りを棄て、政府を支持し、五億の軍費と、六千餘萬圓の増税と、三億の公債募集案とは、満場一致をもつて可決せられた。

×  
 昭和九年の夏、宇田翁が痾を本山の別荘に養はれてゐた時、土佐電氣會社の堀川幸家、廣瀬清意の兩氏が、社命をうけて、翁を訪問したことがある、その際、翁の回顧談として「日露戦争の時は大分

儲けた」といふ片言隻語が、社報に載せられてをる。以下その内容に觸れて見やう。

## 二〇 貴重な經驗

翁が日露戦争の幕を迎えて、大に儲けたのは、日清戦争時の經驗があつたからだ。

問 船で儲けられたお話を御願ひ致します。

答 サア（と古い御記憶を辿られる）

日清戦争の直前、そうだねー、明治二十七年頃、初めて船を一艘十二萬五千圓で買ふた。十人してネ。

ところで、金をつくるに、なか／＼難儀じやつた。伊野の上田哲次郎君、中田勘左衛門君等と寄り集つて協議したが、どうしても金が足りない。銀行で借らんといかんが、しかしその時分の銀行は何しろ資本金が十萬圓位じやつたからネ。それで大阪で少々借りて、どうやら、こうやら、金が出來た。——いろいろの費用を入れて、結局十三萬位かゝつた。

その船を、北海道へ持つて行くと、一航海一萬圓位になるものネー。そして六七千圓は儲けることになる。

ところで、その船が北海道へ行きつくか、行きつかない中に、日清戦争が始まつて、すぐ御用船



に徴發せられた。わたしは秋田へ行つて、荷揚げをして、すぐ佐世保へ廻した。

二千噸の船で、一ヶ月一萬四千圓程、貸料が取れたネー。後には貸料も一萬圓に下つたが、戦争中に元を拂つて大分残つたよ。

(翁回顧談の一節)

この経験を、日露戦争に應用したのだから、大に儲けたのに不思議はない。

×

日清戦争の後、獨佛露の三國干渉が起つて、日本が遼東半島を捨てなければならなくなつたことは日本國民をして切齒扼腕せしめ、實に悲憤の極に達せしめた。當時「臥薪嘗膽」の聲が、全國の山川を震撼せしめたのによつても、如何に我が國民が、恨みを吞んで、三國の干渉を忍容したか、察せられる。

×

この時において、國民の頭腦には、第二の戦争が豫期せられた。そしてその假想敵國は、シベリア鐵道を計畫し、盛んに極東侵略を企てつゝあつた、露國たることいふまでもない。然るに朝野の間には、有力なる非戰論者もあり、伊藤博文公は、日露同盟論を主張し、早くも露國公使ヒトロポーと會見して、その實行に乗り出さんとし、政界の花形尾崎行雄氏の如き、態々土佐へまで来て、滿鮮交換論を説いた程だ。だから都鄙の企業家、實業家など内々その見透しに惑ふた。然るに宇田翁は、桂公

の腹肚裏を看破する便宜を有してゐたから、日露開戦避くべからずと打診した。だから翁は、宇田商船部の新船二隻を、開戦の直前に進水せしめて、御用船に提供する準備を急がしめたのである。

## 二二 得失を超越

この一方、翁の運営する土佐商船は、創始以來幾多の難局を突破して、克く土佐航路の獨占を持續し、こゝに日露役といふ海運界の書入れ時に出喰はした。儲ていよく開戦の火蓋が切らるゝや、日本郵船會社を筆頭に、他の各會社の汽船も、御用船として徴發せられ、海運界は全般的に有卦に入つたが、土佐商船も高阪丸、鏡川丸、太刀丸の三隻が御用船に使用せらるゝし、他は高阪航路も、東西の沿岸航路も、每航海貨客滿載の盛況で、重役の意氣軒昂たるものがあつたが、唯だ翁の表情態度は毫も平生と變り無く、苦艱時代同様であつた。のみならず、得意、失意を超越せるかの如き翁は、全盛時代に在つて創業の心を失はず、當時船腹の不足によつて、一般的に運賃非常の暴騰を來し、全國の各汽船會社は、約五割の引上を爲したるに拘はらず、翁は土佐の荷主との豫ての協商徳義を守り、二三重役の異論を排し、單だ一部の積荷に限り、幾分の割増を爲したるに止め、他は總て従來通りとした。之は全國に類の無い遣り口で、驚くべき一大英斷であつた。要するに翁の信念たる道德主義が此の如き重大機會に逢着して、朗らかに觸發したものだ。従つて翁自身の心持としては、當然の事を



當然に行ふたまで、そこに一毫の誇負らしい氣持のあらう筈はない。

### 二三 船主界の大評判

三十八年五月、日本海々戦直後、翁は自己の持船を逸早く賣却した。その時、大阪の船主界では、言ひ合せたやうに目を見張り、この儲け最中に持船を賣るのは愚だと評したのだが、二三ヶ月後、そろく、購和の風が吹くと共に、船價ガタ落ちとなつたので「宇田は目先が見えた、うまい事を遣つた」と、船主界の大評判となつた。冒頭語に書いた廣海仁三郎氏と、五角の地位におかれたのが、即ちこの當時のことである。

### 二三 外交手腕の片鱗

戦後一般の海運業は、反動景氣の襲來により、大打撃を受けたが、翁は日清戦後の體驗を活用し、土佐商船をして、この厄年にも無事ならしめしのみならず、平和克復と共に、土佐の特産物たる諸製紙は、戦後の需用に煽られ急に移出を増加した。好況期の明治三十七年一月頃、土佐産紙の賣買を營めるもの、縣下を通じてその數幾百の多きに達したが、中心勢力たる伊野の丸一合資會社、上田合名會社、伊野精紙合資會社は、同年三月合併を斷行して、土佐紙合資會社の設立と爲り、土佐商船の重

役上田重三郎、上田哲次郎、中田勘左衛門氏等皆な新會社の取締役に擧げられ、同年五月大阪支店を長堀北通三丁目に移轉したが、越えて三十八年八月、東都有力なる紙商大畑多右衛門、石崎藤助兩氏が、各金三萬圓を出資して無限責任社員となり、同時に東京に於ける土佐産紙の活躍に拍車が掛けられた。そこで當然問題となつたのが、東京積出しの運賃である。宇田翁は、もと日本郵船に居つた關係上、同社の要路と知己が多かつた。そこで東京送り製紙の荷物を、日本郵船と接續するその交渉の任に膺り、翁獨特の外交的持味をもつて、極めて有利に展開せしめた。乃ち紙に對する運賃を、兩社に分割する勘定表の原案を翁の手で作製し、その運賃の中から、荷主へ割り戻す方法を立てた。斯様な算盤上の接衝は、翁の最も得意とする處で、他の追隨を許さざる壇場なものだから、うまく立廻つて悉く翁の原案を承認せしめた。これは翁の隠れたる功績中に録すべきものだ。

### 二四 長堀の新築

三十九年の春、翁は二萬圓の豫算を立て、西長堀北通四丁目（鯉座橋隣）に、初めて自己の邸宅を新築した。友人間で「作事氣狂ひ」と稱せられた翁は、間口十間、奥行三十間の敷地に、和洋折衷の家を建てるべく、普請の平面圖を自分の手で作製した。當時長堀通りには、洋館の様式を具へた家は一軒もなかつたから、頗る人目を引いたものらしい。此の屋敷跡は現在、西六小學校となつてゐる。



## 二五 左右子夫人と永別

長堀の新築は、壯齡四十六歳の翁の爲めには、意義多き一個の雄飛館である。然るにその工事中、糟糠の妻たる左右子夫人は、一寸した風邪が因となり、重きいたづきの床に臥することになった。翁と二十年間、喜憂苦樂を共にした愛妻の病に對し、翁は涙ぐまじき仲々の夫情を傾け、名醫といふ名醫の手にかけたけれども、回復の兆候なく、憂心惜々、日夜看護の限りを盡す中、東京品川に起死回生の醫伯ありと聞き、品川へまで連れ出し、手厚き診療を加へたけれども、天命致し方もなく、終に四十歳を一期とし、あたら白玉樓中の人となつた。「理性院順徳惠光信女」の法名が、克く夫人の全人格を象徴してをる。翁が亡き妻への手向草は、これから次ぎに、築き上げらるゝ成功の金字塔であらねばならぬ。

## 二六 持論の實現

明治三十五年を以て設立された、土佐電氣鐵道株式會社は、縣道潮江線の工事完成を俟つて、その線路に軌道を敷設し、電車は高知より此處に到る便も開け、且つ軌道の終點に棧橋を設けたので、土佐商船は従來の如く、孕に抜錨し、荷客を舁舟で集散する不便を避けねばならぬ事になり、翁の意見

に基き、錨地を棧橋に移すと同時に、棧橋に近接せる地面を買收して、倉庫と事務所を建設した。是において翁の持論たる海陸交通の連絡が取れるやうになり、三十九年、電鐵會社が増資を募集するに際し、翁の意見通り、土佐商船をして、十萬圓の應募を決行せしめた。電鐵の關係者は、横山慶爾、川崎幾三郎、松村寛藏、井上善次、片岡宇太郎、白井鹿太郎、中田勘左衛門、上田哲二郎氏等々、翁の友人、親戚筋であつたが、大阪に於て海運界に雄飛すべく、着々その地盤を開拓しつゝあつた翁は、電鐵の事業には關係しなかつた。こゝに翁の志望と、見識を看ることが出来る。

## 二七 反動の波を蹴る

三十九年は、政府が一般の私人から借り上げた汽船が、御用船たるの任務を解除せられた結果として、全國に船舶の餘剰を生じ、海運界は言ひ合せたやうに悲境に没落した。然るに土佐商船は左迄の負傷を蒙らず、それに前年から引き続き凱旋兵士の輸送などもあり、不思議に好成績を擧げてゐた際高阪丸も御用解除となつて戻つて來た。すると翁は早速それに大修繕を加へ、従前通り高阪間の航運に使用すると共に、此の年又た一隻の汽船を種崎三業組に注文するなど、翁の積極方針が戦後反動の波を蹴つて、益々躍進發展の一路に邁進した。

此の時に方り、土佐電氣鐵道會社の軌道は、高知を貫通して、東は後免町に、西は伊野町に達し、



翁の考案通り之が海陸の連絡となつて、運漕上にも一新紀元を劃したので、同社は海陸運送の最要地たる堀詰に社屋を新築すべく地所を講入し、永久的に堅牢なる本社及び倉庫の建築に着手した。

## 二八 沿岸の敵を屠る

翁の交通上に有する經綸が、かく着々實現の緒に就いた時、不慮の障害が惡魔の如くに跳梁し始めた。即ち同年八月七日に汽船宮津丸が突如來つて、西沿岸に航業を開始し、土佐商船に弓を彎ひたのである。抑も土佐商船が土佐航路を統一せし以來、又同社に楯を突き競争を試むるものは無く、同社の基礎次第に堅く、最早土佐の海には、反對汽船は出ないだらうと、縣民一般が考へてをつた途端忽然として宮津丸が現はれたから、縣民は寧ろ怪訝の念を起したのであつた。翁及び全部の重役も宮津丸の來航を聞き、鎧袖一觸と高を括り、社船九十九丸を附船として、宮津丸を追はしめたところ、同年十一月八日、又た々々永田丸と稱する汽船が東沿岸航路に見はれた。該汽船は、高知以東の各沿岸港に寄り、荷客を拾ふて大阪に航行するものだから、土佐商船は東西の腹背に、敵の汽船と競争をしなくてはならぬ形勢となつた。翁はこの形勢を看て取るや、窺かに長期抗戰の肚を極め、長陽丸をもつて永田丸に當らしむる策戦に出で、東西の競争は日々劇甚の度を加へたが、宮津丸は先づ疲れて十一月中旬に旗を卷き、土佐海から姿を消した。永田丸は十二月中旬まで辛くも持ち耐えたが、遂に

支ゆることが出來ず、航海を休止し悲鳴を擧げた。斯くて東西沿岸には、土佐商船に反對する船影を認めぬやうになつたから、翁はヤレ々と許り、大阪長堀の自邸で枕を高くし、天王寺へ別荘を營む例の作事癖が芽を吹き始めたが、豎子何事を爲すかと一撃の下に屠つた宮津丸と、永田丸が、土佐商船を滅亡に導く陳吳とならうとは、神ならぬ翁も、そこまでは氣が附かざつた様子である。

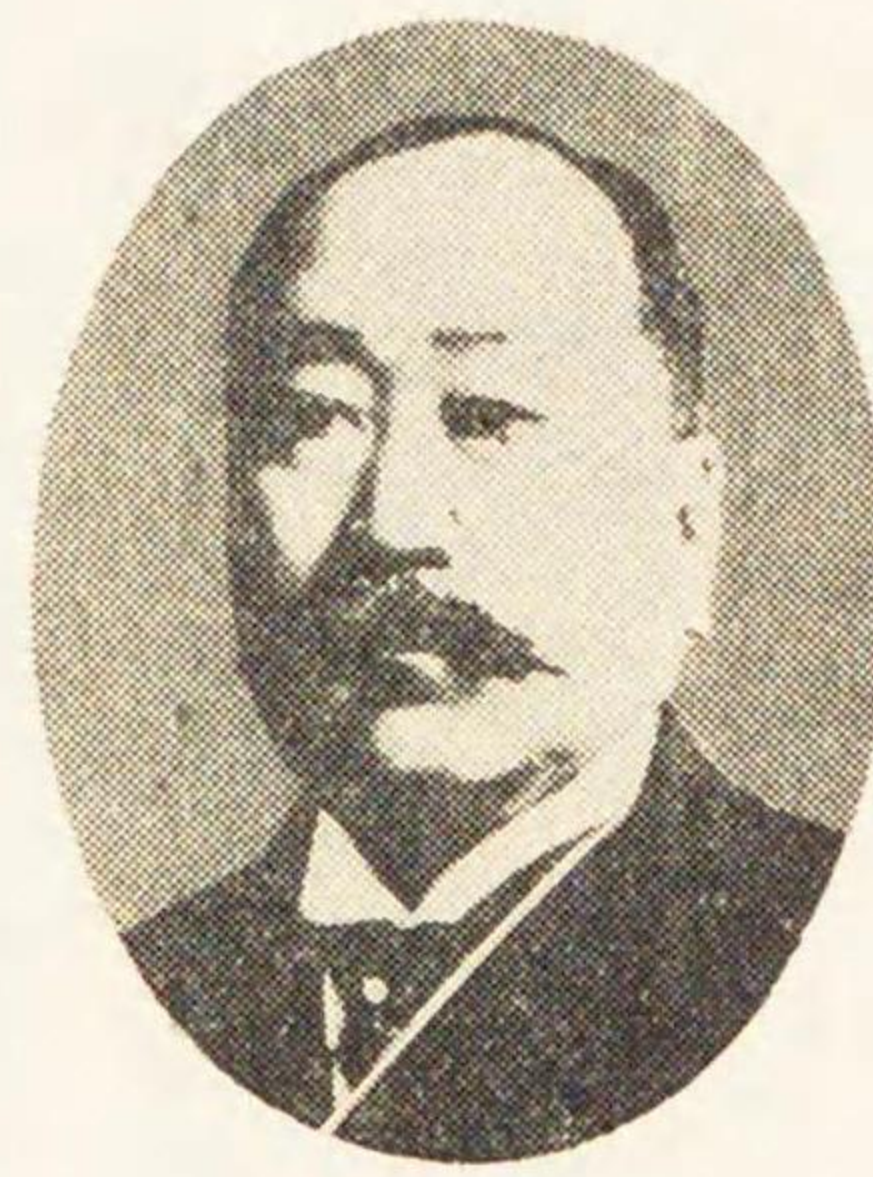
## 二九 安田汽船と相搏つ

明治四十年の春未だ淺き如月、風波靜かなる土佐海洋に、大鯨の如き怪物が、翅の如き巨鱗を振ふて波上に躍り始めた。土佐商船の重役並に株主は、この怪物の正體を見届けて震駭した。物に動ぜざる宇田翁も、自己の眼前に一大強敵が猛然として、現出した時、箸を投じて「奮戦！」の命を傳へた。

怪物の名は「安田組汽船」、即ち安田商會社の大阪運輸部が、汽船第七平安丸、盛運丸、幸盛丸、第四平安丸、神祐丸及び三省丸の大小六隻を一時に土佐航路に送り、高阪航路と東西沿岸航路に於て土佐商船壓迫の態勢を取つたのである。翁は敵船の噸數と速力とを調べたところ、自己會社のそれに比して、正に相距る優良船たることが判つた。無謀の戦ひは翁の與みせざる處ではあるが、強敵だからと云つて、屈服することは、翁の武士的氣魄が許さない。是に於て翁は、敢然天下の安田組を敵手



として、迎撃の命令を下し、雌雄を一舉に決せんとした。翁の眞勇は、この競争戦に一觸激發し、安田組の當事者を内心恐怖せしめた。だが土佐商船多數の重役、多數の株主は、丈夫の意氣地よりも、算盤珠の利害に重點を置きたがるのである。乃ち前に宮津、永田兩汽船と闘ひ、その創痍未だ癒へざるに、更に此の豪敵と鎬を削り、暫時間の競争による會社の損害莫大なりとの悲鳴を、頻々内輪から聞かざるゝに及んでは、常務取締役の責任として、此の輿論を無視する譯には參らぬ。是に於て翁は



片岡直温氏

意地づくの競争を諦め、死活の岐路に立つ會社を如何にするかに就て、直ちに衆智を集めた。そして緊急會議の結果、寧ろ土佐商船の事業を、關西の覇者たる大阪商船に譲與して、覆没を免がるゝのが賢明であるとの一致點に到達した。行ひに敏なる翁は、直に片岡直温氏を訪ふて、重役會議の結果をもたらし、大阪商船への交渉方を依頼した。片岡氏と翁とは、帝國商船以來別懇の間柄であり、容易に他人を賞揚せざる片岡氏も「宇田は信賴が出来る」と讃めてゐたから、一も二もなく「君の頼みなら」との前置詞を置いて承諾の旨を答へた。翁は大に満足の意を表し、一電の下に全重役を大阪に召集し、片岡氏の交渉に遺憾無きを期する一方、算盤上の問題は自らその衝に庸り、親交ある大阪商船の支配人山岡順太郎氏を對手に、得意の外交手腕を百パーセント發揮し

土佐商船株一株を現金三十六圓、即ち合計四十八萬一千四百圓を以て大阪商船に譲渡する契約が成立した。

實に明治四十年四月四日であつた。仍つて土佐商船は早速株主總會を開催して、該契約を承認の上任意解散をなし、所有汽船、高陽、土陽、長陽、九十九、高神、高阪、藝陽、幡陽及び新高知（合計噸數二千五百九十一噸）をはじめ、その他の財産を引き渡し、安田組をして茫然自失せしめたのであつた。安田組は、前年の十一月下旬以來、その無謀な競争の爲め、約七八萬圓の損害を招き、たゞに當初の目的を達する能はざるのみならず、新に強敵大阪商船を敵手とせねばならぬことに立ち至つたが、到底勝算の見込が無いものだから、全然屈服して無償退引を餘儀なくされ、翁の打つた先手に頭を搔くのみであつた。當時の新聞紙は、大阪商船が土佐航路の營業を開始するならば、安田汽船は即日同航路より引退し、新に高知に於て銀行を開始すべしと報じたが、當時土佐銀行と相對立せる高知銀行は、同年九月十日をもつて、安田家關係銀行の一に加はり、新聞の記事に裏書きをした。

### 三〇 感慨無量

土佐商船は、右の如くにして、名譽の退陣を爲すべく餘儀無くされた。左に宇田翁の執筆せる情理兼到の挨拶文を掲げる。



謹告

弊社儀

多年各位御眷顧の下に營業仕り、茲に八ヶ年の間、無事圓滿に此業を營みたるは、常に各位の御同情を寄せられたる結果にして、深く感謝する所に御座候、而して既往を回顧せば各位多年の御芳情に對し何等の酬ゆるものなく、却て從來の御眷顧に背き本月廿三日限り弊社營業の全部を大阪商船に譲渡し、長く各位と訣別を告ぐるの已むなき事情に遭遇したるは又是非もなき次第に御座候、想ふに我縣は從來交通不便の土地にして、商業の發達常に之が爲に阻害せられたるが故に、弊社は土佐海運の發達に努め、縣下商業の振興を期せしも、今や四圍の事情は之を許さず、弊社は茲に解散する事と相成候間、此段多年御芳情を辱ふせし各位に謹告仕候。

明治四十年四月廿二日

土佐商船株式會社

### 三一 識者の嘆聲

宇田翁が、土佐商船の責任者として、居常縣民の聲を尊重し、縣民の希望、要求を容れ、以て縣民の爲め利便を圖るに、如何に熱心であり、如何に忠實であつたかは、前掲の事實が雄辯に之を物語つ

てゐる。然るに此の縣民の味方たる土佐商船は、一朝安田汽船の侵入によつて可惜その全航路、全財産を擧げて、之を大阪商船に譲渡する窮餘の一策に出でしめた。そこで當然問題となるのが、何が土佐商船をして、窮餘の一策に出でしめたのか、換言すれば安田汽船の背後には何物が潜んでゐたか、これを解剖することによつて、翁の政黨的系统が自ら明瞭に描き出さるゝ關係となる。

土佐は憲政の祖國と謂はるゝだけあり、明治の初期から中期に至る時代には、理想振ひ政見も亦た詳しく、従つて政黨と實業の間には一線が劃せられ、政黨派の感情が、實業の埒内を侵すことは絶無とされてゐたが、時勢の推移に伴ひ、實業家中錚々の人物も、政黨の領袖をもつて目せらるゝに至りし傾向そのものが、遂に土佐商船の重役に波及し、反對の立場に在る政派から色眼鏡にて見られ、此の感情が本となつて、一部の人士から土佐商船の重役が、怨恨憎惡の的となり、此の反感の誘致によつて、安田汽船の襲來となつたことを知らねばならぬ。

×

端的に言へば、安田汽船の背後には、當時の所謂郡部派が策動した。郡部派の領袖中には、往年共同運輸や、高知汽船で、若き宇田翁に熱湯を飲ませた西山志澄氏もをつたが、この郡部派と對立抗争するものが、片岡健吉氏傘下の所謂中央派であり、兩派の血で血を洗ふ暗闘明闘は、各方面に浸潤し、會社も、銀行も、新聞社も、何れかの色を帯ぶるやうになつた。郡部派の眼には、一ヶ年に百



萬圓も儲かる土佐商船が、中央派の金庫たる如くに映じたこと、恰かもその昔、自由黨員の眼に、三菱會社が、改進黨の兵站部である如く映じたのと同様だ。無論これは一種の色眼鏡で、政黨の嫉妬的感情に因すること言ふ迄もない。當時の公正なる論客安藝愛山氏は「吁、土佐人は政争の内訌に依り土佐航路を永く他府縣人の手に委したり、蚌瀉相争ふて漁夫の利となれり」と長嘆した。だから行懸り上、一應本縣政黨の變遷史に筆を染めやう。

×

×

二位三位國の大臣も村長も

この心もてひとはすふへし

橋田東聲



畫 邦 雅 木 橋



## 土佐の政黨 (其一)

### 一 中央の三黨

「自由と愛國は、土佐の山林より出で、民權は佐賀の平野より出づ」明治十四年十月を以て、組織せられたる自由黨は、總理に板垣退助伯、副總理に中島信行氏、幹事に林包明、山際七司、内藤魯一、林正明氏等が選舉され、主として佛國大革命前後の政治論を祖述し、最もルソーの民約論を唱道し、一院制を主張したのである。之に對して、大隈重信侯も同志と相謀つて、立憲改進黨を組織することとなり、明治十五年三月十六日結黨式を擧げ、總理には大隈侯、副總理には河野敏鎌氏(高知市出身)が擧げられ、小野梓(幡多郡出身)・牟田口元學、春木義彰の三氏が掌事に選ばれ、秩序的進歩主義を執つた。自由、改進黨の兩黨に反對して、福地源一郎、水野寅次郎(高知市出身)・丸山作樂の三氏が、表面に立ち、背後の有力なる援助者に、谷干城將軍を得、國體上より忠君愛國を高調して、國粹保存論を高唱する立憲帝政黨は、明治十五年三月十八日を以て成立し、その黨議綱領を公にした。そして之に投ずる縣下の後進子弟ば、他日土佐國民派なる地方的政黨を結成した。

### 二 自由黨と政友會



明治三十三年十月、伊藤公が政友會を組織せらるゝや、土佐自由黨は擧つて之に投じた。然るに同三十六年に至り、公の黨首専制振りに、愛想をつかした片岡健吉氏は、斷乎として先づ政友會を脱した。次で林有造、山本幸彦、西山志澄、藤崎朋之、中澤楠彌太氏をはじめ、土佐自由黨は、先輩後進盡く相背ひて政友會を脱會した。

### 三 中央派、郡部派

是より曩き、土佐自由黨の内部には、二つの暗流があつた。それが板垣伯の政界隱退によつて、俄然黑白二道の大河となり、政友會支部内において、片岡健吉氏を仰がんとする中央派、林有造氏を擁する郡部派の二派に、劃然分離し、猛烈なる抗争を續けてゐたが、片岡、林兩巨頭と共に、二派も擧つて政友會を脱するに迫り、一時僅かに相接近せんとするかに見えたとあつた。

### 四 革新同志會

土佐國民派は、その後幾多の曲折はあつたが、明治二十五年二月の總選舉に、第一區から新階武雄第二區から片岡直溫、安岡雄吉、第三區から弘田正朗の四候補を立て、辛うじて片岡、安岡兩氏を當選せしめたるを最後の花とし、爾來幾春秋、縣下山林草澤の間、餘喘を保つのみで、敗殘の生命は、

革新同志會の下、谷將軍の指示により「踏まれても根強く忍へ道芝のやかて花さく春も來ぬへし」の希望を繋ぎ、遂に三菱系の大石正己氏を宗として、これと結び、明治三十五年八月、大選舉區の實施せらるゝや、十年雌伏の舊同志を糾合し、三菱の女婿加藤高明伯を代議士候補に迎え當選せしめ、斯くて漸く擡頭の機會を捉へたのであつた。

### 五 三派合同

中央派、郡部派、革新同志會―此等は孰れも地方の政派であつて、中央の政黨からは全く孤立してゐる。そこで従來の利害感情に超越し、關縣一致、新政黨樹立目標の下、明治三十六年八月、三派合同、茲に海南俱樂部の創立を見るに至つたのである。三十六年は、日露開戦の前年だから、宇田翁は、土佐商船の専務として、大阪を本據に、全魂を海運業に打ち込んでゐた際だ。

### 六 郡部派の頰冠

海南俱樂部の成立後間もなく、片岡氏は病魔のため長逝せられたのであるが、舊郡部派の人達は、何か考ふるところのあつたものか、遽かに新政黨樹立を一擲し、海南俱樂部を脱して、政友會に復黨した。郡部派の光森徳治氏は「われゝは、頰冠をして、古巢へ戻つて行く」のだと云ふた。同氏の



頼冠論は、當時賑かな話題となつた。是に於て土佐自由黨は、截然として二分せられた。

### 七 實業家團

明治二十五年の交、高知市の少壯實業家の間に「一日會」なる實業家の團體が生れた。その牛耳を執るものは、横山宗太郎、中山友治、竹村與三兵衛氏等で、六先輩に盲従の夢より醒め、新高知市を建設する標榜を以て、理想實現の先行手段として、同志を市會議員に送ることに努めた。六先輩とは片岡健吉、林有造、竹内綱、山本幸彦、西山志澄、山田平左衛門の謂ひである。そして其の先輩として、土佐銀行の隣地に、高知毎日新聞を創刊し、六先輩の牙城土陽新聞に、對抗する氣勢を示した。これが抑も市の實業家が、政治に關係する最初の動きだ。

縣政界の三派が合同して、海南俱樂部を創立した頃、一日會の系統に屬する實業家の人々は、中央における三菱旗下の土佐先輩に接近し、それによつて、縣下産業交通の進展興隆を策すべく、豊川良平、仙石貢氏等に歩み寄つたのである。しかし一面、縣内にあつては、政治的見解において、海南俱樂部の人達と、意氣投合するものが出来、郡部派離脱後の海南俱樂部は、實業家團の参加を得、三位一體の觀を呈した。

實業家團の代表的人物は、横山慶爾、宇田友四郎、井上善次、川崎幾三郎、松村寛藏の諸氏だ。この顔觸れを見ても判る通り、郡部派の嫉妬的感情が、土佐商船に向けられたのは、板垣伯の所謂「理想振はず、政見詳しからざる」當時において、或は必ずしも無理でなかつたかも知れないが、今日から當年を回顧し、土佐人の獨占航路を、政争の犠牲たらしめたことは、残念でならぬ。

土佐商船の解散した、翌明治四十一年五月の總選舉には、舊郡部派は、市部から山本幸彦氏、郡部から西山志澄氏を推し、政友會の町田日龍、細川義昌の二氏は、ことさら戊申俱樂部の看板を掲げて立候補した。市の實業團は、郡部派に一泡吹かすべく、仙石貢氏を出馬せしめた。高知市は、仙石氏對山本氏の一騎打となつたが、商業會議所はじめ、市内の各實業團體は、財界革新の目的を以て、仙石氏を推すとの決議をなし、積極的に應援したので、開票の結果、凱歌は無所屬を標榜した、仙石氏に揚つた。此の一方、第二選舉區とも見るべき郡部は、海南俱樂部より推した大石正巳、富田幸次郎和田尊義の諸氏と、戊申俱樂部から名乗りをあげた細川、町田二氏が當選し、郡部派の擁立した候補者は、枕を並べて討死した。土佐商船系の實業家にして見ると、江戸の響を長崎で討つた感は、恐らく絶無でなかつたらうと想はれる。



## 八 所謂三菱色

土佐國民派が、加藤高明伯を本縣選出の代議士たらしめ、高知實業團が、仙石貢氏を高知市から當選せしめた事によつて、土佐と三菱との關係は、非常に親密となり、郷土眼に照らした場合、漸く本然の姿に歸つたかの如くに見えたのである。人間には、必ず因縁といふものが附き纏ふ。因縁は不可思議、不可稱で、理窟では割り切れないけれども、決して偶然の所産では無い。宇田翁が、新スタートの最初に入社した日本郵船會社は、事實において、三菱汽船の名前變へをしたものであることは、既述の通りで、郵船會社の成立するや、政府は岩崎彌之助氏に、その社長たらんことを要望したけれども、氏は固辭して承けず、三菱側の代表者として

莊田平五郎、吉川泰次郎、内田耕作、近藤廉平、淺田正文

の諸氏を推薦し、自らは亡兄の遺言を守り、三菱の財産を監理する爲に、當分退いて守成の地位を擇んだのである。彌之助氏は世間から一生涯保守退嬰をもつて、終始した人のやうに云はれてゐる。殊に氏は政治嫌ひであつたなど云はれてゐるが、それは甚だしい誤りで、岩崎家の今日の富は、實際氏の積極的經綸によつて、致された部分が多く、政治に對しても寧ろ兄彌太郎氏以上の大きい關係を持つてゐた。明治二十一年の黒田内閣、明治廿九年の松隈内閣、明治三十一年の憲政内閣ともに三菱

と多大の關係を有し、その成立の背後には彌之助氏の政治的理想が十分に働いてゐたことは確實で、その參謀に土佐出身の大石正巳、豊川良平氏の在つたことも、亦た著名なる事實とされてゐる。

×

現代評論家の中には、〃世人は大正十四年、加藤高明伯の内閣が、成立した時をもつて、始めて三菱内閣が出来たもの、やうに思ふてゐるやうだけれど、それは間違ひであり、明治廿一年前後の三菱と薩派との關係から云ふと、黒田内閣は、正しく第一次三菱内閣の誕生であつた。三菱内閣としては、少しく出来損ひであつたには相違ないが、ともかくも、三菱系の黒田清隆、大隈重信兩巨頭を主力とする内閣であつた〃と言ふてゐるものがある。三菱内閣といふ言葉には、感心しない點もあるが、三菱色を表現するには、或ひは面白い代名詞として役立つかも知れぬ。

明治二十二年、憲法が發布せられ、政界の鬪士謀將、後藤象二郎伯の大同團結に馳せ參じ鬱然たる勢力となるや、大同團結を破壊する爲に政府の描いた筋書が、後藤伯の入閣で、當時秘密裡に政府と後藤との間を奔走したのは、三菱の元勳川田小一郎氏と豊川良平氏である。大石正巳氏は、元々後藤、大隅を結びつける希望で、大同團結の幹部をつたが、黨の解體を見届けて外國に遊んだ。後藤伯の入閣は、さらぬだに濃厚な黒田内閣の三菱色彩を、いよ／＼濃厚にしたものだつた。此時薩閥中の策士は「日本郵船會社、日本鐵道、日本銀行とも、既に皆なその實權、土佐人の手に歸したるに、今又



た逓信省を後藤に渡すは危険の甚しきものではないか」と言つたが、成程この時の日本銀行總裁には川田小一郎氏が居り、日本鐵道の社長には、小野義真氏が座り、三菱一色に、塗られてゐたのだから薩派の焼もちは無理もない。

豊川良平氏は、議命前の政治運動を清算して、銀行家に早替りした。川田氏が日本銀行總裁になつた時、銀行事業の経験がないことを豊川氏に話すと、氏は特に町田忠治氏（現民政黨總裁）に頼んで翻譯させたギルバートの銀行論の第一章（銀行行政）を示して、これが銀行家の虎の巻だといつたさうである。そして夫子自らは三菱を代表して、一般の財政經濟に關する政治向の運動に身を入れた。言ひ換へれば、三菱の大藏大臣たると同時に外務大臣といふ形で、或は東西實業家の聯絡を策し、或は政治思想を銀行家の間に鼓吹し、以て財界の指導者たり、建設者たるの地位を得たのである。そして感心なことは、斯く多忙の身に拘はらず、少年時代に宇田翁の生れた岸本で馴染となつた力士協の磯を、遂に天下の海山に取り立て、ますく最負にした終始一貫のその情味だ。

×

豊川氏が、銀行業の顔役で花を咲かせてゐた頃は、三菱と三井が九州の炭坑を争ふ最中であつた。明治三十年、三菱は筑豊鐵道が福岡縣の石炭輸送に大關係あるを認め、會社が切りに人を以て、その經營難を訴へ、救助を求めて來るのを好機として、之に資本を注込むことを承諾したが、その條件と

して、經營の實權を三菱の手に收め、後藤象二郎の玄關番で、帝國大學理學部土木工學科を出で、職を逓信省に奉じてゐた仙石貢氏を社長として派遣することゝなつた。仙石氏の筑豊鐵道に入つてからは、三菱といふ日本一の大富豪を後援として、その施設を改良し、社務を刷新するものだから、成績もメキ／＼と上り、幾もなくして、その勢は九州の鐵道界を風靡するに至り、九州鐵道から先づ合併を申込み、その相談が纏つて仙石氏はやがて更めて九州鐵道の社長に任じ、三菱は略々九州の鐵道を支配することが出來た。

×

岩崎彌之助氏が、自ら出馬して、松方、大隈の提携を策したのが恰度この前後で、即ち第二次伊藤内閣の末期に屬する。陸奥宗光伯が病のため外務大臣を辭するや、伊藤公は大隈侯をその後繼者たらしめんとし、之を内務大臣の板垣伯に諮つた。ところが板垣伯は極力大隈侯の入閣に反對した。若しこの時、板垣伯にして大隈侯の入閣に異議を唱へなかつたとしたならば、岩崎彌之助氏が理想とした伊藤、大隈聯立の内閣は立處に實現されたのであつた。然るに板垣伯の頑強なる反對の爲に、その實現を見ることなくして了つた。こんなことで少し焦り込んだ形でもあらうし、守成家として一般に知られてゐた彌之助氏も、この時ばかりは自身出馬して、先づ大隈侯と松方伯とを結束させ、更に之を後藤伯と提携させることにより、一舉にその宿昔の理想を實現させようとした。



明治二十九年八月三十一日、伊藤公は彌之助氏の意中を酌まず、例によつてサラリと内閣を投げ出し、九月二十八日には、松方内閣が成立した。松方内閣の成立は、伊藤公を逸した點に於て彌之助氏にとつては、決して成功とは云へなかつた。併し大隅侯は兄彌太郎氏の時代から三菱の育ての親でもあり、又た一面から云へばその最負角力でもある。松方侯も今は單純な薩閥の一巨頭でなく、彌之助氏の長女繁子と、松方の二男正作氏との結婚は、この前後のことであり、明治三十年十月には、繁子が既に長女博子を生んでゐたことから考へると、兩家が姻戚關係にあつたことが判る。松隈内閣が成立した時、彌之助氏がシャンパンを抜いて心祝ひをしたと云ふのは、さもあるべきことである。

×

松隈内閣の次が、第三次伊藤内閣、その次が大隅、板垣提携の憲政黨内閣、それから第二次山縣内閣の出現となり、明治三十三年九月、伊藤公を黨首とする立憲政友會が組織された。創立委員は各方面の人材を網羅する方針の下に、當時大阪の實業界に活動してゐた片岡直溫氏に對し、入黨の懇談があつた。

伊藤公の志が存しらるゝところは、私にも熟く諒解される。故に若し公の志が、その創立趣意書に記された通り、堂々と實際に行はれたであらうならば、私は、たとひ實業界において、如何に窮地に陥り、不利を蒙らうとも、履を倒にして、公の陣營に馳せ參じたい。しかも如何にせん、今日

までの経過すら、既に事志と反して、公の宣言を裏切り、その新政黨なるものは、公がその宿弊に困惑せりといふ自由黨そのものを基礎として、創設されんとするに過ぎないではないか。他は知らず、積年の政敵たる自由派のお先棒となつて働くなどいふことは、土州の勤王黨より出で、國民派の精神を支持し、爾來今日まで終始一貫して、その主義、主張を變ぜざる自分としては、よし首がちぎれても、甘諾し得べき事柄でない。

(片岡直溫氏著回想録の一節)

右の理由を以て斷然謝絶した。

×

第四次伊藤内閣が倒壊し、明治三十九年一月、第一次西園寺内閣が成つた。そして議會では、前内閣の立案した豫算の踏襲が、無事に通過したかなれど、新に政府の提出しようとした、鐵道國有案には、外務大臣加藤高明伯が、閣内から猛烈に之に反對し、閣議が之を排して、國有を斷行しようとするに及び、加藤伯は、遂に外相の職を辭して、その主義に殉じたのであつた。

×

當時、國內の主なる新聞紙は、それ／＼その立脚するところに従つて、鐵道國有の是非を論じ、或るものは、力を極はめて政府を攻撃した。就中「萬朝報」の如きは、反對の急先鋒で、加藤外相の辭職は、立憲政治家の最も公明正大な、模範的の進退であるとして激賞した。爾來「萬朝報」の黒岩周



六氏は、終始一貫して加藤伯を支持し、延いて桂公の同志會に味方し、憲政會を控援して、渝るところがなかつた。同じく土佐人とはいへ、黒岩氏の三菱色は、一異彩であつた。

### 九 銀行の黨派色

日露戦争前後、土佐銀行の常務取締役は、岡崎賢次氏であり、高知銀行の頭取は、中澤楠彌太氏であつた。岡崎氏は中央派の領袖、中澤氏は、郡部派の中心人物たる關係に絡み、兩銀行にも、各々黨派色が附着する傾向を帯びて來た。土佐商船解散の直後、郡部派の山本忠秀氏は、高知銀行を、安田保善社に、結びつけることに成功した。土佐銀行は、創立當初、既に三菱の元老、川田小一郎氏が、有力なる助言者たりし爲め、世間からは、三菱系の銀行として觀られ、後ち高知實業團の重立つ人士が、その背景をなすに至つて、益々その色が濃くなり、同時に黨派色も濃くなつた。

### 一〇 高知と土陽

郡部派脱退後の海南俱樂部を、假りに非政友派と稱し得べくんば、明治三十七年、岡本方俊氏を社長とし、富田双川氏を主筆として生れた高知新聞は、非政友派の機關紙と稱して可いだらう。當時の土陽新聞は、山田平左衛門氏を社長として、宇田滄溟氏を主筆とする政友派の機關紙であつた。滄溟

氏は、三菱嫌ひにおいて、格別に有名であつたところ、政友、非政友の抗爭白熱化するや、得意の攻撃的筆陣を張り、宇田翁等の屬する實業團の人々を、金權派呼ばりし、辛辣且つ感情一徹の論説を掲げた。その頃の高知新聞は、創業の際で、經營に骨の折れる絶頂であつたが、土陽新聞の毒つき方が、餘りに酷いものだから、翁等も自然に高知新聞を援助する氣になつた。他日翁が人に語つて「高知新聞の岡本や富田は、土陽の宇田滄溟に感謝せねばならぬ、僕らが高知新聞に肩身を入れるその動機を作つたものは、土陽の主筆宇田滄溟で、彼れの金權派呼ばりには少々腹が立つた」と云つたのは、這の間の機微を洩らしたものだと思ふ。

×

×

延臣謹奏水禽肥。

食味誰知兆式微。

今我來遊古羅馬。

低回唯誦鷓鴣飛。

黒岩 涙香



# 土佐電氣時代

## 一 四代目社長

宇田翁が、土佐電氣鐵道株式會社の社長に當選したのは、明治四十一年六月十五日であつた。同社は實に明治三十六年七月八日の創立で、初代社長が横山慶爾氏、二

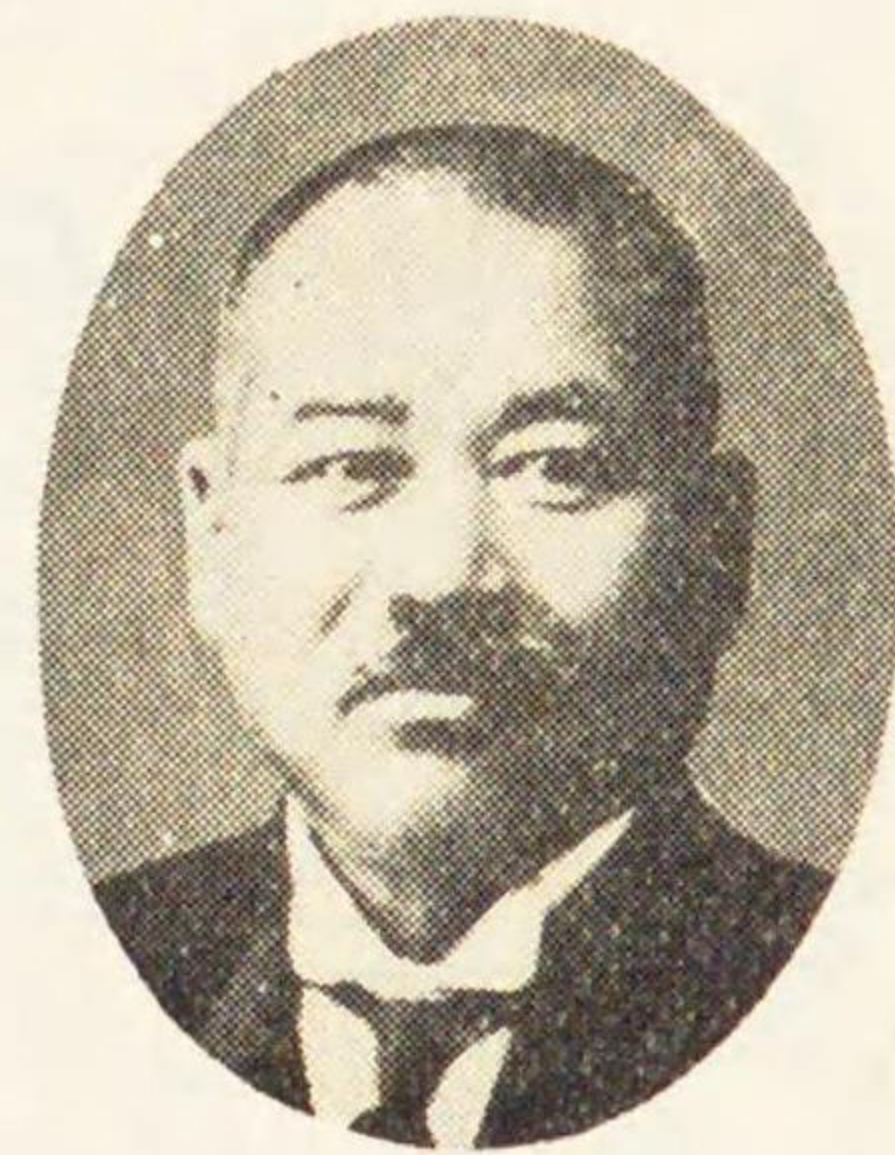


氏爾慶山横



氏郎太宇岡片

代社長が川島幸十郎氏、三代目が復た横山氏、四代目の社長が、即ち宇田翁といふ順番となつてをり、創立後六年目に、社長として迎へられたのである。同社取締役故片岡宇太郎氏が、曾てその回顧談に於て「創業當時はごたく／＼してゐた。明治四十一年、社長横山慶爾君が病死した。あとは誰がやるか適任者が無い。そこで土佐商船の方で、懇意にしてゐた宇田友四郎君を、大阪から無理無體に迎へて陣容を立て直し、それから三菱から借入金をし、軌道の延長、電燈の普及を計り、段々と利益の緒につくやうになつたものです」と述べたのが、簡にして要を得てゐる。創業當時ごたく／＼してゐた



氏藏寛村松



氏郎十幸島川

といふのは、多分重役間に於ける上街組と、下街組の勢力争ひを指したものであるかと思ふが、松村寛藏氏が、上街組の牛耳を執り川島幸十郎氏を社長の椅子に据へた時代を、世間では松村内閣と稱したものだ。同社の南應接室、歴代社長の寫生畫中に掲げられた、川島幸十郎氏の肖像を見た者は、自ら這中の消息を默解するであらう。然るに翁の社長就任と共に、それらのごたく／＼は、綺麗に解消して、春風駘蕩の明朗舞臺が、展開せられたのであつた。

## 二 土佐電氣の濫觴

こゝで一應、土佐電鐵の沿革を回顧してみたい。抑も本縣電氣事業の濫觴は、明治三十一年、縣財界の巨頭達によつて、計劃された土佐電燈株式會社で、發起人は、川崎幾三郎、横山慶爾、山本忠秀、濱田幸右衛門、中澤楠彌太、千頭徳雄、濱田彦藏、宮地紳、松村俊男の諸氏が名を列してをり、資本金十萬圓、總株數二千株とし、發起人共僅か十五名の株主に引受を了し、川崎氏の名を以て電燈事業開始後、受授精算を了へ、同年六月、事業を川崎氏より會社に引渡し、翌三十二年六月、社名を土佐電氣株式會社と改稱、明治三十六年に至り、新に土佐電氣



鐵道株式會社起り、軌道營業開始に際し、土佐電氣會社は、大川筋火力發電所のボーラー餘力を供給し、同發電所内に電鐵用の發電機を据付けしめ、相互姉妹關係を有したが、寧ろ經營を合同するを得策とし、當時土佐電氣會社資本金拂込濟高五萬圓の内、四千圓を切捨て、土佐電鐵の全額拂込濟株式九百二十株、即ち四萬六千圓を割り當て、明治三十九年六月三十日、土佐電氣鐵道會社に合併し、資産負債一切を引繼ぎ解散した。土佐電氣會社創立より、解散に至る迄の間の役員は左の諸氏であつた。

取締役川崎幾三郎、横山慶爾、中澤楠彌太、山本忠秀、濱田幸右衛門、岡崎賢次、松村寛藏、野中幸右衛門、川崎庄五郎、野町俊衛、橋本瀬也、監査役山本逸郎、檜垣正義

然るに、明治三十五年頃は、土佐政界の謂ゆる暗闘時代に屬して藤崎朋之氏等の中央派と、中澤楠彌太氏等の郡部派が、血で血を洗ふが如き苛烈なる抗争を演じたその餘波が、實業界にも押し寄せ、中澤、山本、檜垣など郡部派の代表的人物は、三十六年前後、言ひ合はしたやうに、土佐電氣會社を離脱して了つた。宇田翁は、土佐にゐなかつた關係もあらう、この頃は、土佐の内訌には、交渉がなかつたやうだ。

X

『土佐電氣沿革小史』によると「革新俱樂部に於ける交通機關開發の謀議」なる項下に  
土佐當年自由の士は、先輩片岡健吉先生を擁して、多くは政友會を脱黨したことは、今尙ほ政黨

史上の話材とせられてゐるが、此の土佐脱黨組の策源の本據として設けたものが、堺町の革新俱樂部（中央派の俱樂部）であつたといふことである。偕て此の俱樂部には、財力あり、信望あり、且つ達識なる横山慶爾、川崎幾三郎氏の如き人物や、同氏等と事業界に相提携せる人士も亦た自然俱樂部に出入し、土佐の發展を基調として、諸種の談合を行つたものであるが、中でも縣の主都たる高知市の海陸交通の連絡設備を速成するを以て、喫緊の問題なりとなし、資を投じて先づ浦戸港内西孕に棧橋を設け、且つ棧橋より市に向つて軌道を敷設し、亦た曩に土佐電氣會社が特許をうけ、未だ工事に着手せざる本町線と連絡するは固より、進んで郡部に延長し、蒸氣鐵道開通に當分見込なき本縣に於て、一步先んじて電氣鐵道を開通せば、市發展の爲め、効果甚大なるものは疑ひなきのみならず、本縣の面目としても、有意義なる企てであるとなし、當時革新俱樂部の幹事であつた上田保氏に、之が實施調査を囑した。

といふ記事を見受ける。かゝる由來のもとに、此の劃期的事業が創設せらるゝことになつたのであつた。

### 三 電鐵の創業

時は明治三十五年十月、川島幸十郎、川崎幾三郎、横山慶爾、松村寛藏、野中幸右衛門、白井鹿太



郎、井上善次、片岡宇太郎、中田勘左衛門、上田哲二郎、野村牛造の十一氏が發起人となり、上田保氏創立委員となり、資本金十萬圓の土佐電氣鐵道創立計劃を發表し、資本家の多くが成否觀望の眞只中に、敢然株式募集に乗り出し、凡有る辛酸苦楚を嘗めた揚句、三十六年七月八日、創立總會を開き愈々資本金十萬圓の土佐電氣鐵道株式會社が、海南の地に呱呱の聲を擧げ、上田保氏が支配人に就任しその他の陣容調ひ、同月十一日設立登記を了し、直ちに軌道敷設、棧橋架設に着手することゝなつた



上田保氏

- として一)潮江線及本町線、二)潮江線複線變更、三)潮江、本町兩線連絡、四)伊野線延長、堀詰、五)丁目間複線變更等の擴張發展を着々實行しつゝ、明治四十年二月には、既に資本金一百萬圓の會社となり
- (一)電氣鐵道並に自動車に依り、旅客の搭載及び荷物の運送、
  - (二)棧橋業、
  - (三)電燈點火及び電力供給が、その營業科目となつてゐた。

#### 四 多事多難の電鉄

明治四十年の下半年から、四十一年の上半期にかけ、土佐電鐵會社は中々に多事であつた。乃ち四十年七月に、專務取締役清水源井氏が辭任し、その八月二日には、取締役の辭任に依る改選が行はれ取締役社長横山慶爾、取締役白井鹿太郎、川崎幾三郎、中川治平、片岡宇太郎諸氏の就任を見、同月

十五日に、事務部長弘瀬重正氏辭任して、別府鹿太郎氏その後を襲ひ、翌十六日、監査役辭任に依り改選の結果、近森虎治、濱口恒十郎兩氏が就任するなど、人事に異動多き一方、伊野線第二期工事及び其他の工事に拍車をかけ、同年下半年には、配當率年二分の成績で越年した。そして翌四十一年二月には、啗内、枝川間が開通し、伊野より潮江棧橋間の全通となつたが、五月二十日、社長横山慶爾氏病の爲め、終に逝去され、多事多難の同會社は、社長の後釜に就き大いに頭腦を悩ました。然し縣内において、適任者を物色することが出來ず、大阪に在つて雄飛中の宇田翁に、白羽の矢が立てられた。仍つて六月十五日の臨時株主總會において、満場一致、翁の社長就任を懇請することゝなつた。

#### 五 當時の翁

大阪を舞臺として羽翼漸く成りつゝあつた翁は、西長堀に邸宅を新築して間もなく、天下茶屋へ、豫算三萬圓の別荘を營み、知人連間では、益々作事狂の名が高くなつた。翁の下に、土佐商船大阪支店詰を勤めてゐた岩原鹿太郎氏(高知市田淵に現住)は語るらく

宇田サンが家を建てる時は、先づ賣る時のことを考へて工事に取リかゝります。そして値好く賣るが爲めには、最も家相に注意を拂ふことが大切だ。大阪人は、家相が兎ても八釜敷いからとて、天王寺へ普請をせらるゝ際には、専門家に頼んで、家相を觀てもらひました云々



翁の家僕たりし、島崎丑藏老も、次のごとく語つた。

天下茶屋へ、別荘を建てらるゝ時には、敷地に一萬圓、家屋に一萬圓、庭園に一萬圓、都合三萬圓といふ見積りで、始められましたが、庭の石は、大和の吉野川から取り寄せました。建て、間もなく、買手がかりました。對手は後家サンでしたが、宇田の旦那が「奥サン、四萬圓なら賣りましょう」と言ふと、そつくり買ひました。一萬圓儲けたわけです。只今土佐太夫サンの住宅となつてゐるのが、その家であります云々

斯く、大阪で家も建て、見たり、又た本腰で、宇田商船部の發展を念がけてゐた際、土佐電鐵社長横山慶爾氏が亡くなられたので、止むを得ず土佐へ歸らねばならぬことになつた。翁の回顧談中「明治四十一年に、横山君が死んだので、その葬式に参列する爲めに歸つたところが、電鐵の社長にとの話がありました。わたしは、そんな思ひよりがなく、又た大阪で事業をしてゐたので、其の方も見ねばならぬし、幾度も斷つたが、どうしてもきかんきに、結局月の中に、十日か十五日か出勤するといふ約束で、社長をなすくりつけられて、大阪へ歸つた。こんど来て見ると、總會まで居つてくれとの事で、やれるもんかのうし、とうとう日勤する様になつた」とあるので、當時の真相が、ハッキリ判る。



雪舟畫



## 六 大阪引揚げ

人間には運命が付き纏ふ。宇田翁は大阪を足場として、思ふ存分活動したかつたに相違無いが、運命の神は、とうとう其の志を成さしめず、郷土の事業に巨腕を揮はしむべく、明治四十一年の夏、令息耕一氏を伴れ、高知に歸らねばならぬやうに、導いたのである。時に翁の齡四十九歳、耕一氏の齡五歳。當時の耕一氏に就き、島崎丑藏氏は語る

私共夫婦は、大阪で耕一様の御守役を申付かつておましたが、兎ても御利發、御元氣一杯の御生れで、ケチ／＼した事が大嫌い、饅頭や餡パンを差し上げる場合にも、紙袋の中から一つ／＼出しては御氣に召しませぬ。十入つてをらうが、二十入つてをらうが、紙袋のまゝでなければ、何うしても承知なされませんでした。その大様大度おほまうの御氣質は、且様那おほまうそつくりぢやと、毎々愚妻と話し合つたことでした。

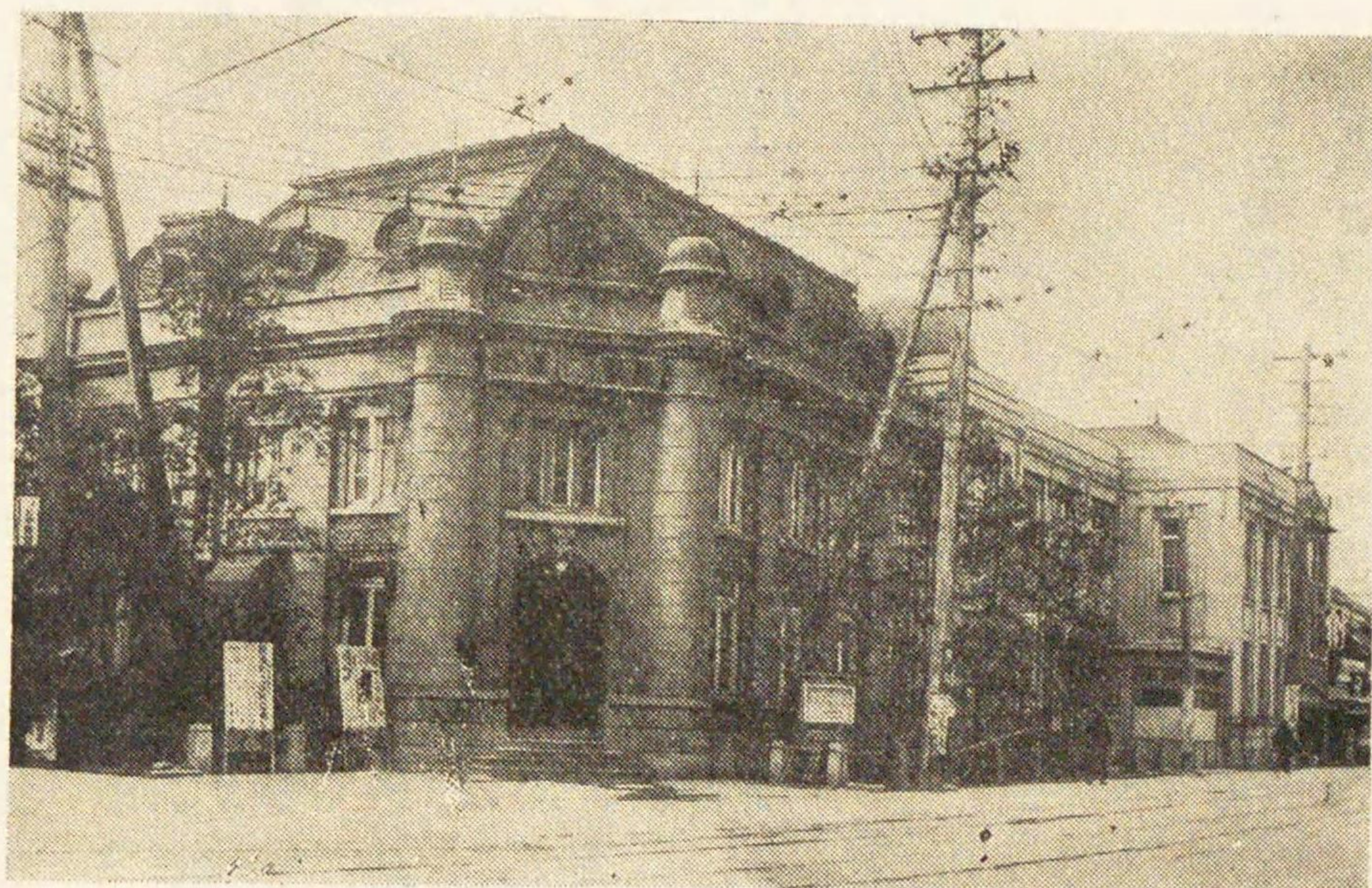
## 七 最初の果斷

土佐電氣鐵道株式會社の事務所は、中島町二百六十四番地（今の電氣會社消費組合賣店の建物）に在つた。然るに翁が社長に就任して間もなき同年十月、堀詰停留場の南側（現在の場處）に移轉した



翁は土佐商船の常務取締役時代に、商船の社屋を、海陸運送の最要地たる堀詰に新築すべき必要性を説き、本町三百三十一番地から、中島町二百六十三番地に跨る八百二十一坪の地所を、三萬七千圓に購入し、永久的に堅牢なる本社、及び倉庫等の建築に着手したのであつた。ところで工事緒に就いたばかりの處へ持つて来て、怪汽船宮津丸が突如姿を現はし之が意外にも、土佐商船を解散に導く、陳吳となつた爲め、その地所、建物は、一時大阪商船の有に歸してゐた。土佐電鐵社長たる翁の眼には、商船時代に考へたと、同じ考へ方が、矢張り浮かんで來るのである。是に於て斷乎俗論を一排し、自己の信念通り、其處を電鐵の城廓と定め、土地、建物、價格七萬五千圓、これを十五年賦、利子四朱五厘を附加して、償還する條件で、大阪商船より買ひ受け、落成

土佐電氣株式會社



を待つて移轉したのであつた。移轉に就ては重役間に反對論が強かつた。併し伊野線既に開通し、後免線亦た近く開通せねばならず、高知市を中心とする東西の軌道が、文字通り海陸の連絡となり、運輸交通上、一新面目を打開せんとする今日に於て、海陸運送の最要地に本社を置くことは喫緊事である。それに新に土地を物色し、新に建築を始めるよりは、遙かに得策であるとの固き自信を以て押し切つた。こゝに他の追隨を許さざる先見の明と、そして「われ縮ければ千萬人と雖も往かん」の勇猛心を以て、とうとう衆議を移轉論に纏めて了つた。翁の回顧談中に

今の本社の建物も、あれはもと、商船會社のものだつたが、何んでも建てかけて仕上げもせず三年程もほうつてあつた。それを十五ヶ年の割拂ひといふ事で買ひ取つた。これを買ふにも、初めは重役會で否決されたが、幾回も交渉してやつと纏つた。建てるより、その方が、ずつと利益だらう。

とある如く、如何に自己の信念に生きたかを、如實に物語つてをる。土佐電氣沿革小史の「電車開通に依り、附近地價騰貴したので、年賦償還を終へたる大正十一年頃に至りては、實に數倍の評價格を唱へらるゝことゝなつた」の記事は、果然その明と斷とを、いとも鮮やかに裏書きしてゐる。翁の眼力は、恒に將來を透見するから敬服させられる。



### 八 中央政界一瞥

翁が、電鐵社長の椅子に、腰を据へた當時の縣政界は、中央派、革新同志會、實業家團三派一丸の海南俱樂部派と、郡部派の變形した土佐政友派とが、相變らず反目を續けてゐる暗闘時代に屬し、最初堺町の革新俱樂部内から、呱呱の聲を擧げた形の土佐電鐵は、事毎に政友派の嫉視妨害を受けるべき、喬々たる珍木の頂きに立ち、時々金丸の厄を被つたものだ。更らに中央政界の状態に、眼を轉ずるならば、翁の社長就任二ヶ月前、即ち明治四十一年五月の總選舉には、政友會が絶對多數を有した爲め、翁の社長就任と同年月、即ち明治四十一年七月を以て成立した桂内閣は、足かけ四ヶ年の施政に於て、止むを得ず政友會と情意投合の妥協政治を行ふたので、内務大臣の平田東助も、政友會の制肘を免がる、能はず、従つて擴張途上の土佐電鐵は、内務大臣の許可を要する施設上、言ひ難き不利不便を感じたことを想像し得らるゝのである。桂内閣の前は西園寺内閣で、内閣互解の因が、鐵道國有法案に強く反對した三菱の女婿加藤高明伯の桂冠にあつた事は、天下周知の事實とされてゐるが、加藤の辭職後、豊川良平氏が躍起となつて暗中に飛躍し、九州鐵道の仙石貢氏が、來るべき總選舉に高知から打つて出ようとの、準備をさゝぐりなかつた裏面の情勢に着目すれば、當時の或る新聞紙が明治四十一年五月の總選舉は、鐵道國有後、最初の總選舉であつて、三菱が政友會と相對峙すべき一

大政黨を組織するか、若しくは其の指導權を掌握すべき必要を痛感してをるらしいとの放送を行つたのは、財閥本位の觀點として萬更らの出鱈目でもなかつた。と云ふのは、それまで三菱の忠實な一技術者であり、鐵道事業の管理者であつた仙石貢氏が、政治家として乗り出したのが此の時であり、同氏の外に、片岡直温、富田幸次郎、和田尊義等の諸氏も、三菱の外務大臣を以て自ら仕じた豊川良平氏との間に、多少の接觸がある如く、政界の一部に噂されたのも此の時で、此等の土佐派が中堅となつて、同年八月二十五日に、戊申俱樂部を組織し、豊川氏が俱樂部の黒幕に在りて、熱心に劃策しつゝあつた點から云ふと、この新政黨はやがて、桂公の組織せられた同志會の前身とも見做すべきもので、土佐人に取つては、特に重大なる意義を有する譯だ。

#### 仙石貢氏の登場

宇田翁は、仙石貢氏と非常に親密なる交際を續け、後には大學出の御曹子耕一氏を、仙石氏の手に乗せた程の間柄であつた。一言にして悉せば公私共親族以上の關係を有つてゐた。だから此處で簡単に仙石氏の事を叙べておく。氏は明治四年、十五歳で千頭清臣、福富孝季、弘田長の學友と相携えて上京し、姻戚の後藤象二郎家に、書生奉公として住み込んだ。象二郎の祖父には三人の娘があり、その二女が藩士仙石寅治に嫁し、三女は吉田東洋に嫁した。仙石貢氏は仙石寅治の一族で、氏が上京して後藤家に住込んだのも、そんな血縁關係からであつたらうと想像されるが、後藤が三菱



會社の生みの親であること、岩崎家の近親であることから考へるなら、後藤伯の家族同様にして養成された仙石氏と、三菱との關係は自ら明かであらう。その後氏は大學豫備門の官費生となり、天性數理に詳はしき故を以て大學工科に入り、明治十一年卒業後、東京府の雇となり、土木工事の事を掌つてゐた。間もなく鐵道局に迎へられ、歐米各國の鐵道視察を命ぜられ、鐵道經濟の事を調査して歸朝した。尋いで鐵道運轉課長に拔擢せられたが、日清戰役の後、三菱が筑豊鐵道に力を入れることゝなつた時、豊川良平氏の勸告に従つて官を辭し、その社長として赴任したものである。九州



仙石貢氏

は日本の大石炭庫で、三菱、三井兩大富豪の炭坑爭奪戰は、日露戰爭の前後に至ると、その競争は全く白熱點に達してゐたものである。其處へ西園寺内閣が現はれて、鐵道國有案を提出したが、その際仙石氏は九州鐵道の社長として、九州の全鐵道に手を伸ばし、三井物産に對抗し、陸上の運輸機關を支配してしまふと云つた有様の場合であつたから、三菱が鐵道國有案に對し躍起となつたのに無理はない。西園寺内閣瓦解の直前、仙石、豊川、片岡等、三菱系の政客が如何に院の内外に活躍したか、そして此の大事件を轉機として仙石氏が政治舞臺に登場して、先づ戊申俱樂部を結成し、次いで憲政本黨内に於ける大石、犬養兩者の間を調停し、立憲國民黨を組織せしめたのが、明治四十三年三月で、宇田翁が土佐電鐵社長として、縦横にその巨腕を揮つてをる最中であつた。

×

×

### 九 葛島まで

緒て後免線下知以東の延長線路敷設に付て、翁は高知市の膨脹を見越し、下知以東葛島橋まで縣道を直通して、併用軌道とすることの適當なるを考慮し、その經費全額を會社に於て負擔することゝなし、之を當局に申し出たのである。當時の縣道は堀詰より北折し、種崎町を経て蓮池町通り、中新町を経て葛島に至る線路であつて、電鐵會社の案は之れを變更し、下知より葛島に直通せしむるにある。そこで宇田翁等の實業家組に政黨的反感を持つ政友派の策動も手傳ひ、蓮池町、中新町その他、市の東北部一帯は非常に寂れると云ふ理由の下に、この縣道路線變更に反對運動を試むるものが出來た。その結果終に内務省を動かして、併用軌道は不許可となり、縣道は下知停留場即ち寶永堤より北折して中新町通りに出づることゝなつた。

そこで、會社は餘儀なく、下知より葛島の間を新設軌道となし、明治四十二年十月、葛島まで開通したのであるが、果せる哉、都市膨脹、道路改良の時代到來し、大正十四年、この新設軌道の大部分は縣道に充當され、縣費を投じ、新設軌道線を挟んで兩側を擴築し、八間幅の併用道路に變更せられ翁をして先見の名をなさしめたのである。



一〇 苦境打開策

電鐵の新設軌道が、葛島まで開通した頃、會社は葛島以後免線の延長資金に行詰りを生じた。會社の資本金は一百萬圓で、全額拂込を了へてゐた。然るに開業日尙ほ淺く、營業の成績未だ見るべきもなく、配當率とても辛うじて年三四分位に過ぎず、且つ一般經濟界は、日露戰役後、不況消沈の際で、株式は下落する一方であつた。斯かる場合に軌道を後免まで延長して、東郡との連絡を便にし既設線路の増收を計らねばならぬ使命を、背負はされた社長宇田翁の立場には、誰も同情を吝まないであらう。延長に要する資金は六十三萬圓、現在の三百萬圓に相當する金額だから、増資は當時の實情に於て到底覺束ない。そこで翁は、借入金に依り一舉に苦境を救ふ以外に途無しと做し、これを重役會議に諮つたところ、松村寛藏氏眞先に賛同し、他の重役も異議無く同意した。同社の前會計課長畠中直樹氏の「思出の記」が、この間の事情を悉くしてをる。

社長は宇田サンで、御年配五十位の時と思ふ、重役が片岡サン、川崎サン、松村サン等々、五丁目の車庫が焼けて缺損額が五萬三千圓出來、無論無配當で、電燈は二千燈位しかなく、電車事業は全く行詰りを來たし、どうしても電車線路を後免まで延長せねば活路がない。乾坤一擲、重役は私財を全部提供して六十三萬圓の金を借りようかと云ふ時分であつた。度胸のない重役は怖ぢて辭め

る。新聞紙では會社の繪を書いて、空き家と云ふ貼紙がある（大きな事務所に社員は 十人位しか居なかつたので）その傍へ如何にも顔をしかめた社長の似顔を書き「宇田友の頭痛」とボンチ繪の出てゐた事を覺えてゐる。左様な場合で、重役會も度々ある處、御歴々が重役室へ集まると、始終ワン／＼爆笑して談合してをられる。成程談笑の裡に事を決するとは、斯様な鹽梅のものかナと感じ同時に實業家と云ふものは、阿呆氣に大聲で笑はねばならぬものだと思ひ、頻りに笑ふ稽古をしたものだつた云々

宇田翁の似顔を書き、毒筆を弄したのは、政友會の機關紙であつた。政黨の感情がこゝまで歪曲された當年を回顧して、今人は寧ろ嘖飯を禁じ得ないだらう。

一一 翁の腹藝

翁の提案により、會社は三菱から六十三萬圓の借入金をする評議に一決した。勿論これには翁としての自信があつた。乃ち先輩豊川良平、仙石貢、片岡直温、大石正巳氏などの力を籍り、此等先輩の援助と斡旋によつて、右の借款は必ず成功するとの確信を有つてゐたから、翁は取締役松村寛藏氏と同年三月廿五日相携えて上京し、誠意を披瀝して斡旋を依頼したところ、早速快諾を得、三菱合資會社から、白石直治、立原任、伊藤源治の三氏を線路並に營業調査のため派遣せしめられたが、事業の

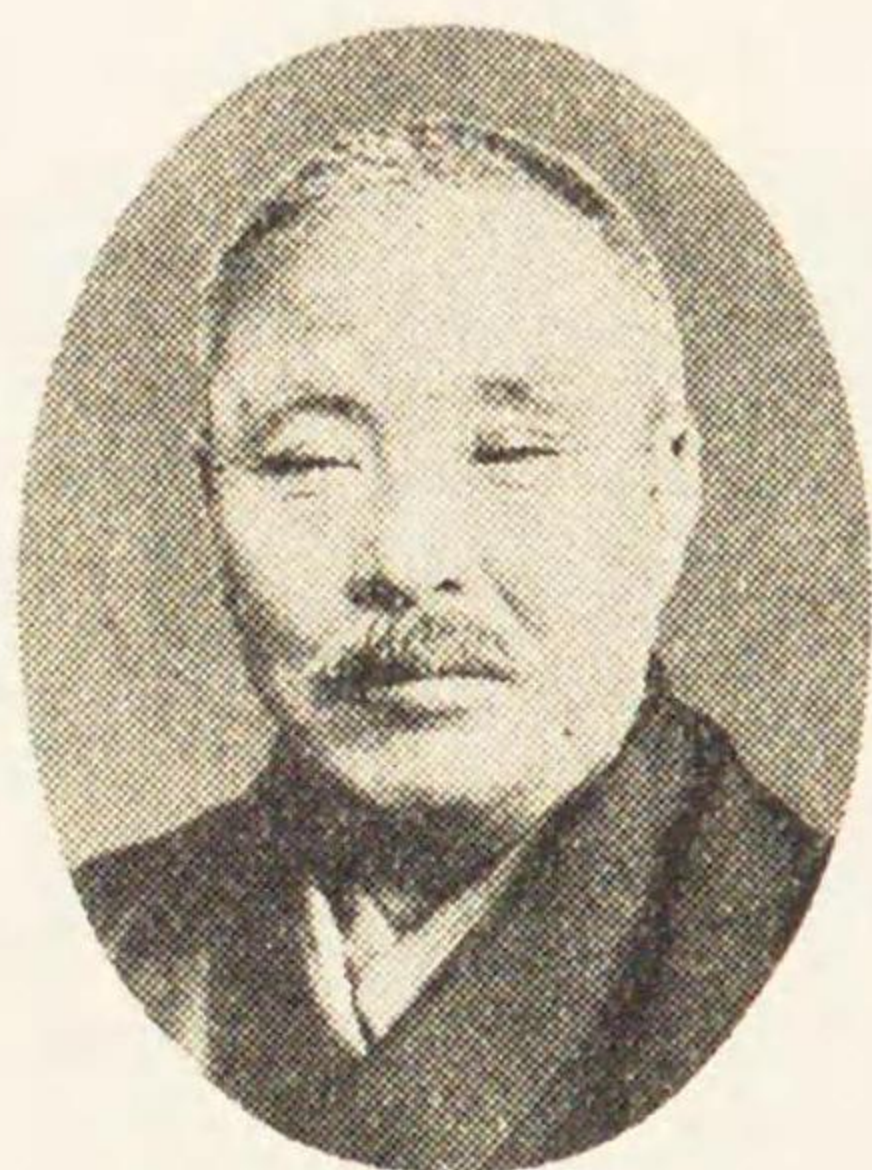


確實性を認められ、三菱合資會社、日本生命保險會社、東京海上火災保險會社、明治生命保險株式會社、土佐銀行の五社を抵當權者とし、金六十三萬圓を年七厘の率にて、明治四十三年十月借入を爲しこの資金を以て後免線の延長、及び電燈供給區域の擴張を行つたが、之に依り社運の頽勢を盛り返し隆運に向ふことが出来たわけで、會社の沿革史上、特筆大書すべき事柄である。

後免線は、わたしが来てやつたものだ。當時資本金は百萬圓で六十萬圓拂込濟であつた。殘金の未拂込金を徵收する一方、掘詰以東を擴張埋立し、後免線をはじめたが、葛島まで開通した時、財界の反動機に遭遇して増資は出来ず、忽ち延長資金に行き詰つた、それで三菱に相談して、三菱合資外四社から六十三萬圓を借り入れ、やつと竣工したのだ。開通したのが確か明治四十四年の春だつた。(宇田翁回顧談の一節)

尙ほ「豊川良平傳」に、次の記事が出てゐる。

土佐電鐵の救済には、仙石貢、白石直治も加はつたが、豊川といふ顔役があつて兩人も助力したのである。當時掘詰から東方へ複線を敷設するについて、縣の方は内務大臣の指令で認可しただけども、軍事上の關係から陸軍省が故障をいつて容易に埒が明かなかつたのを、仙石が陸相に談判して漸く解決した。然るに六十三萬圓の借款をしなければ、事業を進めることが出来なかつたので、



氏平良川豊

製絲所にも豊川氏の力が大に與つてをる。

×

以上の事實を通覽して、宇田翁と豊川氏、宇田翁と三菱の縁故關係が、如何に濃厚であるか、判明する筈だ。これ本傳の編者が、着筆の初頭より、三菱と豊川氏を籍り來つた所以で、この兩者との關係は、六十三萬圓の借款問題前後に至り、花を開く段階に進んだものと觀て大過あるまい。此の好因

社長の宇田友四郎から、豊川に相談すると、氏は仙石、白石と協議し、實地研究に行つた白石の報告に基いて、六十三萬圓を貸すことになつたが、三菱一手では面白くないといふので、三菱銀行の外に、明治生命、東京海上、日本生命、土佐銀行からも、借款の話が纏つて漸く息を吐き、更に仙石の肝煎で、鐵道通の齋藤利西を社長に迎えることになつたのである。その前後であつたか、土佐電鐵に動力が不足して、後免線の電車運轉に困り、東電外濠線の豫備發電機を買ふことになつた時

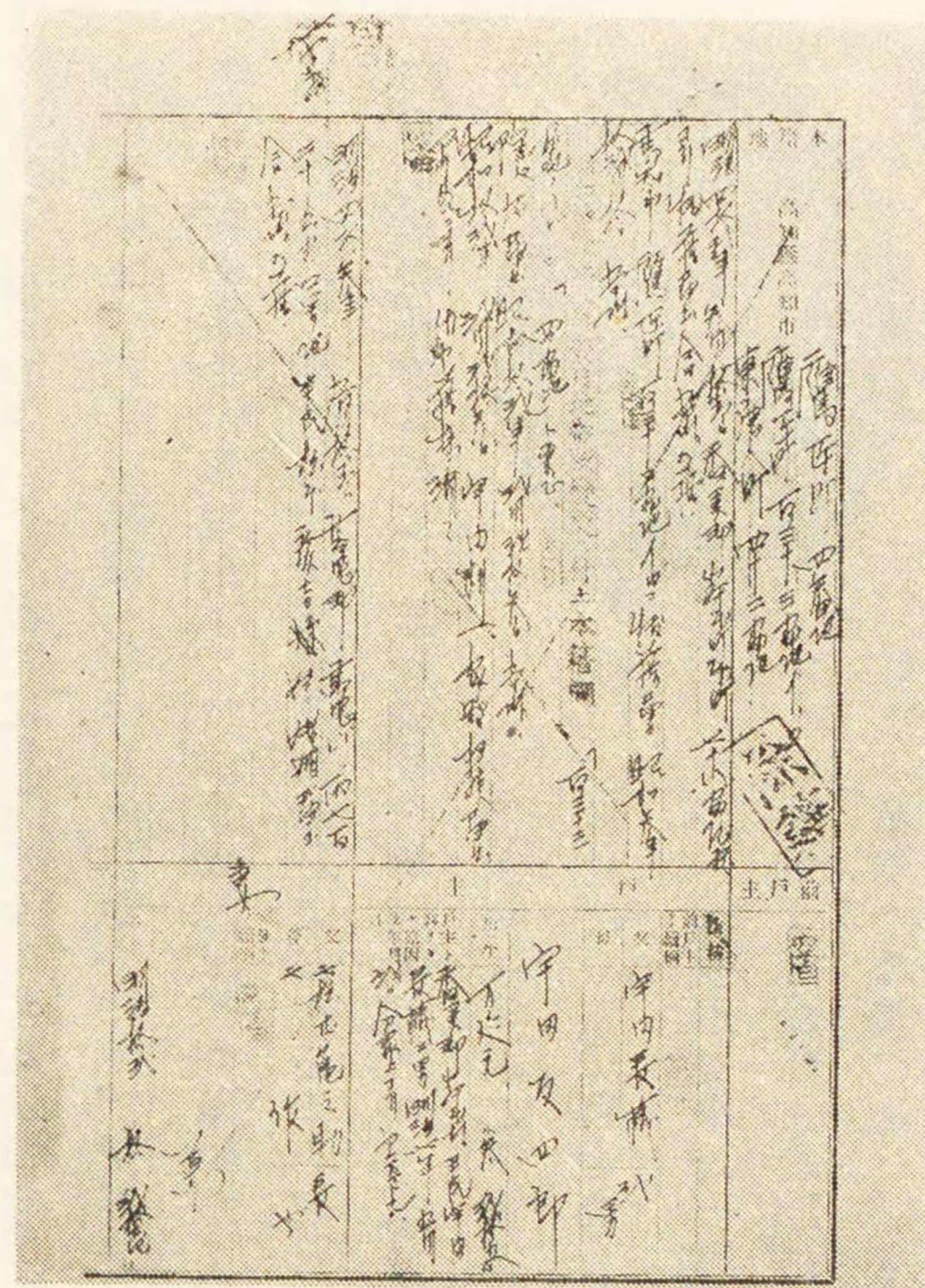
豊川を保證人にする必要が起つて、買ひに行つた支配人が恐々頼みに行くと、譯もなく快諾したので賣買契約が成立つた。土佐セメントが困難に陥つたのは、明治四十二年火災に罹つた時で、結局豊川氏の援助を求めることにして、重役が上京すると早速善後策の相談に應じて間もなく恢復工事を起すことが出来た。高知



縁の花から、大正五年度、又た三菱より二百五十萬圓を借り入る、果實を結んだことを知らねばならぬ。

### 一一 第二の結婚

曩に大阪に於て、左右子夫人を亡なふて以來、翁は數年間縲夫生活を續けた。然し三年喪にをれば



部一の本膳籍戸

最早亡き妻への務めに、不足はないだらうと云ふところから、當年左右子夫人の際、月下氷人役を買つて出た、野市の親戚藤田萬之丞氏が、再び肝煎りとなり、諸處にて聞き合はした結果、高岡町に才色と云ひ、年頃と云ひ、恰度適當と思はるゝ一女性を發見したので、これを翁に薦めたところ、早速よろしいといふことになった。その



應  
舉  
畫





女性は、松本龜之助氏の長女彦吉氏の令妹兼子で、年齢三十一歳であつた。翁はこの好配偶を得、明治四十一年十月十七日の、黃道吉日を擇んで、盛大なる華燭の典を擧げられたのである。

兼子夫人は、幼より孝行娘の評判を取り、年頃となるや、才色双美の譽れ高く、森山村第一流の資産家に嫁した。然るに臺灣總督府に警部を奉職せる實兄松本彦吉氏の計に遇ひ、老親の扶養が出来なくなつた爲め、孝心一徹の夫人は、千思萬考の揚句、家庭の事情を打明けて、婚家の諒解を求め、圓滿に孝道に歸したのであつた。當時の習ひとして、結納金を返却するのが、離婚の常道とされてゐた斯の女性に斯の親あり、清貧の松本家は、結納金には手を着けず、簞笥の底に、その儘しまつてあつたから、鬩斗目も崩さず、立派に返却することが出来たので、これが又た近郷の美談として喧傳された。實兄亡き後の兼子夫人の、親孝行は實に涙ぐまじきものがあつた。

### 一三 社長を譲る

前記の如く、三菱との借款問題が、極めて圓滑に成立すると同時に、仙石氏の推薦により鐵道の事に精通してゐる齋藤利西氏を、借款條件の番人格として、電鐵會社へ迎えることになつた。この齋藤氏は九州鐵道時代、仙石社長の下に、經理課長を勤めた人で、その性格は守成的に出来てゐた。そこで宇田翁は齋藤氏に専務取締役の椅子を與へ、小さい實務は同氏に一任した。斯くて翁の社長時代に



遂行した事績を列記すると

- 一、明治四十一年十月、堀詰、下知間軌道開通
- 一、棧橋終點に環線を設け開通（同年十二月）
- 一、明治四十二年二月、宗像知事の英断により、出力一千馬力の縣營水雷發電所が竣成するや、會社構内に變電所を設け、同年三月十六日より受電を開始した



齋藤利西氏

- 一、同時に點火料の減額、その他供給條件の改定を断行したので需用額に加はり、着々供給區域を擴張した
- 一、同年七月三十一日下知葛島間新設軌道開通
- 一、明治四十四年四月、後免線全通す。開業後數年間は乗客少く政友派の新聞からは「客一人車掌一人の寒さ哉」など、冷評されたその電車が、後免線全通を段階として、達觀實に圖に當り、乗客數は躍進的に増加の一方となつた。
- 一、同年八月、新地線が開通した。
- 一、當初會社創立の第二目的たる棧橋は、貨客の輻輳に伴ひ、明治四十四年に至り固定橋を擴張した。

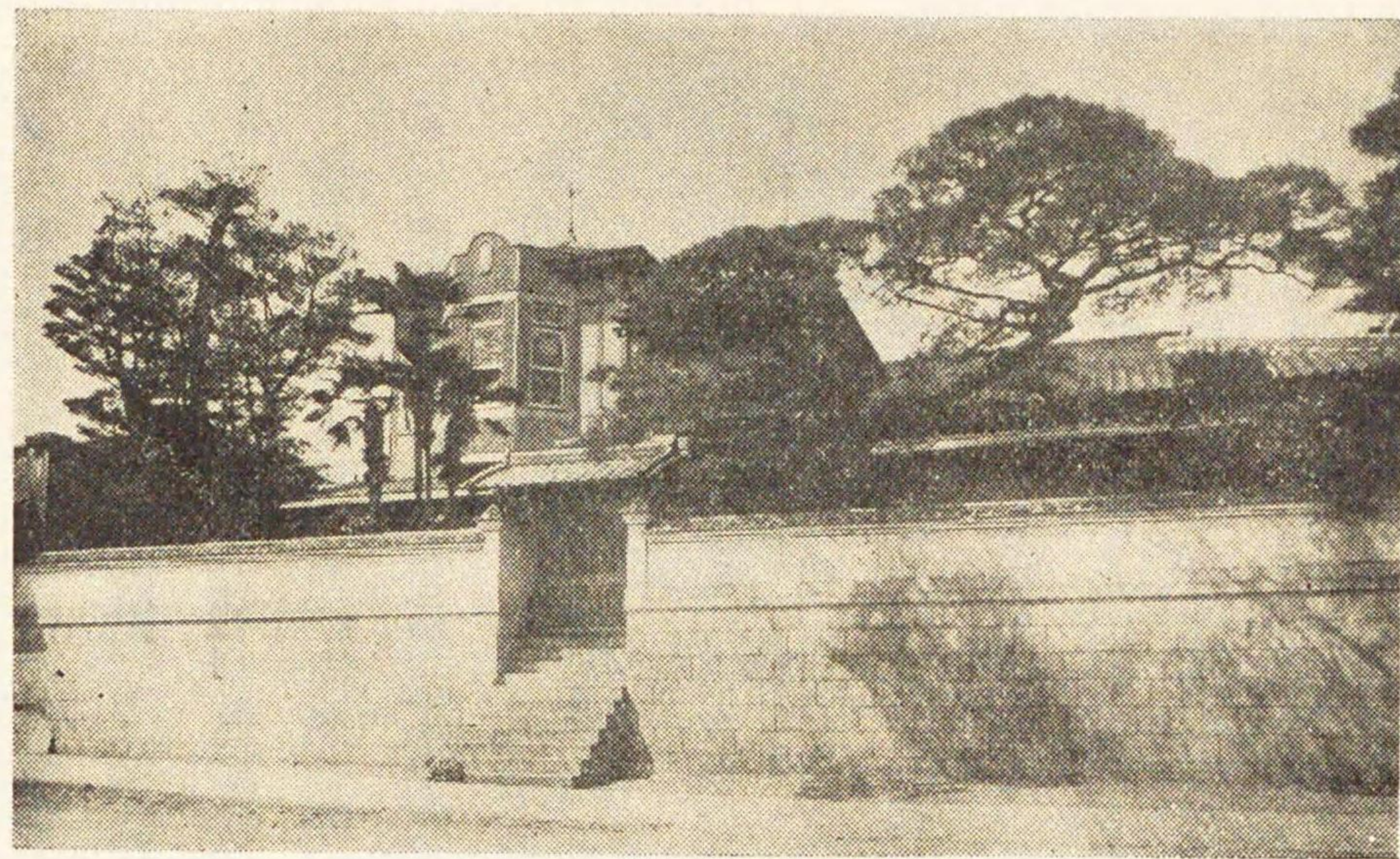
一、この年、伊野、後免間及び棧橋堀詰間、市を中心に十字形、之に新地支線を加へ線路一段落を告げ、同年下半期の營業收入は線路全通により好調を呈し來り、從業者支配人以下電燈關係のものを含せて三百二十三名、株主總數二百四十四名となつた。

斯く順風張帆の會社状態に躍進したから、翌四十五年一月の役員改選に際し、翁は退ひて平取締役となり、齋藤氏を社長に昇格せしめたのである。

#### 一四 唐人町の新邸

大阪時代に、作事狂と呼ばれた翁は、高知へ歸つて來て、益々持前の建築趣味をたぎらし、鏡川の清流と、筆山の翠黛とを前にした唐人町に地を相して、宏莊なる新邸を營んだ。和洋折衷のあしらひ流石に作事狂の好尚を象徴し、仮山泉石の布置凡ならざるところに、翁の風月を映發せしめて、床しく思はれた。落成は大正三年十月で「吸江灣内波靜かにして風起らざるの處、綠蔭席を設けて靜に椅榻を撫し、高雅飄逸徐に宇内の形勢を、その腦裡に畫くものを我が宇田友四郎君となす。俊傑の血を享け、山靈の化を受け、大洋の感應を恣にせし宇田君は、夙に海運の國家に鴻益あるべきことを曉得せり。大海國日本を興隆すべき興國の事業は、海運を措いて他に之を求むべからざるを思へり、而して遂に海上の一權威たるに至れり。此點正に青淵澁澤榮一翁に優れりといふものあり、その當否は之





唐人の町田邸

を別とするも、當時財界の大立物として、世の標榜とする澁澤翁と比較對照する亦た偉ならずや」とは大正六年の夏、大阪海陸運輸時報社の記者が、唐人町の邸を訪ふた時の感想文として「興國海運史」に載せられてをる。

### 一五 二度の勤め

齋藤氏は、只管健實なる經營法に依り、益々社運の發展に貢献するところ偉大であつたが、往年三菱からの借入金は、大正六年三月、資本金を百五十萬圓に増加し、プレミアム附で、全額一時拂込を完了した其の四月三十日を以て、全部償還することも出来、氏は大正十年十月十六日を以て、社長を辭任した。そこで後任社長問題が重役會議で持ち上ると、復た無理無體に嫌がる翁に括りつけたので、翁は止むを

得ず再任したのである。翁は後年當時を回想して次の如く語つてをる。

實は社長の代りがなくて困つた。やめるにもやめられず……やつと仙石サンが齋藤君を相談してやらうと云ふ話が出来た。齋藤君は、九州鐵道局の經理課長をして居つたが、恩給になるころを相談して來てもらつた。同君もしまいには大分苦心したものと見えて、仙石サンが、わたしに「齋藤も、もう許してやらんと死ぬるぞよ」と言ふので、とう／＼やめてもらつたよハハ……、それから又候わたしを社長にと云ふので困つた。併しあちらから連れて來るとすると、十年間の約束で、やめる時は十萬圓以上やらんといかん。それを重役に話すと、それ程やつては耐らんと云ふし、と云ふて川崎君がどうしても社長はいやちやと云ふて頭張り通すし、北川忠悳君にも話したがいかん結局どうにもならんので、籤抽きで定めることにした。ところがとう／＼又たわたしに籤が當つたなんぼう籤抽きちやと云ふたちいくもんかのうし、皆の者がわたしに籤の當る様に言ひ合はしちやつたものハハハ……。

### 一六 土佐電氣設立

翁が再び社長に就任した大正十年の下期前後は、歐洲戰亂後の反動景氣時代に屬するかなれど、客車の収入は依然好況を續けてゐたが、縣營水電に於て餘力全く竭き、會社に於ても新規擴張不可能と



なり、電力の饑饉は、遂に公益事業としての職能を全ふし難きに至らしめられんと、頗る憂慮に堪えざる時期に遭遇した際で、再任匆匆の翁に與へられたる使命は、實にこの電力行詰りの打開策であつた。そこで翁は本社を高岡町に有する土佐水力電氣會社との合併策を採つた。

同社は明治四十五年七月の創立に係る北原水力電氣會社が、中津水力電氣、高南電氣、須崎水力電氣の各社を合併し、高岡町外三十四ヶ町村に電燈及び電力を供給し、資本金百七十萬圓を有する地方の大會社であつたが、溝上與三郎氏の社長時代に種々の事情から、殆んど收拾すべからざる状態に立ち至つた關係上、同氏退社の後を承け、翁が迎えられて社長の任に就くことになつた。翁の經綸は此の時の革新にも現はれ、取締役森淳太郎氏を専務に任じて、一意社務の整理を斷行し、内容の充實、社礎の鞏固を謀つた。

翁の腦底に合併策の閃く頃、土佐水力電氣會社は、當時土居川發電所竣成し、相當餘力を有したるのみならず、尙ほ名野川發電所の流水使用計畫を變更せば、出力を増加し得る餘地があつた。然るに同社は土居川發電所新設のため、一時に多額の資金を固定せしめたるに依り、落成後、電線路その他擴張工事用資金を要した。そこで土佐電鐵の電力充實と、土佐水力の資金潤澤を期する目的に於て、兩社を合併するは、自衛上、將た亦た公益的見地よりして、一石二鳥の妙策だと云ふので、之れを斷行することとなり、益々その抱負を實現せんが爲め、大正十一年八月一日、兩社を解散すると共に、

新に資本金六百萬圓の土佐電氣株式會社を設立した。

### 一七 公共觀念の華

言行一致は、翁の本領である。この本領は土佐水力と合併後の事績の上に、着々具體化されてをる乃ち合併の主たる目的たる發電設備充實の具體的計畫としては

先づ名野川發電所の流水使用を變更し、新に千二百キロワットの發電所を新設して、土居川發電所に連絡し、從來の特殊供給用を全部常用に變更し、以て平水時出力を利用し、更に漏水豫備として潮江に一千キロワットの火力發電所を新設し、その他既設變電所間に各送電線路を新設して、各變電所間に完全なる送電連絡を遂げ、續いて堺町に變電所を新築する等々の計畫を、新會社設立直後に着手せしめた。

かくて、大正十五年に至り、豫定計畫を全部完成したのであつた。

「お客様に親切に、社會公共に奉仕する心掛け」これが翁の長養に力めた社風だとされてゐるが、翁のこの精神は、燈料金の低下斷行に依つて、其の片鱗が示されてゐる。即ち合併直後の電氣供給規程は、舊社供給區域に對し、各舊規程に依り營業してゐたが、大正十三年、新設發電所落成に際し、之れを統一改正し、先づ定價燈料金を安價に改め、且つ舊土佐水力區域に於ては、從來自然斷線球取



替料を徴収してゐたが、之れを無料に改め、又た兩社とも、従量燈は二十燈以上の需用家に限りたるも、之れを五燈にまで引き下げ電氣料を減額し、或は從來新設工事料一燈一圓なりしを、全部一燈五十錢に減するなど需用家の利益の爲め種々改定した。果然大衆より多大の歓迎を受け、新規程實行に際し、その成績は空前の盛況を呈した。翁が常に従業員を訓諭する「萬事社會と調和し、一般公衆と福利を共にする精神」が、新會社の初頭に、萬葉の花と咲いた景觀は、翁の公共觀念が、機に觸れて即發したもので、偶々翁の人格を知る一材料となると思ふ。

### 一八 理想の實現

大正十三年に至り、國有鐵道が須崎、山田間を開通することゝなつた。そして此の一方、自動車營業が普及した。斯くて土佐電氣の軌道は漚車と自動車、腹背併行運轉をなすに至つたが、翁は電車は電車としての特質機能を益々發揮する方針を堅持して、依然積極主義を改めず、堺町變電所を新築し新車輛十臺を建造して運轉臺數を増加し、或は饋電線の増架、ボンドの改良、軌條重量増加等を行ひ専ら運轉の圓滑敏速に邁進し、翁一流の不退轉精神を發揮した。

×

この年、知事は高知驛より播磨屋橋を経て、潮江橋に直通する道路改築計画を定めた。翁は此の

新道路に電車軌道を敷設せば、旅客運輸に便なるのみならず、將來高知驛、棧橋間に省有貨車を電氣機關車に連結運轉せば、則ち臨海鐵道問題も、亦た併せ解決し得らるべく、本道路の完成と、軌道の開通は、公益上多大の効果をもたらす譯だから、假令投下資金に對する利益率が、時に或は僅少であつても、軌道業者の社會的任務、公共奉仕の精神より、是非其完成を資けたいとの熱意を沸らし、十五萬四千五百五十一圓餘の寄附を申し出でた。この新線開通に依り、播磨屋橋交叉點が中心となり、市の繁榮に貢獻するところ亦た洵に著大であつた。斯くて昭和三年五月の臨時株主總會に於て、資本金一千萬圓に増加するの決議を爲し、翁の所期は、こゝに達成せられたのである。

### 一九 多々益辨ず

意志の強剛と、變通自在の機略は、亦た翁が天賦の持前に數ふべき性格の發露である。大正十三年以來、頻りに普及する自動車營業を見るにつけ、翁は軌道沿線自動車の必要を感じ、昭和二年七月、その免許願をなしたところ、何故か不許可となつた。併し一旦思ひ立つたことは、之れを遂行せざれば休まないと云ふのが、翁の個性である。そこで翌昭和三年再び軌道沿線自動車營業の免許願をなしたが、間もなく復た却下された。そこで二ヶ月後三たび其の手續を取つたところ、復た／＼却下された。併しそれしきの事に屈するやうな翁でない、困難いよ／＼甚しければ、愈々多く勇氣をあらはす



のが翁の本領とされてゐる。だから同年末四たび免許願を提出し、昭和四年七月、五度それを繰り返したが、何うも雲行が朗かでない。この時に當り土佐バス株式會社は、已に營業を開始してをり、波川、後免間が開通して、電車が影響を受くるに至り、客車の収入が下り坂とたつた。それに昭和五年末には農村の不況、自動車の進出に伴ふて、電車の収入は次第に減少、翌昭和六年には、土佐バス運賃値下の影響をうけ、電車乗客激減し、對抗上値下割引を決定するの已むなき状況となつたが、昭和七年五月、土佐バス會社と競争を排し協約成立、茲に協調の基礎を定め、間もなく、土佐電氣と、土佐バスとは、姉妹會社の實を示し、公共の爲め、翁の精神を百パーセント昂揚せしめてをる。

## 二〇 有終の美

明治四十一年七月以來、二十八年間、軌道經營、電燈供給事業の爲め、堅忍不拔の精神を以て、孜孜その業務に衝り、縣民の福利増進を念としつゝ、土佐電氣會社をして、鞏固なる基礎を造成した宇田翁は、昭和九年六月二十一日の役員改選に際し、健康勝れざるの故を以て、片岡宇太郎、上田保兩氏と共に引退せられた。時に齡七十五歳。同時に御曹子耕一氏が取締役社長に就任した。左は「辭任に際して社員諸君に告ぐ」翁の言葉である。

私は、永年の間、皆様に御厄介かけておりましたが、去る六月、片岡、上田兩重役と共に引退いた

しました。只今長岡郡本山町に暑さを避け山水を友として老軀を養つてゐます。過日は皆様を代表した方が、遠路來訪下れ、御鄭重なる御詞と、赤誠をこめた記念品を賜り、御一同の御芳情、私にとつて洵に有り難い仕合せに存じ、謹んで拜受いたしました。永く家寶として傳へる考へでございます。

御承知の通り、片岡、上田兩君は、明治三十六年七月、土佐電氣鐵道株式會社創立以來、私は明治四十一年七月以來、いづれも三十年内外を経過いたしました。この間幸にして同僚重役の補佐をうけ、皆様の勤勉により、私共大過なきを得ましたが、何を申せ老齡に達し、殊に私は數年前より歩行不自由で、大切な株主總會にすらも、多く缺席勝となり、洵に相濟まぬことでした。しかし専ら上田君が人一倍壯健であり、杖とも柱ともなつて呉れてゐましたので、せめても助かつたわけでもありますが、同君も最早寄る年波には争へず、近來健康を害ひ辭意を洩され、また永らく私と途を共にした片岡君も、既に喜壽を超え夙に辭意の強きものあり、お互にこの頽齡を以て任を續くは堪えられぬ次第なるのみならず、交通といひ、電氣といひ、社會と緊密なる關係を持つ公共的事業の擔當者たる重責に對し、甚だ濟まぬ次第と考へ、株主諸君に衷情を披瀝して諒察を希ひ、漸くお恕しを戴いたわけでありませう。

回顧すれば、既往三十年の間に、日本は世界の大強國に列し、國運彌が上にも隆昌を告げました



此の間に於て電気事業は、交通界は勿論、一般産業、文化の發達と唇齒輔車の關係に立つて、國運と共に長足の發展を遂げました。一面また社會狀勢は、經濟的には固より、思想的にも幾變轉があつたのでありますが、皆様は志操堅固、上下一致、忠實、業に服して夙夜の勞を厭はず、株主各位も、協力一致、役員を支持され、増資拂込、合併等、業礎の發展に吝かならず、かくて勞資の協調親和により社會の同情をうけ、縣内外官民諸賢の援助を賜り、依つて以て今日に至つたわけでありまして、衷心實に感謝の至りに堪えません。

さて我社は、過般四國電力統制に参加し、既に工事を了へ、電気經濟圏は、聯盟事業者間相互に擴大しました。また曩にバスと資本的結合をしましたが、これ亦た經濟上の地位目的を同じふする事業協力の現れでありまして、以上何れも所謂統制の視野において公衆と共に、時代の進歩に順應し産業文化の向上に貢献せんとの基調に立つて、事業永遠を策するものに外ありません。今後その任務、理想を達し、有終の美を濟さんためには、私共老體を以ては至難にして、是非共年若い重役と力強い社員並に株主諸君の一致團結に縋らぬば得て望むべからずと考へます。

申すまでもなく、公共的事業の成否は、先づ上下の協力に始まり、萬事社會と調和し、一般公衆と福利を共にするの精神に立脚せねばなりません。従つて事務技術を通じ、上下各般の従業員全部が一貫したる社風の下におのがじ、職務に忠實に、お客様に親切に、社會公共に奉仕する心掛けで

勤務せねば、到底同情を受くる能はず、信用地を拂ひ、事業の衰頹することは明かでありませう。從來皆様は、一意これを念として盡し來たものゆえ、茲に敢て申さずとも宣しいのでありますが、一層之に精進努力せられんことを呉々も冀ふ次第であります。

私は現役の社長は、辭任しましたが、同時に役員の方々から、顧問にとて推薦せられお請けいたしました。しかのみならず心は喜憂を共に分つ従前と變りなく、決して皆様と別れたものでありません。老軀は最早昔日の活氣はなきも、餘命の許す限り、皆様と途を同じふするものでありますから、此の邊御了解を願ひます。

終りに臨みまして、此上とも我社七百の社員並に家族御一同の御健康を謹んで祈ります。

×

×

才子元來多過事。

議論畢竟世無功。

誰知黙々不言理。

山是青々花是紅。

西郷南洲



## 土佐セメント時代

### 一 創業の第一歩

宇田翁が、義兄臼井鹿太郎、盟友川崎幾三郎兩氏を動かし、協力して、土佐セメント合資會社（資本金五十萬圓）を設立したのは、日露戦争の末期、明治三十八年九月であつた。翁は當時大阪に居り土佐商船の采配役を勤め、一ヶ年百萬圓の利益を擧げて、同社の黄金時代を迎え、重役および多數株主から、恵比壽、大黒以上に、隨喜されてゐた際だから、臼井氏も、川崎氏も、翁の言に聽從してこの新事業に欣然出資したのである。翁の親友岡田典章氏は、尼ヶ崎に在る東亞セメント株式會社の社長に、就職する前々から、熱心にセメントの研究を續けてをり、その造詣は餘程深かつたと云はれた煙の都で磨きをかけた翁の頭腦は、セメント事業の有望性を達觀すると共に、田岡氏の助言も手傳い土佐のセメント事業に、食指を動かすやうになつた。そこで下田の石灰山を持つ川崎氏と、帆船を持つ臼井氏を説き、土佐セメント合資會社を創設し、これが發展して、資本金を一千萬圓の株式會社となつた譯で、一應ふるい沿革から筆を起さねばならぬ。

### 二 錢屋セメント

土佐セメントの前身は、錢屋セメントである。錢屋と云ふのは、浦戸町の豪商小松金吾氏の屋號だ小松氏は、城下の名たゝる石灰業者で、文久三年三月、現在土佐セメントの東工場敷地を、野村五郎右衛門氏より譲り受けて、石灰製造業を經營したことに、その端を發してをる。青字年田翁が、第七國立銀行の給仕で立働いた時、小松金吾氏は、同行の重役として羽振りを利かせてゐた。錢屋の家屋敷は後ちに松岡寅八氏の手に渡り、得月中店となつたが、南側の塀や、内側の庭園などに錢屋時代の面影が名残つてをる。錢屋の二代は小松龍太郎氏で、家業の石灰業を擴張し、セメント業に乗り出して見やうとの意圖を有してゐた際、たゞく明治十九年、工學博士高山甚太郎氏の來縣を機とし、セメント製造の宿志を述べ、孕灣内に在る海底粘土が、セメント原料として適するや否やの調査を囑託したものだ。そしてその調査の結果、最も適當なる旨の報告を得たるを以て、茲に始めてセメント製造の計劃を立て、尙ほ幾多の調査を経て、日清戦争の直後、潮江村に交渉し其の承諾を得て、西孕の沿岸に二千三百三十六坪の埋立地を設け、沿岸の地相を一變して、其處に堅窯式セメント工場を起し錢屋セメントとして市場に賣り出すに至つたのである。時に明治二十九年五月、實に本邦最古のセメント業たる歴史を有つてをる。

×

當時のセメント工場は、これを今日の進歩した杉大精緻なるものに比すれば、規模狭小、機械も簡



單、その原料は石灰を主とし、これに粘土を加へたもので、兩者を一定量に水中にて、よく攪拌した後、水分を絞り取り、之を泥狀物と爲し、煉瓦形に切りて乾燥し、幾十尺もある大きな竪竈に詰めて焼き上げたクリンカーの微粉物が、すなはちセメントで、その原料中の粘土は、工場前の海底にある泥土をジョレンにてすくひ上げたものだから、無價値に同じものである。石灰に至つては無盡藏で、自家の石灰船が、絶えず工場の海岸に横着けとなる便宜を有つてゐた。

×

右の如くにして、事業は進められ、明治三十六年一月、結城源次郎氏の共同出資により、錢屋セメント合資會社となつた。結城氏は當時の企業家で、朝倉町に宏壯なる邸宅を營み、錢屋と東西に棟を光らし、豪華建築の好一對と謳はれたものだが、然しセメントの製法は、原始的たるを免がれず、且つ大阪方面に於ける販賣の開拓が、甚だ不十分であり、高知商業會議所明治三十六、七年の商業報告書によれば、一ヶ年の移出僅かに二百挺乃至二百五十挺、金額にして七百圓乃至八百七十五圓と云ふ數字を示すに止つてゐる状態で、創業以來八、九年にして、錢屋セメントは、經營難に喘ぎ、その後止むを得ざる事情のため、解散するに至つた。我等は、この先驅者の苦心と、苦境に對し、多大の同情を寄せる。これ本傳が、特に紙面を割愛して、草分けの記録を世に遺す所以である。

### 三 面目一新

錢屋セメントの解散するや、宇田翁、臼井鹿太郎、川崎幾三郎の三氏等相謀つて、前記工場全部を譲り受け、明治三十八年九月、新たに土佐セメント合資會社を設立し、更に一萬坪の敷地を買ひ込み同時に錢屋時代の設備を根本的に建て直し、先づ竪窯式を廢して、六十呎回轉窯一基を新設し、之に附隨する諸機械を備へ、諸般の設備を整へ、面目を刷新したのである。

×

思慮周密にして無理をせず、諸事圓滿主義を以て、共存共榮の實を擧げることが、翁の企業に對する終始一貫の方針だと言はれるが、土佐セメント會社の經營に就いても、矢張りこの方針に順應し、地元の潮江村と協調して、事業を進める事に重點を置き、心友藤崎朋之、近森虎治氏等の意見に従ひ村の重鎮弘瀬重正氏を會社の要部に据えて、支配人格の監事職を振り當て、大概の事は同氏に任せ切りの姿であつた。斯くて地元とも至極圓滿に協調が出来、陣容も整ふた翌明治四十年十二月を以て、會社の祝宴會を開いた。左に高知新聞の所載を掲げる。

#### 土佐セメント會社の祝宴

土佐セメント合資會社にては、今回第二廻轉窯、第二、第三のチューブミール、第三乃至第六の



フレット及び其の原動機たる第四、第五の汽罐滾機落成したるを以て、十二月一日祝意を表すると同時に一同の慰勞を兼ね、同社工場構内に祝宴を開きたるが、社員、職員、職工、建築夫等來會するもの三百餘名、午後三時一同着席するや、業務執行社員白井鹿太郎、宇田友四郎、川崎幾三郎三氏の式辭あり、之れに對して監事弘瀬重正氏職員を代表し祝辭を述べ、職工小頭枝重喜馬太氏職工を代表して祝詞を朗讀し、合資會社萬歳を三唱し、宴會に移り、酒間左の祝歌を唱ひ、各自十二分の歡を盡し黄昏散會したりと云ふ。

セメント祝歌

一

烏帽子、鷲尾の峰つゞき  
春はさくらに秋もみち

宇津野のふもと西はらみ  
錦をりだす如くなり

二

四季のながめのそのほかに  
立てつらねたる高どの、

自然の位置の備はりて  
いらかならべし一かまえ

三

機械の音ぞ勇ましき

空にそびえし煙突の

煙は日夜絶え間なく

文明世界の花の華

四

土佐セメントの工場は  
前は入江の水ふかく

敷地一萬四千坪  
運漕の便に富むのみか

五

製造用の石灰や  
天の助けの時をうけ

粘土もうれし無盡藏  
地の利と人の和によりて

六

その經營の初めより  
規模方針も改たまり

開けゆく世と諸ともに  
今度あらたに据えつけし

七

類ひまれなる大機械  
仕成す樽數十五萬

廻轉がまに依る時は  
前途のさかえ樂しけれ

八

實に有難き御世なれや

豊さかのぼる日の御子の



光りあまねく照りそへて

千代萬世に咲き匂ふ

九

黄菊のかほり尊としく

永の記念と仰ぎあげ

心たゞしく身を修め

その行ひを慎しみて

十

勤儉貯蓄を旨となし

職業つとめ勵むのは

君につくすの道なるぞ

國につくすの道なるぞ

土佐セメント萬々歳

#### 四 株式組織に變更

舊態を一新した土佐セメントは、翁の提唱によりて、明治四十一年八月、資本金一百万圓の株式組織に變更し、茲に土佐セメント株式會社となつたのである。翁は同年七月、横山慶爾氏の後を襲ふて土佐電鐵會社の社長となつてゐたが、八月十日土佐セメントの取締役に就任し、社長白井鹿太郎氏、取締役川崎幾三郎氏と共に、益々業績を擧げ、工場を擴張し、六十呎回轉窯一基及び附屬機械を増設し、百尺竿頭一步を進めて、激増一方の需用に應ずる準備を整へた。

#### 五 不慮の災厄

然るに好事魔多し、擴張又た擴張、發展又た發展の土佐セメント會社は、明治四十二年六月十一日の夜、不慮の災厄に遭ひ、工場の大部分を焼失し、損害約三十萬圓と稱せられた。翌日の新聞紙は

潮江西孕なる土佐セメント會社、昨夜の大火災は實に慘憺たるものにして、吾が城南孕門の一角に、煙突林立して晝夜黒煙天を焦して縣下唯一の大製造工場として、他縣人に誇りと爲せし此の大建築物が、僅か一夜の間に機械工場併せて數十萬圓の財寶を烏有に歸せしめたるは、實に無慘といふも愚かなり云々

社長白井氏は、火災保險を附けてゐなかつた不用意の責任感に自責せられ、ぐつさり寢込んでしまつた。

#### 六 焼け太り

非常時に逢着して、腹の底から眞勇が迸り出ると云ふのが、翁の持前の一つに數へられる。關係者の中には、慘憺たる大火災の跡を見て、意氣頓に沮喪する者もあつたが、翁は神色自若として「不可抗力だから仕方がないぢやないか、これしきの事に滅入り込んで何うするか」と一同を激勵し、胸中に



は既に明日のセメント會社を構築せるかの如く、この天の試練に屈せず、益々勇を鼓して立ち上り、衆論を統一して、早速復舊に取りかかり、翌年正月自ら責任の衝を買つて出で、電鐵社長のかたはら敢然専務取締役に就任するや、進んで業務の擴張改善に努め、最新式の機械を遠く米國に求め、或ひは内地著名の工作所に於て、改良機を求むる等、銳意業績の進展に力を注ぎ、更に六十呎回轉窯一基及び附屬機械の増設を斷行し、着々宇田式を發揮した。

### 七 桃李言はず

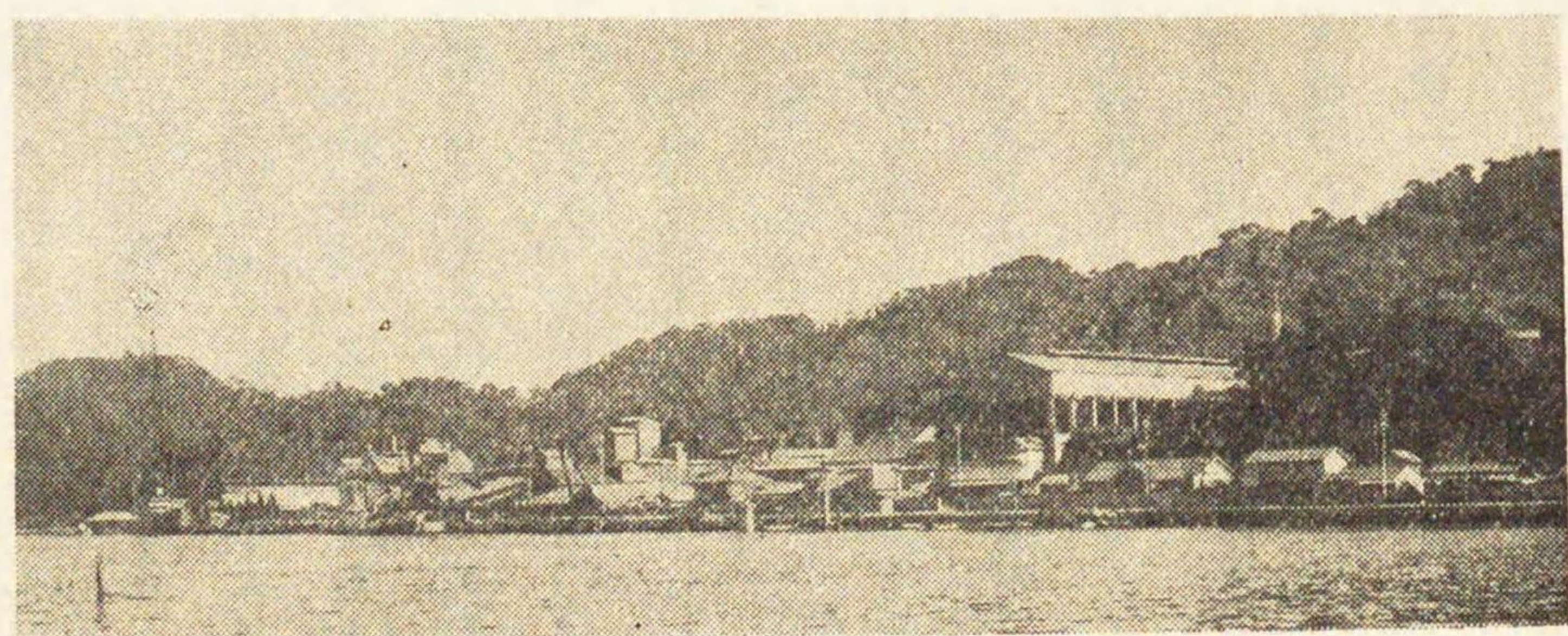
明治四十四年一月廿五日、翁は取締役社長に就任し、土佐セメントの全責任を双肩に荷つて倍々業績の向上に邁進した。當時翁は一面に於いて依然土佐電鐵の社長職にあつたかなれど、此の方は専務の齋藤利西氏に任し、全力をセメント會社の復興に用ゐ、同年十月に至り全部の設備を完了し、即ち六十呎回轉窯三基及び附屬工場の完成を見たのである。翁が斯く責任の衝に當つた爲め、社員も株主もすつかり安心して謂ゆる大船に乗つた心持となつた。そして大正三年一月二十五日、取締役社長に重任、大正六年一月廿五日、復た取締役社長に重任、この間着々事業發展の一路を辿り、大正七年十一月、資本金を三百萬圓に増資し、二百呎回轉窯一基を増設するの英斷に出で、全國のセメント業者を尻目にかけて、本邦最初の新式硬濕式製法を行ひ、土佐セメントの名を九鼎大呂よりも重からしめ

たのである。

大正九年一月二十五日、四たび取締役社長に重任、同年四月鏡川發電所を新設して動力の自給を圖り、同十一年二月、從來原石の供給を受けをりたる土佐索道株式會社を買收して、原料たる石灰石の自給自足を圖ると共に、工場附近に火力發電所を設置し、以つて水力電氣の補助機關となし、こゝに略すべての機關を完成し得て、需用の激増に伴ひ、多々益々辨ずる實力を備へ、一躍四十六萬樽を産出する盛況を呈したのである。此等は皆な翁が經綸の現はれで、企業家たり實業家たる眞價が、機に觸れ時に臨んで發露したものでなければならぬ。桃李言はず、下自ら徑をなしたのに不思議はない。

### 八 事業は力なり

大正十二年一月、五たび取締役社長に重任、此の時、需用益々旺盛を加へたので、翌年四月資本金を四百萬圓に増額し、諸設備に一大改良を斷行し、内容の充實を行ひし結果、頗る能力の増進を見る



土佐セメント會社全景



に至つた。併しながら年々激増する需用に對し、現産額を以ては尙ほ供給の不足を告げ、時代は更に工場の擴張を要求して止まず、同時に大量生産によつて原價の低減を計るべく頭腦を働かしてゐたが大正十五年一月、六たび取締役社長に重任するや、遺憾なくその積極進取主義を發揚し、同年九月に至り、資本金を一千萬圓に増加すると共に、二百呎廻轉窯一基並に之に伴ふ諸機械一式を増設する外餘熱發電装置、原石採掘設備、石灰荷揚の設備、荷造及び積出設備、收塵装置、その他工場内外の擴張改良工事に颯爽と着手し、昭和三年四月、増設工事の完成を遂げ、茲にいよいよ面目を一新し、生産能力は舊に倍し、年産額百四十萬樽に達する隆昌振りを示現した。

×

かくて昭和四年一月廿五日、七たび取締役社長に重任、進むことあつて退くことを知らざる翁の本領は、同年四月二百呎回轉窯二基及びその他の設備全部の完了に依つて花の如くに發揚され、實に年産額百四十萬樽を製造する驚異的發展を見るに至つたので、明治四十二年の災厄以來、二十二ヶ年の星霜を経て、何人も豫想しなかつた斯の超隆運を打出したところに、翁の力を認めることが出来る。併し如何なる場合にも、自己の功を伐らざる事が翁の特性であり、翁の美德であると定評づけられてゐる。百萬圓の會社を一千萬圓の大會社に築き上げたからと云つて、翁自身一毫の矜持らしいものを夢にも持たなかつた。こゝに翁の測り知るべからざる偉大さを認識せしめられる。單にこの點だけか

ら考へて、翁が土佐實業界の最高峰たる極印に、誰も異存のあらう筈がない。——昭和七年六月、八たび社長に重任した其の根氣だけでも偉いものだ。

### 九 不滅の金字塔

回顧すれば、翁が土佐セメントの取締役に就任以來、二十四年の長年月間、本縣唯一のセメント業に従事し、縣産の爲め氣を吐くこと洵に千萬丈、そして取締役社長として重任すること前後實に八期に及び、その間機敏なる頭腦と、洗練されたる棟梁の手腕を揮つて、克く業界の進展に貢献し、資本金一千萬圓の大會社として、全國有數の大工場たらしめ、本縣産業界の王座を占むるまでに仕上げたのである。即ち蕾より花を咲かし、花より實を結ばしめたのである。斯くて有意義の美を濟したる翁は、昭和七年十二月廿三日を以て、取締役社長を辭任し、土佐の産業史並に本邦のセメント史に巨大なる足跡を印し、そこに不滅の金字塔を遺したことを、縣民諸君と與に偕に、永く久しく祝福しなければならぬ。

×

指南車を胡地に引去る霞かな

×

無村



## 順風張帆白洋汽船

## 一 前身は鼎組

大正二年、高知市に創立された、白洋汽船株式會社の沿革に溯ると、その前身は、明治二十四年に出來た鼎組だといふことになる。鼎組は、宇田友四郎、川崎幾三郎、野中幸右衛門三氏の匿名組合から成る特異の存在で、翁が事業の擔當者、他の二人は、資金の提供者として、三位一體の船舶部を設けたのが、その發端とされてをる。翁の家は、代々海運業者であつた爲め、幼時より船舶に關する趣味と、智識を持ち合せてゐたし、明治十九年、日本郵船高知支店に入るや、傳統の素地に、新らしき海事上の視野が開け、爾來數年間は、繁劇なる職に在りながら、好む處に従ふて日夜研鑽を怠らず、行く／＼は、同社の重要な地位にも達しかねまじき、實力を蓄養したのに、惜いかな、一朝同支店の廢せらるゝ運命に遭遇したので、少壯氣銳の翁は、自ら奔走して高知汽船會社を發起したのである。天の攝理は、まことに不可思議だと云ふことが、この場合においても能く解る。すなはち郵船會社高知支店は、その存在によつて、翁の海事知識に開眼する良學校となり、良教師となり、良友人となり、良藥石となり、その撤廢によつて、翁の獨立自尊を誘導し、翁の經營力を啓發し、翁の爲め好

個の刺戟劑となり、翁をして、他日大成せしむる準備教育となつた事を知らねばならぬ。斯くて翁は明治二十三年を以て、高知汽船會社を起し、更に土佐海運會社を組織し、後ち兩社を併せて、之を土佐郵船會社と稱し、常務取締役兼支配人として、手腕を試み、明治二十七年、土洋商船會社を設立して、その支配人となるなど、行くところ可ならざるなき颯爽風景を展開した。白洋汽船の前身鼎組はこの間に生成し、日清戰爭當時には相當儲かつた模様で、前掲翁の回顧談（雄飛時代の二〇）がそれだ。

何事にも眞似をしたがる土佐人は、鼎組がぼろい儲けをしてゐるといふわけで、一般の人氣は滔々海運界に集注した一つの現はれとして、狭い高知に又候日本汽船と銘打つ船會社が生れ、競争の弊に堪へられなくなつた。是に於て翁は、調停役に廻り、明治三十年、土洋商船、土佐郵船、日本汽船の三社を合せて、新に帝國商船會社を起し、三十二年解散するに及んで、翁は鼎組に立て籠り、福運の到來を待望してゐたところ、偶々獨逸汽船の賣り船があることを耳にし、早速調査にかゝつて見ると既に三菱との間に豫備交渉が進められてをるのが判つたから、忽ち三菱を出し抜き、先方の言ひ値通り十二萬六千圓で買ひ取つた。當時の翁は千圓の金も持つてゐなかつたが、無理算段をし、一ヶ月四分の高利で金を借り、鼎組に兎とて大きな船が出來たぞと云ふ譯で、高知に歸り川崎、野中兩氏に其の事を話すと、兩氏共その獨斷專行に呆れ返り、澁面を作つたが、宇田翁は自信たつぷりで、直ぐ様



その船を北海道、臺灣間の運漕に使用し、一ヶ月四萬圓の利益を挙げ、四ヶ月繼續して、元利金を綺麗に拂ひ、日露戦争の時、政府の御用船に借り上げられ、六十萬圓を儲かつたのであつた。以上が白洋汽船の前身、鼎組の歴史である。

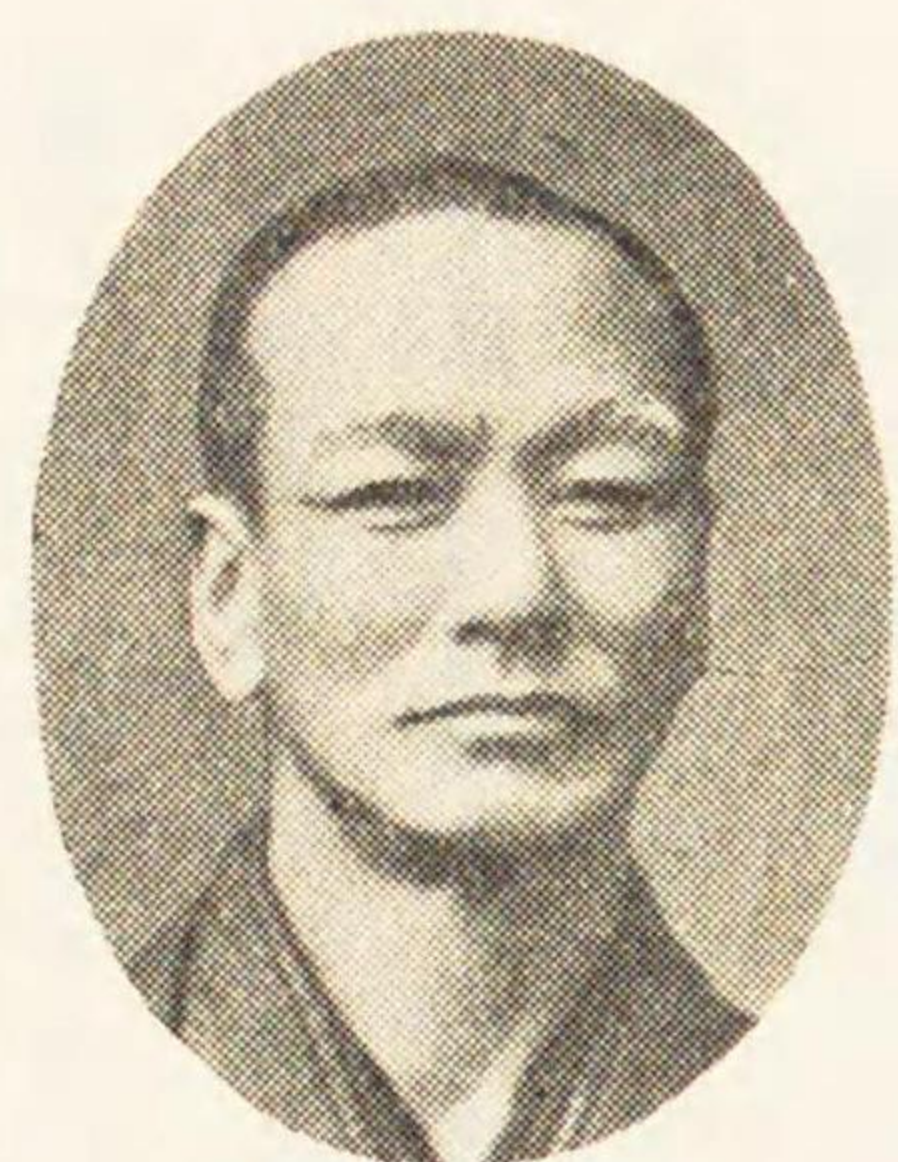
## 二 宇田船舶部

明治三十三年、翁は自ら土佐商船會社を創立し、その常務取締役大阪支店長となつたが、本據を大阪に定むると共に、從來の鼎組を宇田船舶部と改稱し、伊勢の大湊に造船所を設けて船舶を建造し、溝淵辨助氏をして専ら此の方の監督に當らしめ、天晴丸、天真丸、天祐丸、土海丸など次々に出來た日露戦後、海運界の不況の爲め、宇田船舶部の汽船は、兵庫の鍛冶米藏氏に賣却した。その時のことだ、東照丸と云ふ鐵船が朝鮮仁川沖に沈没し、買主から抵當が取れず、溝淵氏が種々苦心の末、競賣して其の船を取り戻し、引揚げて修繕を加へた。時は明治四十二年で、宇田翁が土佐電氣の社長に就任した翌年であつた。この東照丸が宇田船舶部に付き纏ふものだから、再び陣容を立て直し、溝淵氏をして天智丸、天龍丸を購入せしめ、更に小野造船所に於て北辰丸を新造し、溝淵氏が主として配船漕運の任に當つてをるうちに、翁の靈活なる頭腦には、早くも歐洲大戰の豫感が、一種天來のインスピレーションとして閃いたのである。是に於てか翁は、宇田船舶部の同志と共に、白洋汽船の創立に

取りかゝつたのである。

## 三 白洋汽船の創立

鼎組から宇田船舶部に、宇田船舶部から白洋汽船株式會社に、發展したその白洋汽船の創立總會は大正二年一月廿八日を以て、高知市北奉公人町川崎幾三郎氏方に於て開催された。宇田船舶部時代に功勞の多かつた溝淵辨助氏が新たに二千株の功勞株を貰つて、大株主に加はり、鼎組時代の宇田、川崎、野中三家の中にも、株の配當を受けた者がある。創立總會の出席者は



中野幸右衛門氏

宇田友四郎、川崎幾三郎、野中幸右衛門、川崎富三郎、宇田長鹿

の五氏で、其の代表株數一萬六千株、外に委任狀二通、その代表株數四千株、設立委員長の宇田翁より、會社設立の經過を報告すること左の如し。

大正二年一月十日、本會社の定款を作製し、次で同月廿五日發起人五名會合の上、株式申込を確定す、同月二十七日、第一回株金（一株に付十二圓五十錢）の拂込を了したり、仍て茲に創立總會を開催す。



左記事項に付決議を求む

第一、定款承認の件

定款全部を承認せり。

第二、本社の位置

當分の内、北奉公人町川崎幾三郎氏方に設置。

第三、第一期當選役員任期の件

本日選任する取締役の任期は、大正四年十二月開會の定期總會當日迄とし、監査役の任期は、大

正三年十二月開會の定時總會の當日迄とす。

第四、社長、取締役、監査役給料報酬の件

當分の内給料報酬を支給せざるものとす。

第五、取締役選挙の件

投票の結果、左の通り當選す。

一萬四千五百點 宇田友四郎

一萬四千五百點 川崎幾三郎

一萬六千點 野中幸右衛門

第六、監査役選挙の件

一萬八千點 溝淵 辨助

次で取締役互選の結果、宇田友四郎氏社長に當選せり。

取締役社長 宇田友四郎

取締役 川崎幾三郎

同 野中幸右衛門

監査役 溝淵 辨助

右は白洋汽船會社に保存せる決議録の寫しであり、一字一句を増減しないところに、寧ろ眞實の相が現はれてをと思ふ。

#### 四 盛大な開業式

同年二月二十日、最初の株主總會を川崎幾三郎氏方にて開催、出席者

宇田友四郎、川崎幾三郎、野中幸右衛門、川崎富三郎の四名、外に委任狀の者、溝淵辨助、宇田

長鹿、野中常三郎の三名。

當日の議事は、第一に船舶購入の件で、宇田翁所有汽船天明丸を二十萬圓に、天武丸を十二萬圓に



買入の決議を爲し、所有權移轉の上は、三月一日より開業の事に決定、併せてセメント積載運漕用の汽船一隻を鐵工所へ注文する事も決定し、開業式は時期を見て天明丸を浦戸港へ回船せしめ、披露券宴會を催す申合が出来、之にて大體の陣容整ひ、三月一日を待つて盛大な開業式を擧げ、茲に愈々白洋汽船の營業が始められたのである。

### 五 蓄 の 時 代

大正二年三月の開業期より、大正四年末に至る間、花に譬えたならば、白洋の蓄時代と稱すべきであらう。蓄時代には匂ひもないのだから、別に人目を牽引する何物もあり得やう筈がない。だから甚だ無色無味ではあるが、順序として、第一回より第六回に至る、定時總會の内容を盛ることにする。

第一回總會 開業後四ヶ月目の六月三十日、川崎邸にて開く、出席株主は二月二十日の顔觸と同様七名、席上宇田社長より營業報告があつたが、三月一日より五月三十一日に至る三ヶ月間の諸計算、損益左の通り。

一金四萬二千二十九圓六十七錢	總收入金
一金四萬八千二百七十四圓十七錢五厘	總支出金
一金一萬八千九百五十圓	船價償却金

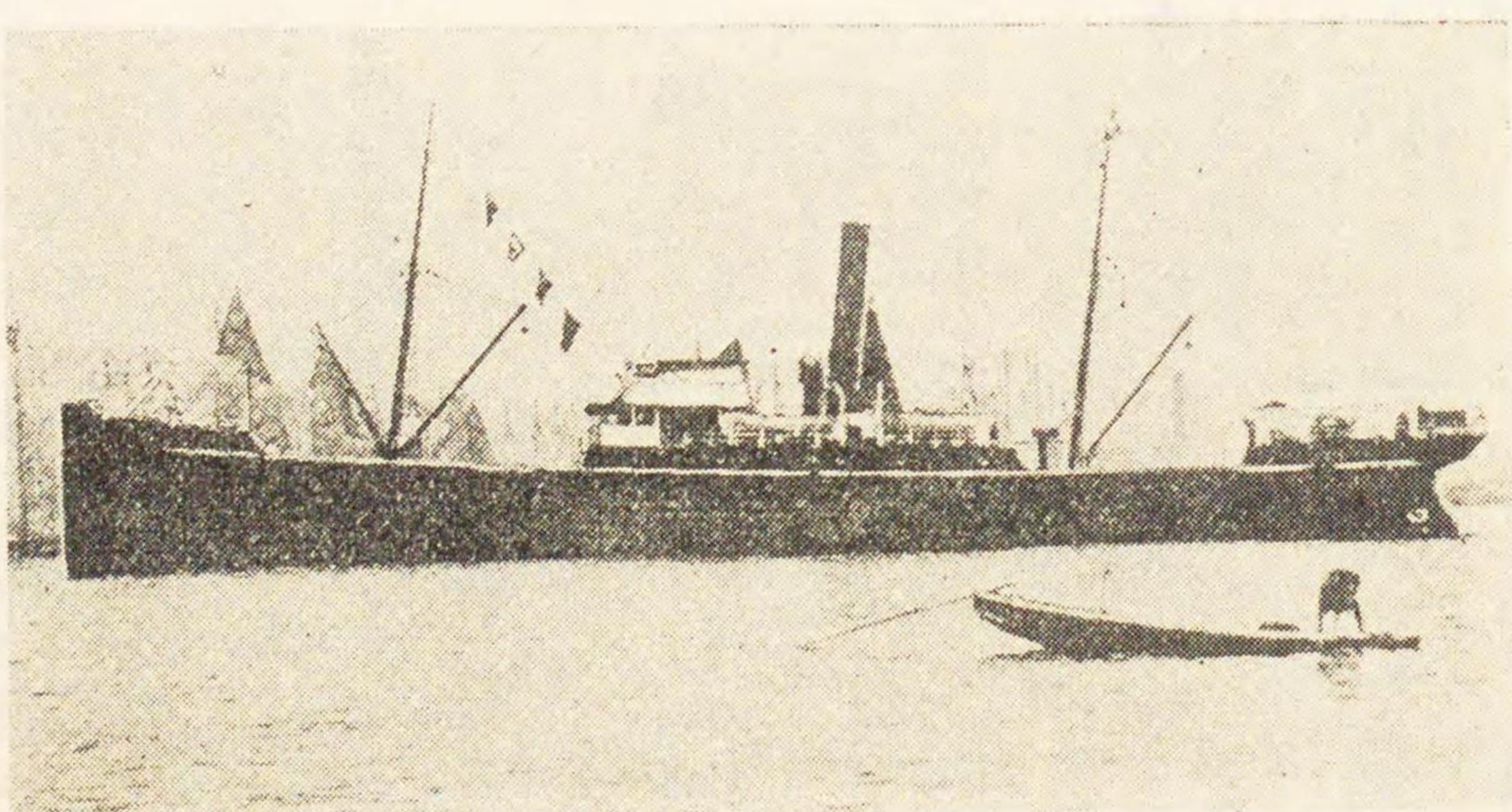
差引金二萬五千九百九十四圓五十錢五厘 當期損失金  
而して船價償却の件は、左の如く標準を定めたのである。

天明丸 船齡三十年と見積り、經過年數二十三年に付  
殘年七ヶ年に割當（船價廿萬圓）每半年間に一萬四  
千三百圓宛。

天武丸 右と同様、十七年經過に付、殘年十三年に割  
當、每半年間に四千六百五十圓宛（船價十二萬圓の  
廿六分一宛）償却すること。

大阪取扱店 事業の緒に就くと共に、大阪に取扱店設置の必要を生じた。恰度北堀江通四丁目、適當の事務所が見つかつたので、取敢へず二萬千圓にて購入、直に三千圓の見積にて改築に着手した。此處が現在の白洋本社となつてをる。

第二回總會 同年十二月三十日、第二回定時總會を川



丸 武 天



崎邸に開く、出席者前回通りの七名、當期間損益計算左の如し。

一金十萬六千八百八十八圓二十七錢	當期總益金
一金七萬九千十六圓五十錢	當期總損金
差引 二萬七千八百一圓七十七錢	當期純益金
内 二萬五千九百九十四圓五十錢五厘	前期缺損金
差引 二千六百七圓二十六錢五厘	純益金

當日の總會にて左の二件を議了した。

一、汽船天運丸償却の件

船齡二十年と見做し、半期二千五百圓宛の償却を來期より實行すること。

一、船舶購入の件

總噸數二千噸乃至三千噸の船舶一隻を購入すること。

第三回總會 大正三年六月廿五日、川崎邸にて開會、利益金處分案左の如し。

一金十二萬二千三百十四圓二十二錢	當期 總益金
一金十三萬三千百六十圓十錢	當期 總損金
差引 一萬八百四十五圓八十八錢三厘	缺損金

金 二千六百七圓二十六錢五厘	前期 繰越益金
再差引金八千二百三十八圓六十一錢八厘	純損金
右純損金を後期へ繰越す事とせり。	

天龍丸の購入の件

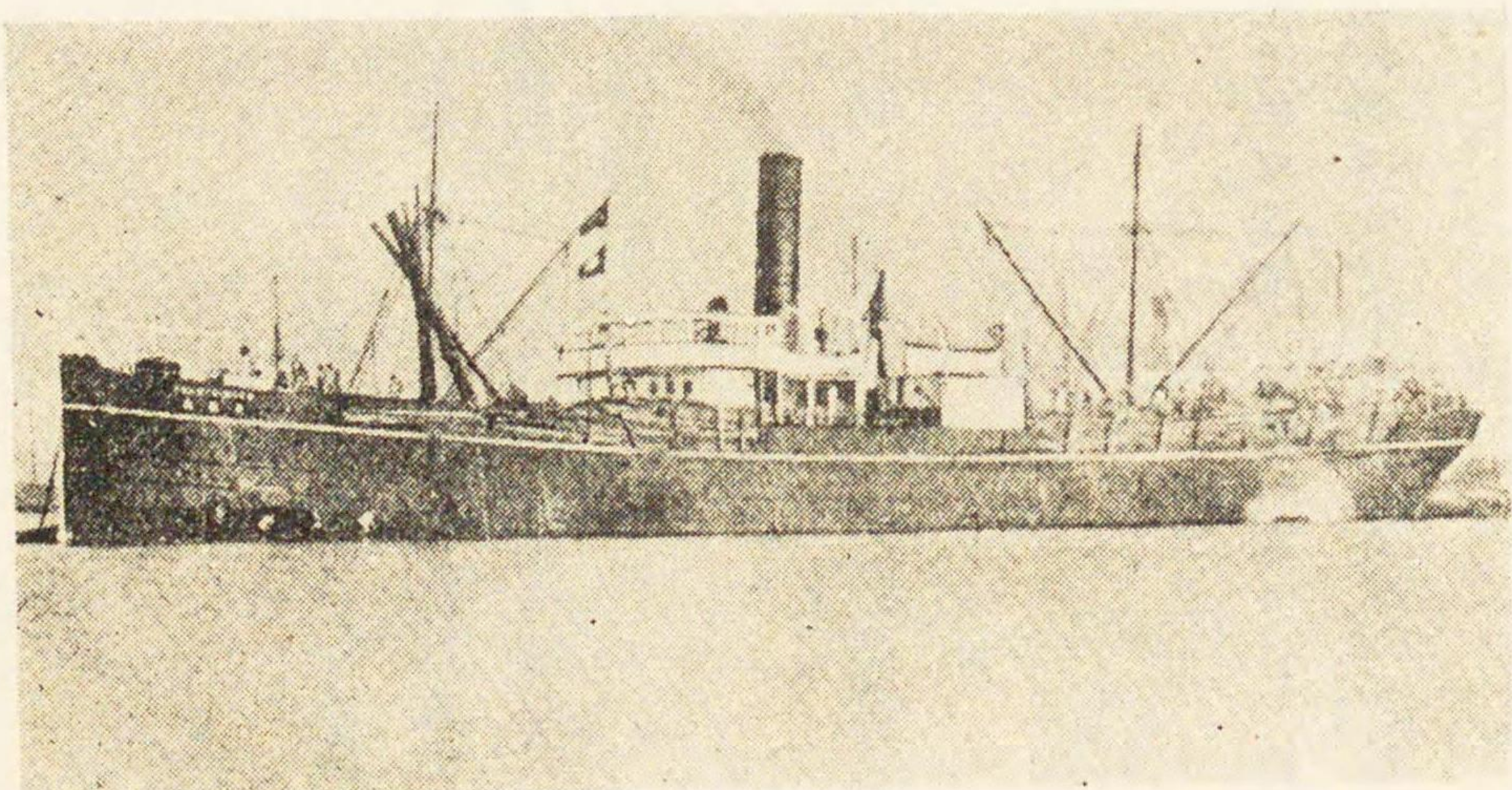
當期に於て購入せる汽船天龍丸の船價償却は毎年決算期に於て七千五百圓宛償却し、當期より計算することになつた。

第四回總會 大正三年十二月廿六日、川崎邸にて開く

出席者前回通り、利益金處分案次の通り。

一金十二萬八千九百九十二圓七十一錢	當期 總益金
一金十一萬六千八百五十八圓八十一錢五厘	當期 總損金
一金八千二百三十八圓六十一錢八厘	前期繰越損金
差引三千九十五圓二十七錢七厘	當期 純益金

監査役の選舉を行ひ、溝淵氏當選。



丸 龍 天



第五回總會 大正四年六月廿八日、川崎邸にて開會  
當期間に於ける顯著なる事柄は、一月廿二日附を以て

天明丸 天龍丸

の二隻を同年十二月満期の筈を以て、神戸市小栗松三郎氏へ、一萬二千圓（二隻にて）の備船契約を爲したる事と、三月十一日附を以て、大阪鐵工所山岡順太郎氏と造船契約を爲したる事で、此の新造船は總噸數三千二百噸の鋼鐵新形船にて、重量五千噸を積載、そして其の造船代價は三十五萬五千圓にして、同年十二月末日迄に竣工引渡を受くる契約が成立した。

當期間の収入

承認された損益計算書を見るに

貸船料 六四、〇一〇八〇

運賃 四七、四五八八三〇

となつてをる。次に

財産目録 を見るに、株主八名、その未拂資本金七十五萬圓、船舶代價（汽船四隻）四十八萬八千五百圓、大阪取扱店の地所建物約四萬七千六百圓、新造船代假出金三十四萬九千五百五十七圓六十五錢の數字が示されてをる。

利益處分案

金十一萬二千十六圓廿九錢

當期總益金

三千九十五圓二十七錢七厘

前期繰越金

合計十一萬五千百一圓五十六錢

金十五萬六百六十圓七錢

當期總損金

差引三萬五千五百四十八圓五十錢三厘

當期純損金

第六回總會 大正四年十二月廿八日、初めて本社に開會、此の時に至り堀詰の大東漁業株式會社の二階に白洋汽船會社の事務所を置いた。

當期間に於ける著しき事柄は

天明丸 天龍丸 天正丸

の三隻を大正五年中、神戸市小栗回漕店と貸船契約を爲したる事、及び大阪鐵工所へ大正六年八月竣工の約束にて五千噸級の貨物船一隻を注文した事である。

利益金處分案

金十四萬二千三百四十九圓三十二錢九厘

當期純益金

金十二萬四千八百五十三圓七十一錢

當期總損金



差引一萬七千四百九十五圓六十二錢九厘	當期純益金
金三萬五千四十八圓五十錢三厘	前期缺損金
再差引一萬八千五十二圓八十八錢四厘	當期總損金
取締役の重任	取締役任期滿了に付改選の結果、全部重任。

### 六 黃金景氣來る

#### 歐洲五ヶ年戰爭の餘波

白洋汽船の創立された其の翌年の大正三年、歐洲に於て大戰爭の勃發するや、我が國も日英同盟の義に依り、獨逸の東洋に有せる青島を攻略し、續いて獨領の南洋群島に海軍を向はしめて、敵の根據地を掃蕩し、尙ほ我が艦隊は地中海に迄出動して、聯合國の艦隊と共に不斷の活動を爲し、遂に終局の勝利を占めたのであるが、此の五ヶ年に亘れる大戰に於て、獨逸は兇横を恣にして、潛航艇を各國の海岸に派遣し、武装せざる商船をも爆沈せしのみならず、局外中立國の船舶にも水雷を發射し、之を轟沈せしめ、野獸的の亂暴を頻出し、之が爲め世界は次第に船腹の不足を訴へ、我國の汽船も續々歐洲へ買収せられたので、船價頗る昂騰した。加ふるに歐洲各國は防守の爲めに壯丁は軍役に召集せられ、各工場は閉鎖し、各國の生産事業が中止となつた影響より、從來東洋諸國に輸出したる貨物も





中絶の姿と成り行きしに反し、我國は聯合國の一にありしとは云へ、東洋に於ける獨逸勢力の撤退後は、一部艦隊を除くの外は、戦争とは殆んど没交渉であつた。だから東洋並に南洋諸國の市場は、我國より物資を仰ぐ需用は、月に年増加し、從來歐洲より我國に輸入せし品物でも、今は逆に歐洲方面へ輸出するに至りし事に依存して、我國の工業は之が爲めに急激に膨脹し、輸出は旺盛を極め、既往の輸入超過は一變して、輸出超過となつた。此の如き形勢に促されて、船舶の不足は、忽にして造船熱を煽り、大正五年頃から、我國の汽船會社に黄金の波が打ち寄せる様になつた。白洋汽船は、宇田翁の靈眼と、天祐とが重なり合つて、恰かも此の黄金景氣を待ち設けたる如く、千載一遇の絶好機會に恵まれたのであつた。

### 七年一割配當

大正五年六月廿五日、第七回定期總會を川崎邸に於て開催、出席株主と其の株數左の如し。

宇田友四郎	五、五〇〇株
川崎幾三郎	五、五〇〇株
野中幸右衛門	一、〇〇〇株
溝淵辨助	二、〇〇〇株



野中 常三郎	一、五〇〇株
横山 慶爾	三〇〇株
川崎 富三郎	一五〇株
川崎 庄五郎	五〇株

委任状に依る出席者左の如し

小栗 松三郎	二、〇〇〇株
同 りよ	一五〇株
同 英一	一五〇株
宇田 長鹿	一〇〇株
横山 喜代	一〇〇株
横山 彪	一〇〇株
野中 幸雄	一〇〇株
坂本 伊久	一〇〇株

宇田社長より、當期間に於ける海運界の状況に併せ、本年四月十九日付を以て、大阪鐵工所へ、イシヤード式重量噸數六千八百八十五噸積の汽船一隻（代金八十萬圓）を、大正六年八月末日出來の

契約にて注文せることを報告した。

利益金處分案

金四十一萬五千七圓廿六錢一厘	當期總益金
金二十七萬七千四百圓六十六錢	當期總損金
金一萬八千五百五十二圓八十八錢四厘	前期缺損金
差引金十一萬九千五百六十三圓餘	當期純益金

此の配當計算

一萬圓	決定準備金
一萬二千圓	消却準備金
一萬九百圓	賞與交際費
一萬二千五百圓	配當金（年一割）
七萬三千六百六十三圓餘	後期繰越金

監査役の選舉 監査役溝淵辨助氏辭任、横山慶爾氏當選。



### 八 第八回定時總會

天明丸撃沈の椿事  
年八割の配當

大正五年十二月廿五日、堀詰の本社に於て開會さる。當期間海運界は前期に引續き順境であつた。併し九月頃より稍々沈滞の氣配ありしも、期末に至りては復活の狀況を呈し、好況の中に此の期を終つた。

この年、九月十日、佛國マルセイユ港外に於て、社船天明丸が獨逸潜航艇の爲め撃沈せられた。然れども幸にして乗組員一同無事なるを得、且つ船體も戰時保險十萬磅を附しあつたので、海運界好況の絶頂に、船舶一隻を失つたことは同社の遺憾至極とする處であつたかなれど、計算上に於ては、その爲め八十萬圓の利益を増し、未拂込資本金の全部を拂込むことを得たから、何が仕合かも分らぬ。

#### 利益金處分案

金百三十二萬七百七十二圓餘	當期總益金
金七萬三千六百三十三圓餘	前期繰越金
合計金百三十九萬三千九百三十六圓餘	

内三十六萬九千九十七圓餘	總 損 金
差引百二萬四千八百三十八圓餘	當期純益金

#### 此の配當計算

五萬圓	法定準備金
九萬五千圓	賞 與 金
十萬圓	配 當 金(年八割)
七十五萬圓	特別配當として資本金に拂込充當
二萬九千八百三十八圓餘	後期繰越

### 九 九割以上の配當

資本金を一千萬圓に増加

大正六年は海運界益々好調なりし爲め、上半期の純益金五十一萬二千七百四十一圓を擧げ、九割の配當を爲し、下半期には純益金七十一萬四千三百七十六圓餘に達し、五十萬圓を配當金とした。翌大正七年の上半期には純益金七十九萬八千九百十三圓餘で、配當金額六十萬圓、その時の財産目録を覽るに



五十一萬三千五百十圓	船
五十五萬七千三百四十六圓餘	假出金
六十五萬九千三百九十五圓餘	預ケ金
二十四萬六千九百一圓餘	大阪取扱店
三萬圓	地所建物

となつてをる。宇田翁は、大正七年六月廿五日堀詰の本社に於て開會したる、第十一次定期總會の議長として左の議案を附議し、満場一致可決した。

一、當會社の資本金を一千萬圓に増加する爲め、左の方法に依り、額面五十圓の新株式十八萬株を發行するものとす。

一、大正七年六月三十日現在の株主は、其の所有株式一株に付、新株式九株の割合を以て新株式の引受を爲すこと。

そして同年九月十七日、本社に於て臨時株主總會を開く、株主二十七名(此の株數二十萬株)新株式十八萬株は、株式申込證二十通にて各新株に付、第一回拂込金十二圓五十錢宛を拂込、金額二百二十五萬圓が確實に拂込濟みとなつたのである。株主氏名左の通り。

宇田友四郎、川崎幾三郎、横山慶爾、宇田耕一、溝淵辨助、野中幸右衛門、小栗松三郎、野中常三

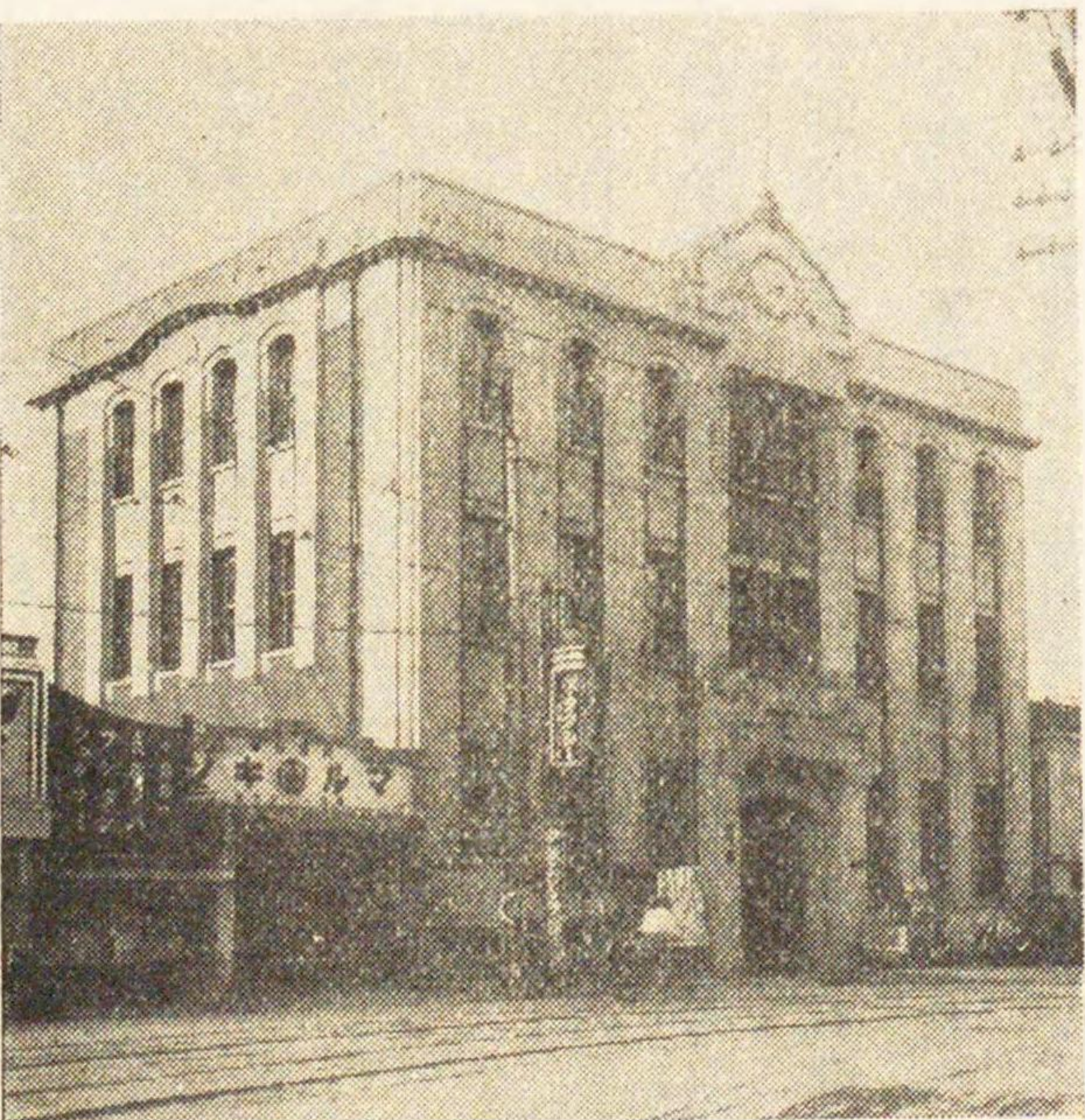
郎、川崎富三郎、川崎松、小栗英一、小栗りよ、宇田長鹿、宇田喜代、宇田菊、野中幸雄、野中正衛、野中幸治、野中敏、阪本伊久、横山きよ、横山彪、横山治彦、川崎庄五郎、溝淵龍也、溝淵照、溝淵美子。

### 一〇 本社を新築

大正七年頃は、海運界の最絶頂期であつた。此の好景氣に促がされ、同年二月、工費十萬圓を投じ、高知市堺町に白洋ビルを建築し、中央を白洋汽船の本社とし、階下東側は翁の頭取たる高陽銀行、西側は祖谷水力電氣會社の事務所とした。

### 一一 天正丸の沈没

大阪鐵工所で造つた汽船天正丸が、その頃、臺灣沖の綿花島附近に於て沈没した。同船は四十五萬圓の保險が附いてゐたから、會社には損害がな



白洋ビル



かつた。

### 一二 天幸丸又た沈没

#### 五百萬圓の保険金

天正丸が沈没したから、直に大阪鐵工所へイシャード、ウツド式の天幸丸（七千噸）を百二十萬圓で注文した。此の時大阪鐵工所は

神戸の橋本喜造、大阪の山本藤助、大阪商船、そして白洋汽船

の四ヶ所から注文を受け納れてをり、白洋側は念を押し、他の三ヶ所と同時期に出来上る様の約束を結んだ。然るに鐵工所は、材料が来ぬと云ふので、それを口實に中々造りさうな模様が無い。そこで大阪探題の溝淵氏が偵探して見ると、材料の來てをることが判つた。溝淵氏は宇田社長の旨を受け、鐵工處に嚴談を持ち込むと、船價暴騰のため不可抗力と稱し、四隻共到底着手が出来ず、受け込んだまゝ放棄してあるとの釋明なものだから、大阪商船社長山岡順太郎氏と語らい、四隻の内、白洋の分一隻、大阪商船の分一隻（價格二百萬圓）都合二隻を造ることになつたが、それでも中々埒が明かない。そこで臨機應變の手段を執り、大阪商船と仲間一隻を急ぎ造らす諒解成立、同時に大阪商船は二百萬圓の分を抛棄する條件で、その代り三年間時價半分の値に相當する金額を、白洋汽船から

大阪商船へ與へることにし、結局白洋が相撲に取り勝つて、白洋から注文した百二十萬圓の天幸丸が海運界の全盛期にやつと出現して凱歌が揚つたのである。出来上つて見ると、船價七百萬圓の價格があると云ふので、白洋は五百萬圓の保険を付け、大阪商船は二百萬圓の利益保険を附けた。然るに其の初航海に爪哇から砂糖を積んでの歸り、不幸長崎沖の一ノ瀬で沈没したが、其の代り五百萬圓の保険金が手に入つたから、觀様により、ぼろい儲けでもあつた。

### 一三 白洋海運を併合

#### 資本金を一千廿萬圓に増加

三隻の汽船を相前後して沈没せしめた白洋汽船は、幸運の神が付き纏ふてをるかの様に、禍を轉じて福と爲すことが出来た。是に於て大正八年十二月、海運界の好況に乗じ、白洋海運株式會社を合併し、資本金を一千二十萬圓に増加した。

白洋海運株式會社は、濱川茂助、藤村五郎氏等が經營主、土佐で造つた五艘の木船を有つてゐた宇田翁の慧眼には、大正八年の秋から反動期の襲來が映じた。日清戦後、日露戦後の海運界に經驗を有する翁は、胸中既に反動の波に警戒する處があり、八年十二月に至り、斷然本社を大阪出張所に移し、翌九年一月、溝淵氏を取締役に据へ、小栗回漕店を神戸代理店とした。で白洋海運の合併は、



宇田翁が整理に乗り出した其の駄賃の意味で、救済したと云ふのが其の内面的事實であつた。

#### 一四 十五割の配當

大正九年には、愈々反動の嵐が押し寄せて來たから、機を見るに敏なる宇田翁は、斷乎緊縮方針に轉換する其の前提として、思ひ切り四百九十五萬圓の配當を行ふた。即ち拂込資本額三百三十萬圓に對し、實に十五割の配當で、翁の果斷と遠慮には、全株主が悉く敬服した。これが所謂掉尾の大配當であつた。

#### 一五 白洋景氣一色

白洋が儲かると云ふ聲は、大正五年頃から本縣の事業界に漸く高まり、大正七年、堺町に白洋ビルの出現と共に、其の宏壯なる白洋本社は羨望の標的となつた。從來本縣の造船工場といへば、種崎以外には視る個所は無かつたが、一たび海運熱が、白洋儲かるの掛聲に煽らるゝや、船でなければ夜が明けぬ状態となり、種崎に於ても、彼の三業組並に久造船所の外に、幾多の俄か造船所が起り、船工の日夜に打つ丁々の槌音は、遠近に反響し、之に従事せる労働者の、此の界限に入り込める數は、擧げて算ふべからざる空前の殷賑振りを呈し、酒樓旗亭の繁昌は文字通り記録を破つたのである。當時

の土佐人は、これを白洋景氣と呼んで有頂天となつた。

#### 一六 土佐の造船熱

白洋景氣に煽られた土佐の造船業は、沿海の地に遍く、高知は巴塘前の棒堤にも、大船巨舶の龍骨を組み立てらるゝ有様で、長濱の河邊にも幾多の新造船が進水せられ、外洋に面せる東西の各郡に於ても、東は吉良川、安藝等を最も熾なりとし、西は須崎を筆頭として、高幡兩郡の沿岸に、新造船の濱邊に横はらざる處は、反つて尠なかつた位で、土佐山中の松樹は、幾んど造船材料に伐り盡され抱大の一幹すら、幾百圓にて買ひ取らるゝ景氣は、寧ろ凄ましい程であつた。

#### 一七 土佐海運株式會社

縣會議員が主唱者

この潮流に伴れて、本縣に勃興した海運の企業者は、屈指に遑あらず、それ等は皆な白洋組の船成金振りに垂涎して、孰れも「小宇田」を念願しての事であつた。乃ち大正五年には當時の縣會議員の發起した海運革新會なるものが勃興し、翌六年五月に堺町に事務所を設け、土佐海運株式會社の創立に着手したかなれど、船頭多くして見るゝ船を山に乗り上げ、遂に成立を視ずして看板を卸した。



## 一八 船會社の濫興

然るに、翌大正七年九月二十四日には、太平洋汽船會社が創立總會を開き、其の事業の手始めに汽船宇佐丸（五百五十噸）を買収し、十月二十日の初航海に大阪より貨物を積んで浦戸に入港、同年宇佐村の清水虎太郎氏等は、高陽汽船株式會社を發起し、事務所を高知市朝倉町に構へ、新造汽船花陽丸を浮べて、同十一月より航業を開始した。又た臼井信次氏等の高知海運株式會社は、従來同社の顧問たりし臼井鹿太郎氏が所有した第二草丸、第二風機丸の提供により企業したものであつた。又た旭汽船株式會社の名稱で、同年十二月より汽船播磨丸、第二弘洋丸を以て、南洋貿易を目的に航業を開始した。又た土佐汽船株式會社は、目代常太郎氏を社長に、事務に山本彦三郎氏、取締役に江淵楠英氏、監査役に濱口恒十郎氏を据えて樹立するし、其の傍ら又た中央商船株式會社とて、濱口恒十郎氏を社長に、谷協靜一氏を専務に、資本金百萬圓を以て、汽船は第八幸福丸、第六幸福丸、第十幸福丸を使用し、尙ほ種崎三業組に依託した新造船は、大正八年竣工の豫約を以て建造に取りかゝり、此の船の成つた曉には、九州の若松と、伊勢の津、そして尾ノ道、下ノ關間を航し、且つ朝鮮釜山に到る航業をも開く計劃となつてゐた。此の外、新に汽船會社を興すべく其の筋に書面を提出したものは一々枚擧の煩に耐えない程で、斯く海國の土佐に海運業の一時に勃興したことは、實に未曾有の盛事

であつたが、要するに白洋汽船の隆昌に垂涎した其の播播き仕事で、當て込んだ歐洲大戰は、大正三年の開始後、五ヶ年にして終熄したから、此等は悉く越中禪の結果となつて了つた。

## 一九 思ひ切つた減資

歐洲戦後、海運界の不況を見越した宇田翁は、極力緊縮方針を採り、大正十三年には一千二十萬圓の資本金を百萬圓に減じ、更に昭和二年十一月、資本金を五十萬圓に減少し、同四年十一月、大和汽船を合併、資本金を百萬圓に増加した。

大和汽船は、溝淵氏が専務として經營した會社で、大和丸、千代丸が其の所有船であつた。

## 二〇 現在の活況

昭和十二年一月、百萬圓の資本金を二百萬圓に増加した。この間もとの鼎組以來の同志たる野中幸右衛門氏先づ逝き、川崎幾三郎氏も亦た歿し、宇田翁のみ残つてをられたが、昭和十三年の晩秋、紅葉の風に散る頃、翁も遂に亡き數に入られた。現在は

社長 溝淵辨助 取締役 宇田耕一



溝淵辨助氏



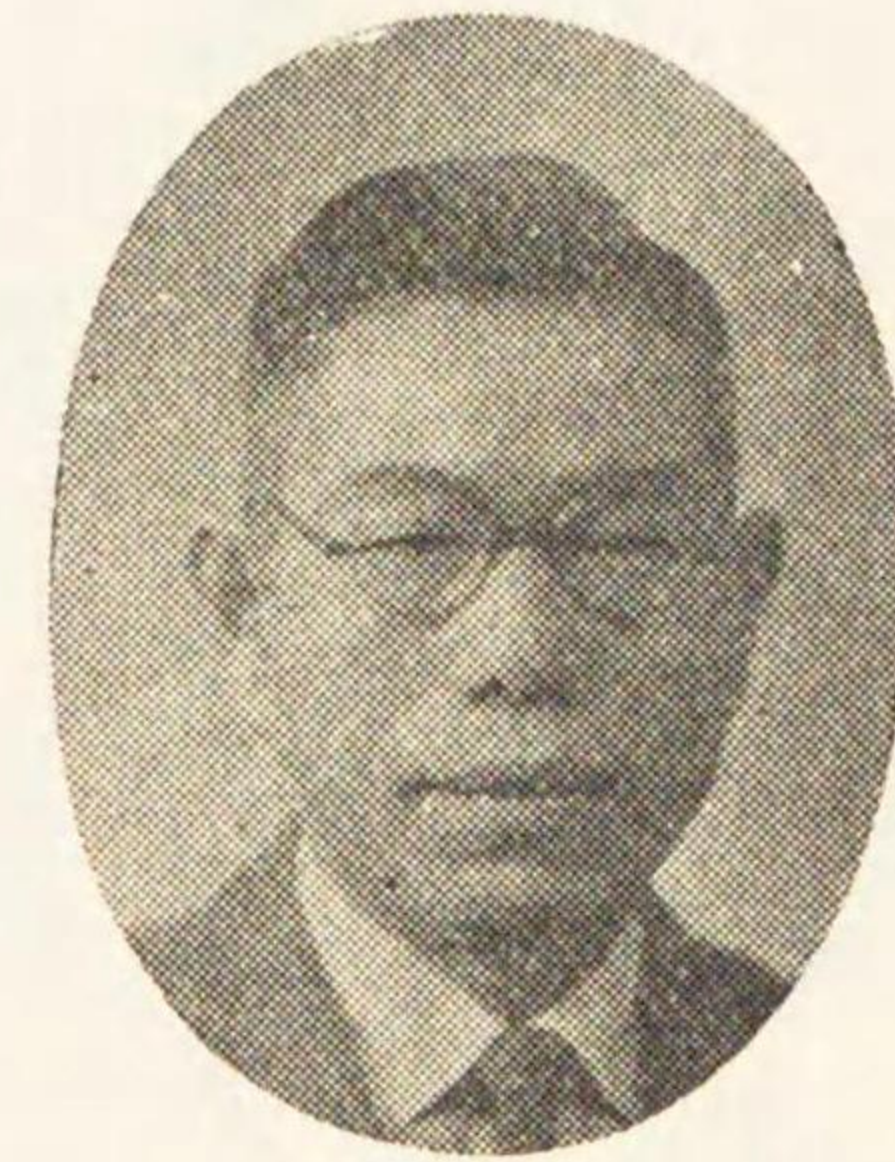
海底に足跡のあるよい天気

古川柳

洋汽船會社に、一陽來復の春光が輝いた眼前の風景を祝福する。

×

×



山崎虎吾氏

取締役	山崎虎吾
同	岡八
監査役	小栗英一
同	小栗龍三
同	小川堅始

諸氏の陣容で、所有船

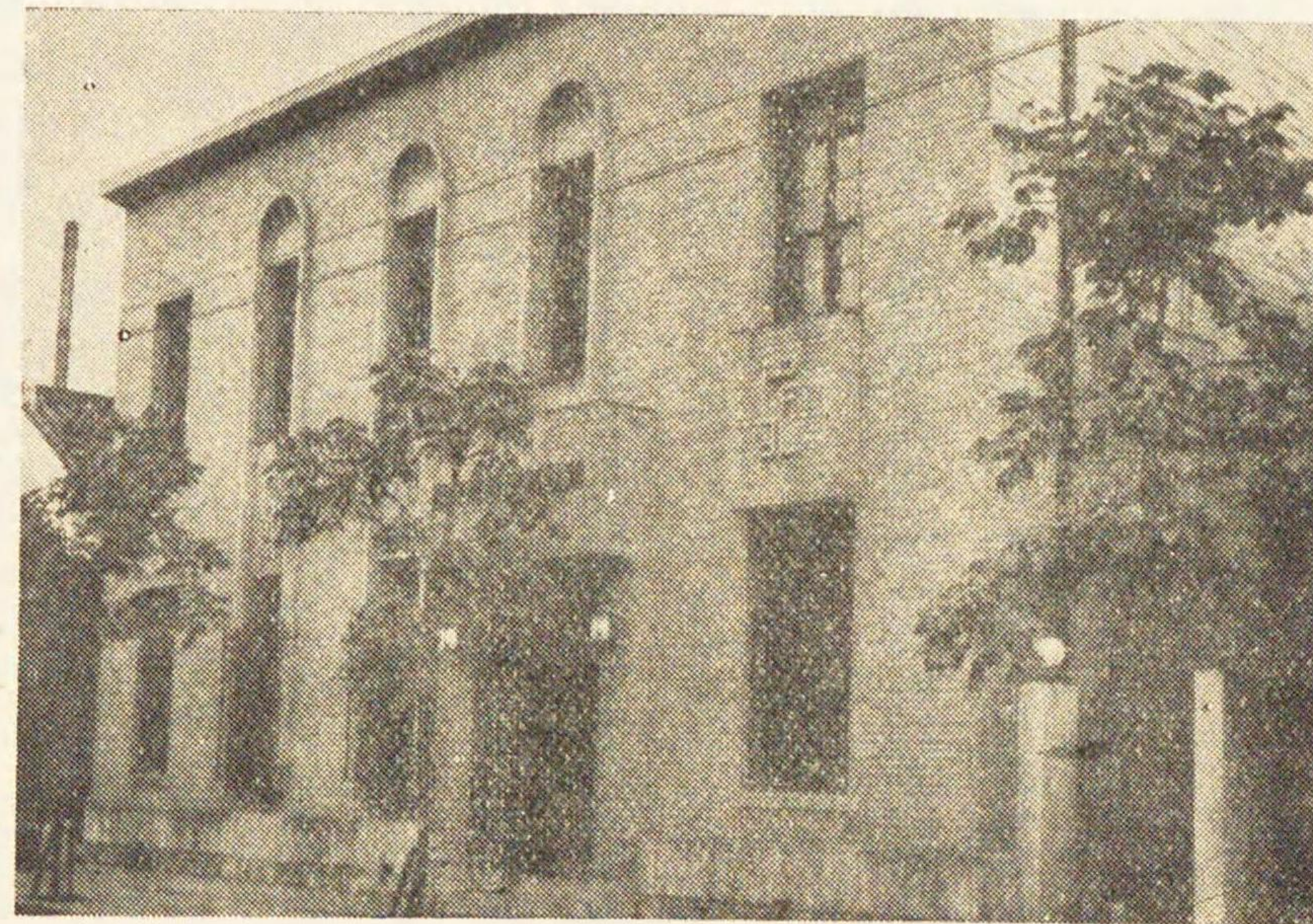
おほいを丸(九、〇九八噸)

丁抹丸(九、〇八九噸)

天平丸(八、八四九噸)

大和丸(六、八二二噸)

の四隻は、支那事變の爲め、全部政府に借り上げられた。普通の貸船料は事變の關係で、一噸一ヶ月十圓の相場であるけれども、非常時の御奉公に五圓の割で、御用船に使用されるのであるが、それでも月十七萬圓の貸船料となるから、歐洲大戰後約十八年にして、再び海運界に活氣の時代を迎え、白



北堀江白洋汽船會社



## 土佐中學校の設立

### 一 その出發点

富を利用するの難きは、富を獲得するの難きよりも難し矣。白洋汽船によつて、數百萬圓の巨富を致した宇田翁は、その富を如何に利用すべきかに就いて、いろ／＼考へたであらう事を推察する、その中に於て、翁の腦底に、學校設立の胚芽があつたか什麼うか。横山又吉氏が市商を隠退した時、同氏を校長とする簡易商業學校設立の意思が、動いてゐたといふ事が事實とするならば、後進子弟の教育には、決して無關心でなかつたと云ふ斷定を生む譯だが、無から有は生じないから、商業教育の胚芽が、他の勸説を受けて、英才教育の嫩葉に變じたとの觀測は、當らずと雖も、遠からずではないかとも思はれる。白洋汽船で大に儲かつたのは、翁一人でなく、川崎幾三郎氏並に他の株主は、皆な富屋を潤した連中である。この黄金風景を眺めて、その富の一部を世の爲に割愛したいと思案したのが、名市長藤崎朋之氏であつた。翁と藤崎氏とは兩汝の間柄で、平素翁の「財」に對する觀念を能く理解せる氏は、「富んで之れを楽しく使用せざる人は猶ほ黄金を運ぶ驢馬の菊を食ふが如し」との金言を親友の爲めに活かしたいと考へ、或日助役川島正伴氏にその話をした。話の要點は、この際翁と川崎



氏之朋崎藤

る。

### 二 翁が生みの親

三人會で、三段構への豫算が出来たとは云へ、未だ肝腎の本人には會つてゐない。蓋し三人會の腹案は、先づ三人が手を携えて宇田翁に會ひ、打診の結果、有望の見込が附いたならば、之れを在京の

氏とに金を出さしておきたいと云ふのであり、それが發端となつて、川島氏及び市視學西山庸平、市會議員池本浩靜三氏が、市長の意思を體しての會合となつた。三氏は孰れも教育に一家の見識を備へた人物であり、その意見が期せずして、合致するものゝある事を藤崎氏は知つてゐた。そして宇田翁が君子三樂の一たる「心に恥づる所無き」人物たることは、夙にその認むるところであると同時に、天下の英才を得て之れを養成するの樂しみも、話せば解かる人たることを頭に置いてゐたものだから右の三人會は屢々相集り、屢々協議を重ねた結果、英才教育のため資金を出さするのが、最も有意義だとの結論に到達したので、早速この三人會において豫算私案を作り  
 第一案百萬圓、第二案八十萬圓、第三案六十萬圓  
 と三通りの膳立が出来た。これが抑も土佐中學校創立の發端である。



先輩北川信從氏に持ち込み、同氏より翁に切り出してもらふ段取りであつた。北川氏は司法官畑の人で、長崎地方裁判所検事正を辭めると、直ぐ長崎市長に選ばれて就職、後ち栃木、新潟の知事に任ぜられ、官界を退いてからは、東京芝罘三田小山町に悠々閑日月を楽しんでゐた。北川氏と翁との交際は随分ふるく、大阪、廣島あたりの司法官時代から、ずつと相識つてゐた本統の友人關係で「北川！ 宇田！」と互に呼び切りにする親しさであつた。そして北川氏と藤崎氏とは極めて如才の無い肝膽相照、至誠相許す間柄であつた。此の如き好縁の蔓を握つてをる發起人組は、一日相伴ふて金の射とめるべく宇田翁を訪ひ「非常な御成功の御様子に承はりまするが、何か一つ縣のために金を出されては如何ですか」との伏線網を敷いたところ、翁は言下に、そして快濁に「出してもよい」と共感の意思を表明し、一行を満足せしめたのであつた。是に於て三發起人は、高根の花に手の届いたやうな歡びに浸りつゝ、早速豫定のコースを踏んで、在京の北川氏へそれを持ち込んだ。アマノジャコを床の置物にする北川氏は、容易に他人の言をその儘受け納るゝ人でない、三人から數回手紙を出しても、それが物になるかと云つた調子で、中々御興を上げやうとせぬ。いよくアマノジャコぞと云ふので、三人は必死となり、この通り手形を取つてをるからとて、最後の手紙を示し、やつと來縣してもらひ北川氏と發起人側と第一回の會見が公園花月亭に於て行はれた。その時發起人側の第一印象は、うかと百萬圓だの、八十萬圓だのと言つたら、その場でアマノジャコの本領をむき出して演襲せらるゝ危

機を豫感したので、豫算額を最小限度の六十萬圓として北川氏に持出した。その程度なら應ぜぬことあるまいとて、北川氏から更に宇田翁に持出した。翁は藤崎市長の見抜いた通り、人材養成には双手を擧げて賛成した。然かもその賛成が、我が意を得たりと云ふ喜色満面の賛成振りで、翁一人で百萬圓でも投げ出し兼ねまじき勢いであつた。けれども謙虚にして、義理と人情とに重きを置く翁は、事業を共にし、儲かりを共にしてをる盟友川崎氏の身の上をも考へた。そして子孫の無い川崎氏はこの教育事業へ金を出しておくことが、自己を永遠に生かす所以となる、だから宇田一人の事業とせず、二人共同の事業にすると云ふ趣旨を以て、川崎氏を同意せしめたものと思はれる。川崎氏を誘ふたのは、寄附行爲を折半と云ふやうな思惑からでは決してなかつた。實際その時の翁の共鳴振りは、素晴らしいもので、百萬圓眼中に無し概があつた。だから北川氏が乗り込んで、二三時間の間に話はスラ／＼と進行し、「川崎、宇田財團法人寄附行爲」の決定となり、大正九年二月を以て許可された。この経過の證明する如く、藤崎名市長の發意あり、北川信從氏の斡旋ありと雖も、相手方が宇田翁でなかつたならば、この事業は斷じて成立しない筈のものだ。事實は最善の雄辯である。土佐中學校の生みの親が、翁であることは多言を要しない。

### 三 所謂人材教育



土佐中學校は、國家有爲の人材を養成することが其の目的で、設立趣意書に  
 本校は大戦後國運の進展に伴ふ中等學校内容充實の趣旨に依り設立せられたるものにして中學校  
 令の示す所に據り、中堅國民の養成を目的とするは論を俟たざれども亦た一面高等教育を受くるに  
 十分なる基礎教育に力を致し修業後は進んで上級學校に向ひ他日國家の翹望する人士の輩出を期す  
 るものなり

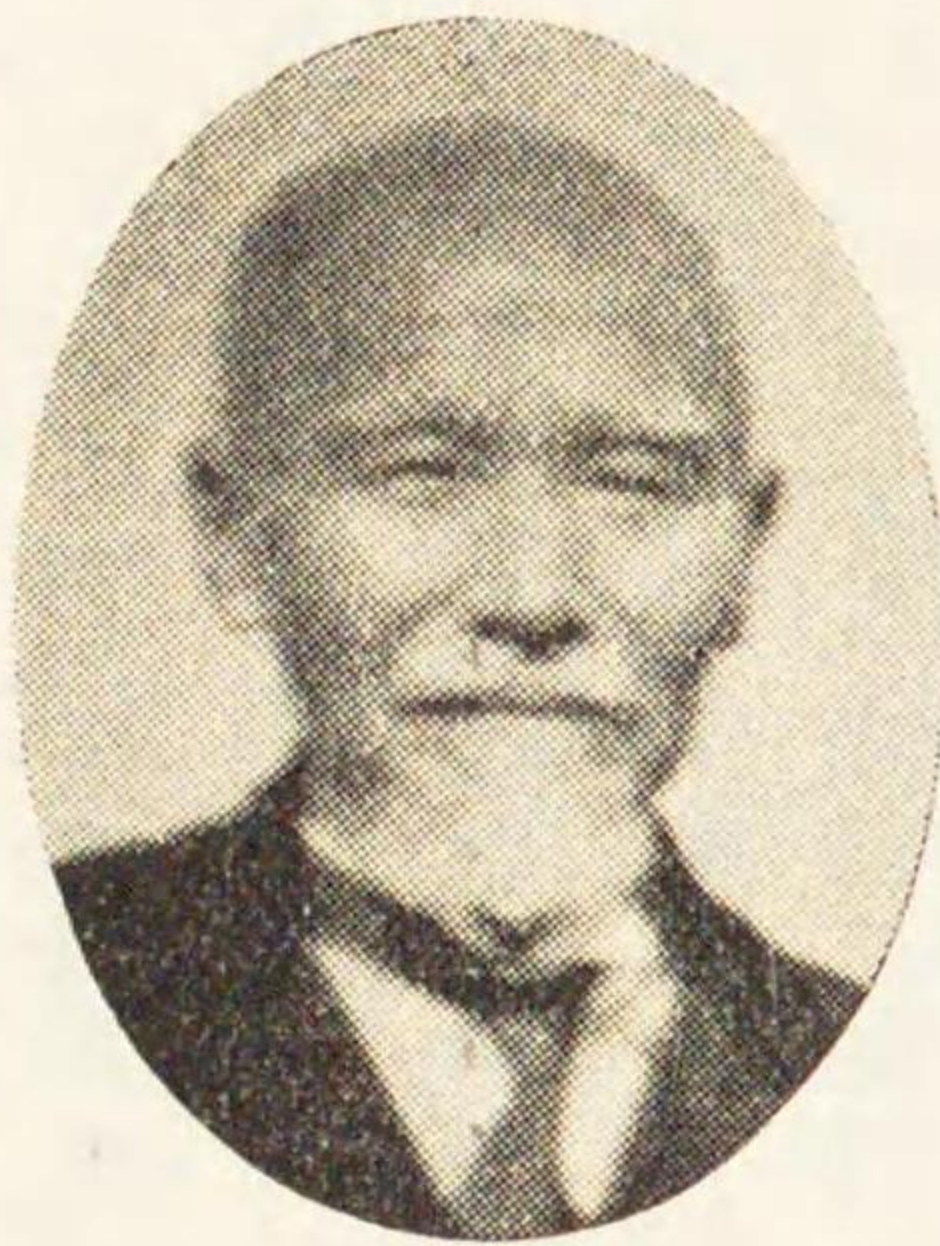
とある通り、縣下の秀才を一堂に集めて「高等教育を受くるに十分なる基礎教育に力を致す事」と  
 「國家の翹望する人士の輩出を期する事」の二つが其の最大眼目となつてをる譯で、此處に他の中等  
 學校と大に趣を異にする、特色を有つてをることを知らねばならぬ。同校の「沿革概要」中に

故川崎幾三郎及び宇田友四郎の兩氏は、夙に縣下の爲に私財を投じて公共的事業を經營せんとす  
 るの意あり、大正七、八年の交、豫て昵懇なる北川信從氏に、その事業の選擇を委嘱せり、爾來北  
 川氏は審思熟慮、永久に目つ普遍的に兩氏の素志を貫徹するは、教育事業に如くはなしと斷じ、之  
 れを兩氏に通ぜしが、兩氏亦た大に之れを賛し、その資金六十萬圓を提供し、十萬圓を設備費とし  
 五十萬圓を基本金とする財團法人として之れを管理し、豫科を附設する中學校を設立することを協  
 定せり

如上の記事は、土佐中の特色と、その沿革とを一層明白ならしめてをる。

#### 四 校長の人選

土佐中學校の母體が宇田翁であり、その産婆役が翁の親友北川信從氏である關係に於て、校長の選  
 擇は當然北川氏の裁量に一任すべき筋合となつて來た。發起人の川島正伴、池本浩靜兩氏は、英才教  
 育の主張者たる同志西山庸平氏を、校長たらしめたい意見を持つてゐた。然るに北川氏は、中學校の



三根圓次郎氏

教育に經驗の無い西山氏では、何んだか物足りないからと云ふの  
 で、新潟縣立中學校長三根圓次郎氏に、白羽の矢を立て、宇田翁  
 の同意を求め、同氏を招聘することに決定した。蓋し北川氏は新  
 潟縣知事時代に、三根氏の人物、識見、手腕を熟知してゐた爲で  
 あらう。斯くて三根氏は大正九年二月八日、土佐中學校の校長と

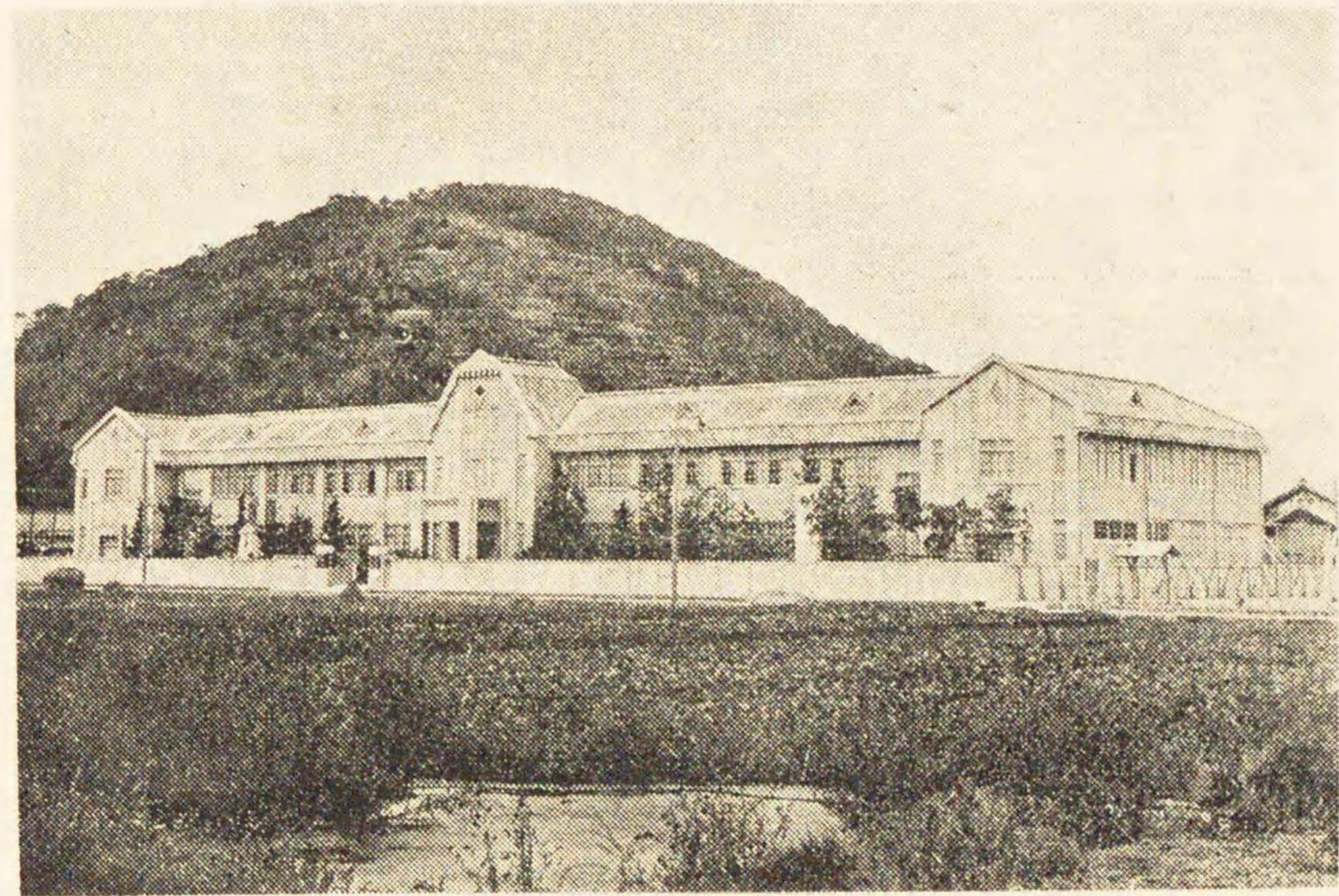
して着任し、翁に自己の抱負を陳べた。人を見るの明ある翁は、この良校長を得て、すつかり安心し  
 流石北川の推薦だ、萬事委ねることが出来るかと歡んだ。そして帶屋町にある川崎氏の控家を假校舎に  
 充て、同年四月十六日、翁及び川崎氏等列席の上、本科入學式を舉行して、生徒二十八名に入學を許  
 可し、直に授業を開始したのである。翌五月六日豫科入學式を舉行し、第一學年十名、第二學年十五  
 名に入學を許可して豫科の授業を開始した。これが實は開校當初の状態で、英才教育に熱意を有する



翁の面上には、人目にも判る程の嬉し味と、緊張味が溢れてゐた。

### 五 創立時の熱意

土佐財界の兩巨頭が、私財を投じて中學校を起したことは、全縣下の精神界に非常なる好印象を與へた。就中一市七郡の教育者は心からの感興を寄せた。この際宇田翁は他事を放擲して、學校敷地の調査中であつたが、最初江ノ口に候補地を物色したかなれど、都合により潮江に變更し、大正九年十月同地に確定し、敷地五千二百七十七坪餘の購入を了し、大正十年二月十五日、埋立工事開始の爲め、地鎮祭を行ひ、翌十六日より起工、同年八月新築工事に着手したのであるが、翁は最も熱心に創立の仕事に携はり、敷地の選定、購入をはじめ、建築の様式及びそ



景全の校學中佐土

の請負に至るまで、翁が中心となつてグン／＼進捗せしめた。そして建築中も、益々熱心に諸工事を監督し、他の理事をして、その眞剣味に舌を捲かしめた程であつた。

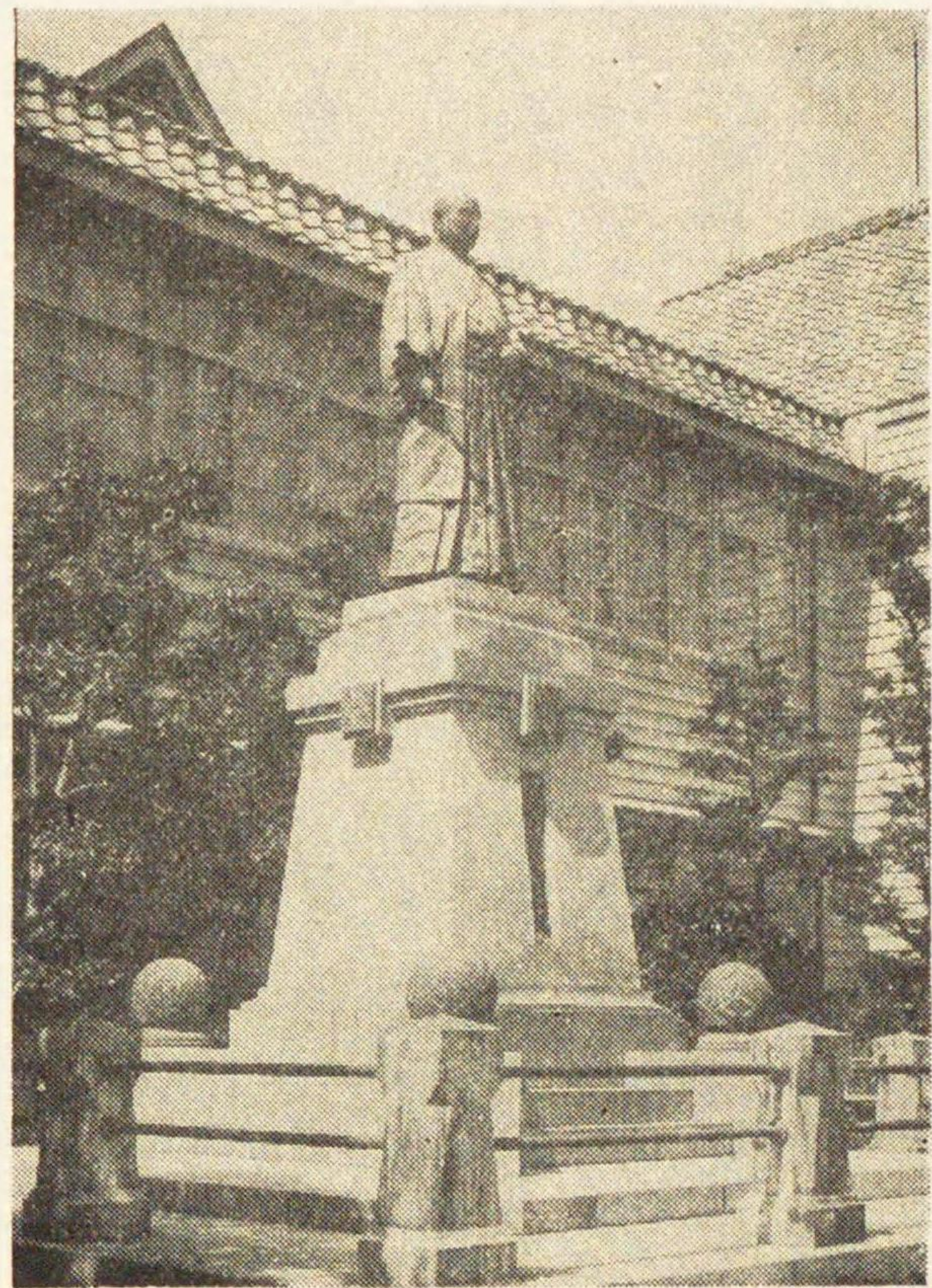
### 六 捌けた出資者

翁の天性か、將た修養自得の結果か、その執れにもせよ、翁が當事者に全幅の信頼を拂ひ、自由を與へるその誠心、その度量は、土佐中學校の場合にも美はしく發露されてゐる。事業の草創時代には細大悉く之れを一身に引き受けて、寧ろ行き過ぎる程の世話を焼いた翁は、事業の緒に着くと共に、一切を當事者に任せ切り、何事にも徹底した不干渉主義を執つた。だから三根校長としても、思ふまゝに自己の意見を行ふことが出来、従つて學校の成績が大に擧つたのである。他と對照すると此の點が能く分るが、竹内明太郎氏が私財を提供して工業學校を經營するや、必要に應じて、その都度金を出すと云ふ方法を執つたものだから、校長などは窮屈を感じ、不便を感じた。其處になると、宇田翁の遣り口は全然別で、金は全額を出しつつ放し、経費は當事者の決定に一任と云ふ、伸縮自在の餘地を與へて、單だその成績に留目したまでだ。出資者が斯く捌け、斯く碎けてゐるから、剛直不屈の三根校長も感激して、全魂を打ち込む努力を拂つたのである。



### 七 川崎氏の銅像

大正十年十一月九日、北川信從氏來校、生徒の爲め有益なる講話を爲し、職員生徒一同と記念撮影をしたその翌日、川崎幾三郎氏が腦溢血で逝去された。そこで宇田翁は北川氏等と相計り、豫て當時の土佐銀行關係者によりて、醸金し建設せんとした川崎氏の銅像を、土佐中學校の構内に建設することにした。こゝにも翁の川崎氏に對する美徳が窺はれてをる。



川崎氏の銅像

### 八 學校の財政

是より前、潮江校舎の新築工事に着手するや。豫定の工事費では不足を來すこととなり、翁と川崎氏が各々五萬圓づゝを出した。これで兩氏の出資額は七十萬圓となつた。そして川崎氏が逝去せられた時、その香奠料が十三萬圓あつたから、翁は遺族川崎松子並に川崎庄五郎氏に獎め、香奠料へ更に二萬圓を加へ、都合十五萬圓を出資せしめた。仍つて總資金八十五萬圓に達したのであるが、内二十五萬圓の土地代、建築費を控除した正金六十萬圓が、基本資金となつた譯だ。そこで翁はその六十萬圓を、翁の關係してをる高陽銀行に於て、特に七厘五厘の利率で預ることにした。土佐中學校の經常費は年額三萬圓以上を要する計算となつてゐるが、翁の計らひで四萬五千圓の利子が生れる膳立となつたから、三根校長をはじめ、學校當事者は益々翁の志に感激した。そして高陽銀行が四國銀行に合併してから後も、特に七厘の利子で預つてくれたから、學校の財政は相變らず裕福であつた。

### 九 五大方針の實行

潮江の新校舎で、授業を開始する運びとなつたのが大正十一年の陽春四月であつた。これは校舎新築第一期工事の落成した直後で、第二期工事は四月一日に着手され、十月末日には早くも完成された川崎幾三郎氏の銅像除幕式は、翁の發議により、學校の全貌がすつかり出來上り、季節も恰度菊花満開の十一月十九日を以て、いとも莊嚴に舉行され、斯くて開校記念碑の建設を見たのが、大正十二年



であつた。是に於て全國中等教育界の視聽を聳えしめた土佐中學校の内容外觀は、翁の用意と努力によつて一切整備すると共に

一、個人指導に重きを置き、教授能率の増進を計ること

一、天賦の能力を發揮し、自發的

修養に努めしむること

一、堅忍剛毅の性格、健實なる思想を養成すること

一、責任を重んじ、好んで勞に就

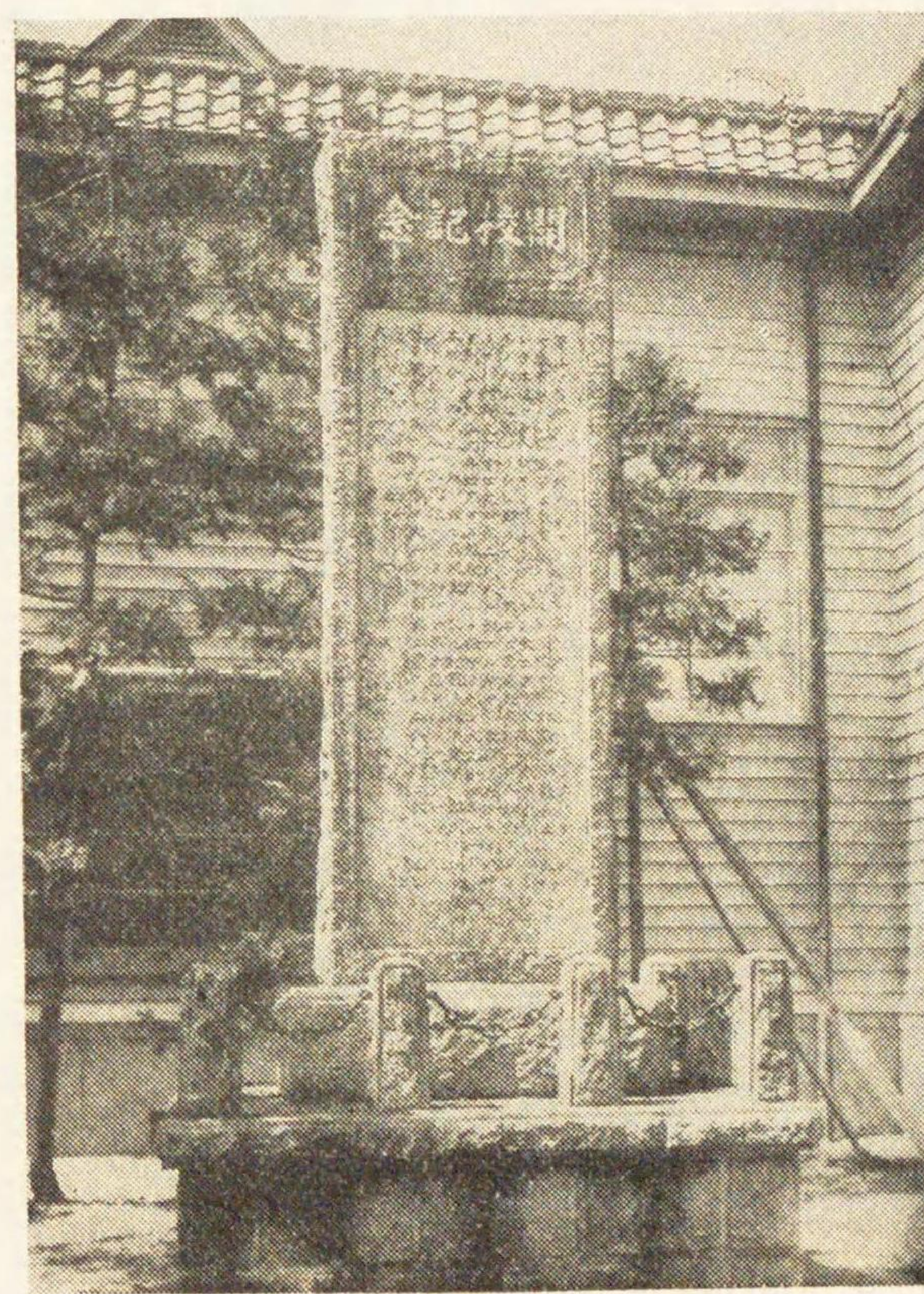
く習慣を養ふこと

一、運動を奨勵し、養護上の注意

を怠らず、以て體位の向上を計ること

の五大方針が着々實行され始めたのである。

土佐中學校開校記念碑



開校記念碑文

筆山の麓鏡川の畔校舎巍々として咿唔の聲雲に響く是れ土佐中學校に非ずや教育振へば國家榮え教育振はざれば國家衰ふ維新の際薩長土と並稱せられて土佐より人材多く輩出したりしは文に武に父兄の教育氣分盛にして子弟の向上心盛なりしに因らずんばあらず爾來教育振はず人材漸く凋落せむとす川崎幾三郎宇田友四郎二氏大に慨する所あり巨財を投じて土佐中學校を創立大正九年四月より假校舎にて授業を始め大正十一年十一月十八日本校舎の落成式を舉ぐ茲に在校生の父兄相圖り碑を建て、二氏の功を傳へむとす善い哉舉や父兄既に恩を知る子弟亦恩を知らざらむや體を鍛へ心を鍊り徳器を高くし智能を大にして國家に盡すは二氏の恩に報する也二氏の恩に報するは君國の恩に報する也

大正十二年一月

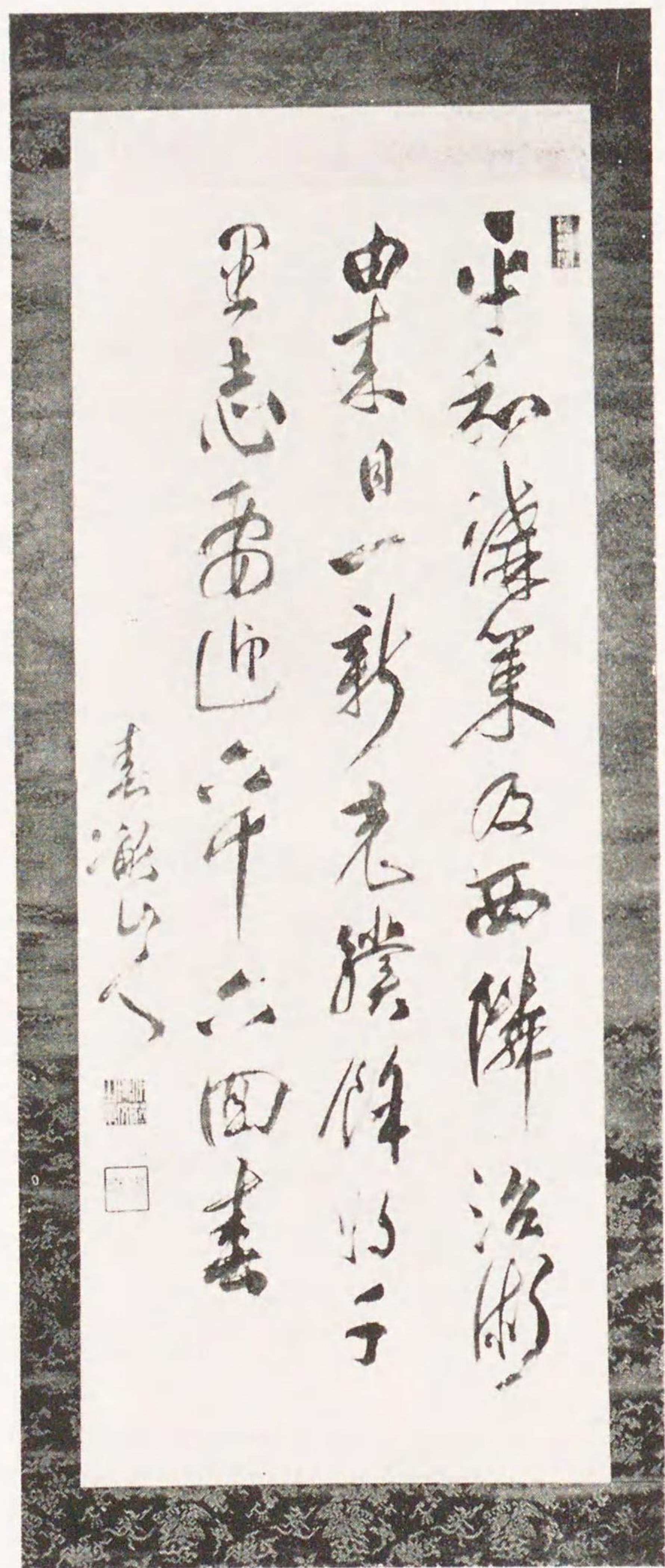
大町桂月撰  
松村翠濤書



一〇 北川理事長の訃

大正十三年四月二十七日、理事長北川信從氏が逝去された。病名は胃痛であり、翁の別邸に於て逝去された。北川氏と土佐中學校との關係は、理事長の役目そのものが一切を説明してをる。同三十日全校悼惜して靈柩を送つた。同氏は東京に在りて病を得、大正十二年十一月下旬、高知に於て靜養すべく歸省した。友情に厚き翁は、心配しつゝ、棧橋に出迎えたが、蒼白の顔色に、いたゞしき寒れを見せて、船橋を降るにも危氣を感じたので、翁は寄り添ふて手を貸さうとすると「有りがたう、それには及ばぬ」とニツコリ笑つた。そして一先づ親戚の家に落ちつき、適當な貸家を物色したが容易に見つからぬ。この事を傳へ聞いた翁は「俺の別邸でよければ何時でも用立てる、遠慮はいらぬ」と、度々親切な言葉を寄せたので、北川氏は深くその友情を感謝し、間もなく此處に移り、何んの氣兼ねなく寛いで、悠々療養にとめる事が出来た。這の間に於ける翁の心盡しは、好個の教育道話であり、追がに私財を投じて一個の中學校を建てた人だけであると、出入りの親族や昵懇者間の話題となつた。北川氏も餘程その好意を感銘したものと見え、遺命して家寶の岸駒と、大雅堂との六曲一双の屏風を翁に贈つたのであつた。

一一 北川氏と翁



伊藤博文公詩書



「友を見て其の人を識る」と云ふ聖人の言がある。宇田翁の至誠相許した友は

近森虎治、藤崎朋之、北川信從、田岡典章の四氏

で、孰れも人格高潔、一識見を具へた非凡人たる點に於て一致してをり、亦た四氏共に申し合せたやうに、名利に淡泊な人達である。こゝに偶々翁の眞骨頭が浮き彫りにせられてゐるのではなからうか。左に翁の北川信從氏に對する追悼の辭を掲げる。

北川と呼び切りにするのが、土佐流で親しみ深くもあるやうだ。北川とは随分久しい交際で、大阪廣島あたりの司法官時代から、ずつと相識つて居るのだが、多くは縣外での交際であり、土佐に歸つて居た前後二三回の期間は引つくるめても甚だ短かい。

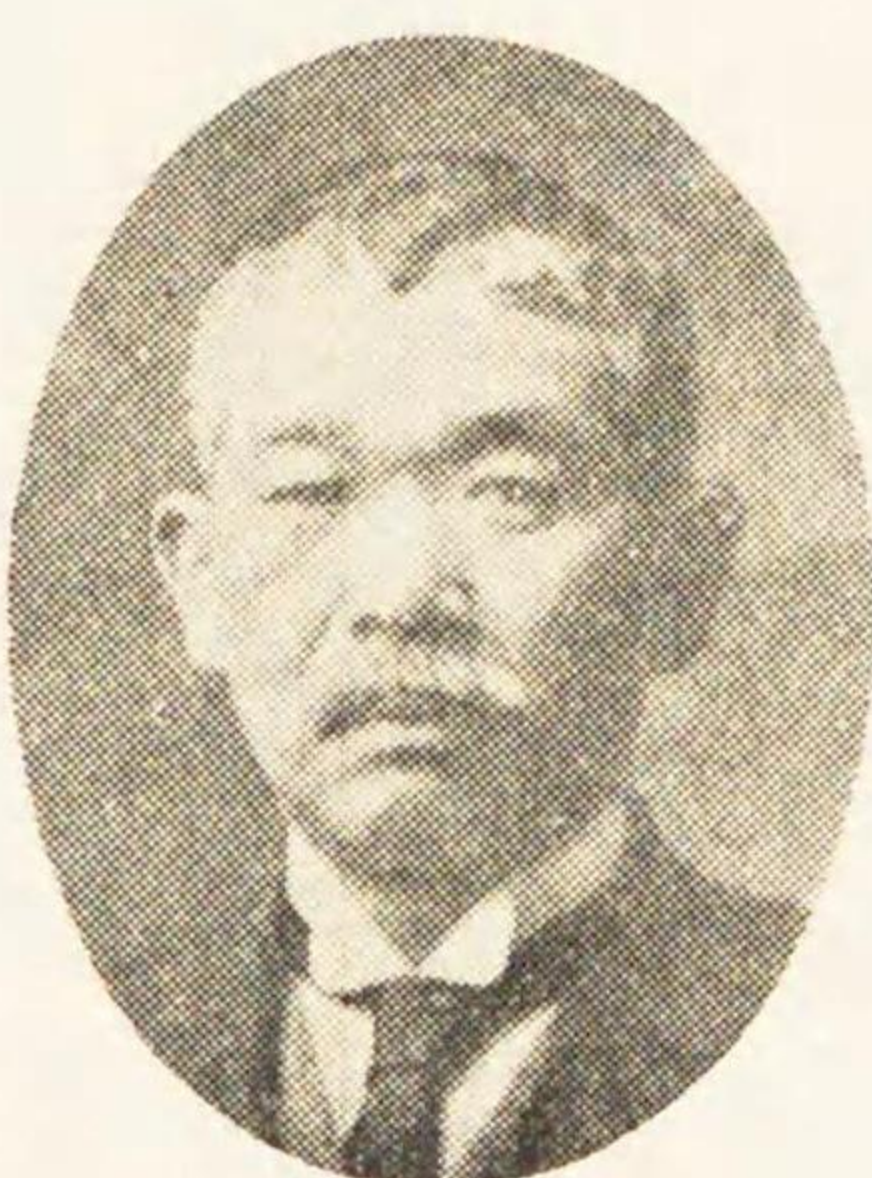
長らくやつてゐた長崎市長を辭めて高知へ歸り、本町に僑居してゐた頃には、死んだ藤崎（朋之）も元氣だつたし、我々みんな同年で、その頃は未だ大分飲めてゐたのである。所が晩年の北川は自分よりも早く酒と遠ざかり「一寸もいけぬ様になつた」と言つて、五六杯も傾けると、眞ッ赤な顔をするのが不思議でならなかつた。ところが自分も近年神經痛で醫師からは、酒は毒だと制せられ、一年も止めてをる間に、全く量がなくなり、北川よりも一層いけなくなつたのは可笑しい。

それは偕て措き、北川と云ふ男は、若い頃から實に無慾恬淡な質で、一番金儲けでもして、豪奢な眞似をして見やうなど云ふ心は微塵もなく、死ぬまで困らず、人の助力を借らぬ様にうまく暮し



て行けば、結構此の上なしと云ふ風で、洵に足る事を知る風の男であつた。

知事をやめて、東京三田小山町に頃合な邸宅を買入れ、死ぬ前の暮近くまで自適してゐたが、北川の事だから、要るだけの金はきれいに使つてしまつて、殆んどまとまつた貯蓄なんでもものは無かつた事と思ふが、長崎市から贈られた慰勞金や、何かで買つたやうに聞いてゐる。當時物價が何分安かつたので、程なく好況時代に遭遇すると、其の邸宅も相當高く評價されるやうになつた。淡泊



北川信從氏

で胸中をさらけ出す北川は「これで俺も賣り食ひにしても、何うやら死ぬ頃までは食ひつなげさうぢやから安心した」など、戯れらしい、而して眞實の事を言つてゐたのである。

そんな調子で、北川は正直、洒落、而して先輩知友いづれの前であらうと、己の思ふところを吐露して、恐れ憚る處がなかつたが、それが至つて公平なものだから、長崎や栃木、新潟などで評判のよろしかつたのも偶然でない。長崎から歸つて、高知で遊んでゐた時分、丁度大隈内閣が出来た。知友が「北川お主も未だ遊んでゐるのは惜しい、何かやれ、知事なら何うぢや」と勸説した時「外の事は、もう飽き／＼したが知事ならもう一度つとめに出ても悪くもない」と言つた調子で、大石正巳氏から大浦内相に談じ込み、いよ／＼起用されることになつたのだが、我々が是非高知へ連れて來やうと東京へ出向いて見

ると「實は和歌山の方からも迎えが來てをる」と言ふ風で、引ツ張り凧、結局兩引となつて、栃木へ行く事になつたが、次いで新潟へ轉じ、前後三年餘りして勇退したのであつた。

丁度、大隈内閣の下に、知事となつたものだから、北川を憲政會系統の如く見る者が多分にあるが、北川は決して政黨人として動く男でなく、牧民官としても、實に公平無私で功績を擧げ、それでこそ素晴らしい人氣が寄つたのである。だから遊んでをるうち「代議士でもやつて見ては」と勧めめるものがあつても「俺は黨人ぢやない」とテンから對手にならず、而して各政黨の政策などに就いては、時々例の調子で、忌彈なき批評を下してゐた。

仙石氏など、最もよく北川の人物を理解してゐる人で「北川のやうな男は土佐にはない」と惚れ込んでゐた。友人であらうが、誰れであらうが「お前のやらうとしてゐる事は、あれはいかんよ」など、直言して憚からぬ所。我々は大に徳として長く交際を續け、忠言により助けをかりたいと念じてゐたのに、天命はまことに是非もないことだ。

而して、北川が一面非常に親切で、他界するまでに面倒を見てやり、世話をした人は随分多く、窮してゐる者を見ては、有り無しの身錢を投げ出してまでも、救つてやつたりしたものが、こゝには只追憶感想の一端を記すに止める。

勿論右は、土佐中學校理事長としての北川氏を悼んだ言葉ではないけれども、こゝに掲げて不都合



はあるまい。北川氏の靈にして知るあらば、知己の言として、かならず満足してゐるであらう。

## 一二 向陽會の生誕

大正十三年五月、上級生が主體となり、向陽會と稱する自治修養會が設けられ、その實踐躬行の決議事項中に

毎年一回、一同、創立者故川崎幾三郎氏の墓を弔ひ、報恩の念を堅めしむ

の一項がある。報恩は宇田翁の最も強調する實踐倫理で、翁は常に身を以てその範を示されてをる一例を擧ぐれば川崎氏の永眠せらるゝや、翁は恭々して其の柩前にぬかづき、宛かも生ける川崎氏に對すると同様の、言語動作を以て、多年の恩義を謝し、併せて報恩の實を行爲の上に現はし、遺族達をして感激せしめたとの美談が傳へられた。翁は後進に對して、報恩を勸奨した。向陽會がこの美德の昂揚に力めたのは、全く翁の精神に副はんことを期しての事である。

## 一三 土佐中の誇り

土佐中は、英才教育を主眼とし、上級學校の豫備門たる觀があるので、動もすれば世間から智育偏重の誤解を受け易かつた。翁は體育の獎勵者で

運動の際は裸體を獎勵し、九月初め黒ン坊會にて其の等級を表彰す

といふ體育方針には大賛成であつた。この體育獎勵の結果、土佐中は全國及縣下中學校に比し、身體検査の成績は斷然優秀で、身長、體重、胸圍揃つて拔群の數字を示してをり、これが斯の校の最も大なる誇となつた。

## 一四 徹底せる同情心

數多き美德中、思ひ遣りが深く、且つ周到なることが、偶々校長三根氏の清貧と關聯して、うらかな話題の種となつた。同校長が就任後四五年を経た頃だつた。或日翁から理事の川島氏に電話が掛り、會ひたいとの事だから、早速出向いたところ

聞けば、校長は大分借金が嵩み、利子だけでも相當要るらしい。餘程困つてをらるゝさうで、洵に氣の毒に思ふ。學校の資金の中から融通し、薄利で始末方をする方が、校長もうるさうのうて可からうから、此の件を心配して貰ひたい

との話であつた。そこで川島理事が三根氏に就いて訊いたところ、借金の額は五千五百圓、それが皆な高利で難儀してをる事情が判明したから、氏は翁の意志を體し、資金の中から其の金を用立てた昭和十年三月に三根校長が逝去せらるゝや、翁は見舞金として一万五千五百圓を贈呈し、遺族の者を



感激せしめた。遺族は此の金の中から五千五百圓を學校の會計に返した。翁の周到なる用意と、その徹底せる同情振りが茲にも露はれてゐる。

### 一五 高遠の理想

三根校長の述懐に

北川信從氏は、學校創立の際、余に向つて曰ふ様「土佐は不思議にも、古來天才、奇才を出すことと少くないと思ふ、それで教育のしやうによつては、先人に劣らぬ偉人を輩出せしめる事が出来ると思ふから、しつかりやつて貰ひたい」との希望であつた。此の一言は余をして、責任の大なるを痛感せしめた云々

とある。この片言隻語に瞭かなる如く、土佐中學校の理想は、大人物を養成し、その活動によつて維新前後の華かなる土佐に復活せしむると云ふのであつて、翁の高遠なる意見が亦たこの中に織り込まれてゐる。であるから創業時代の土佐中は、確かに人材輩出の登龍門たる實を擧げ、上級學校入學の成績は文字通り百パーセントであつた。縣官民諸賢は翁の本縣教育上に印せる其の足跡と、その功績を仔細に検討し、翁の高遠なる理想を篤と認識すべきであらう。

## 徳と力の會頭

### 一 會議所の沿革

翁の高知商業會議所會頭時代に筆を染むるに先立ち、一應同會議所の沿革を述べることにする。何となれば、沿革に對する概念が空虚だと、歴代會頭や、副會頭などの氏名を知るよすがも無く、したがつて他と比較しやうにも、その對象を得るの便を缺くからである。歴代の會頭中には、翁の汽船會社時代に、先輩としてあがめた寺田亮氏もあり、翁とは政治的立場を異にした郡部派の總帥中澤楠彌太氏があり、翁とは膠漆の交りに終始した川崎幾三郎氏があり、その副會頭中には翁の懐刀をもつて目された井上善次氏などもある。試みに第一期より現在（第十九期）に至る歴代會頭、副會頭の氏名を列記すれば

	會 頭	副 會 頭
第一期 (明治廿四年)	安田 幸正	中山 秀雄
第二期 (明治廿六年)	堀見馬之助 寺田 亮	小西 鹿也 橋本 獺也







轉し、茲に共同の洋館事務所を新築し、發展の外形と内容を整へた。これが宇田翁の會頭就任前の梗概である。

## 二 劈頭の意見開申

土佐電鐵會社の代表として、會議所議員となり、其の會頭に推されてゐた川崎幾三郎氏は、大正十年十一月逝去せられたので、宇田翁が後を繼いで議員となり、會頭代理をも勤める事となつた。そして會議所臨時總會に於て、翁が正式會頭に就任したのは、大正十一年の二月であつたが、就任勾々、水力電氣に關する意見の開申書を、阿部龜彦知事に提出し、縣當局の注意を喚起するところがあつた。その要旨は「從來民間より出願する水力電氣事業は、その出願の當時より許可を得るに至るまで、數年を経過するものが少くない。此の如きは將に勃興せんとする、各種製造工業を衰退萎微せしめんとするものである。閣下は水力電氣の出願に對しては其の許可の手續を簡捷にするやう一層の注意を拂はねばならない。」といふのであつた。そして就任第二次の仕事は、土佐商工聯合會と協議して、適當なる方法のもとに、正札販賣の實行を獎勵することに、その頭腦を働かしたことで、高知市内の商店街には、朗らかに統制の春色が棚引きはじめたのである。

## 三 翁の事績一斑

以下、翁の事績を簡單に掲げて見やう。

大正十三年八月、山田、池田間の鐵道速成に關し上京。當局の訪問、その他の運動を熱心に進める處があつた。時恰かも加藤高明伯を首班とする所謂護憲内閣が成立した直後で、幣原、若槻、濱口、仙石の諸氏が入閣してをり、運動上頗る便宜を得た。そして歸來、鐵道、大藏兩大臣及び鐵道次官、建設局長等に會見運動の顛末を報告した。

同年九月四日、臨時總會を招集し左の決議を爲した。

吾人は衆議院議員選挙法改正に伴ふ市部獨立選挙區廢止の議に反對の意を表明すると同時に、本縣選出の代議士に反對の意志を通じ目的達成の依頼狀を出す。

本市及び土佐商工聯合會に對し、本會議所と同様の行動に出でんことを請求すること。

十四年三月廿六日、左の決議を爲す。



神戸棧橋の經營を海陸運輸會社に委託せず、神戸市にて直營し料率遞減を交渉すること。  
 神戸市に對し、國立生糸検査處を神戸市に設置方要望の件。  
 山田、池田間及び松山間の鐵道敷設速成方要望の件。  
 浦戸港を重要港灣に指定方要望の件。

大正十四年七月、會議處の決議録を見ると  
 浦戸港を重要港灣に指定方に關し、當局に運動の件は宇田會頭を煩はす事  
 とある。これを以て、翁が浦戸港の爲め、相當骨を折つたことが判る。

#### 四 春光嬉々たり

大正十四年は、中央政界に於ける土佐派の全盛時代であつた。加藤高明伯を首相とする護憲内閣からは、その年五月に至りて、犬養氏先づ去り、七月には、政友會出身の各大臣が、正面から濱口藏相の税制整理案に、反對した爲めに、内閣は瓦解したかなれど、加藤伯は内閣再組織の天命を拜し、その結果、八月二日には、第二次加藤内閣、即ち所謂の憲政會單獨内閣（一部の評論家は、水入らずの純三菱内閣と稱した）が成立し、仙石貢氏が鐵道大臣、濱口雄幸氏が大藏大臣、片岡直温氏が商工大臣

の椅子を與へられ、土佐から一時に、三人の大臣を出だし、明治初年のそれよりも、郷土的に氣を吐いた時代で、濱口氏も、片岡氏も此の年相前後して土佐に歸り熱狂的歓迎を受けた。宇田翁は此等三大臣とは最も親善なる關係にあつたから、商工會議所の會頭として、中央への運動には、眞に誂へ向きの嵌り役を以て目せられたものだ。春風春水一時に來るとは、全く此の時の形容詞で、翁の輝やしき商業會議所會頭時代に、大藏大臣と、商工大臣が、晴れの故郷入りとは、何んたる好因縁であらう。濱口雄幸傳に 次の記事が出てゐる。

時は大正十四年九月、濱口藏相は郷國土佐に歸省したのである。此度は夏子夫人も同伴であつたが、實に夫人は故郷を出で、から三十三年振りであつたといふ。流石に無感情 無神經の如く黙々たゞ黙々たる濱口氏も、糟糠の夫人を伴ひ、身は一國の大臣として、生れ故郷に錦を飾ることは謙虚なれども、自ら喜びの身内に奔騰するをいなむことは出來なかつた。回顧すれば明治廿一年はじめて、大阪の高等學校に入學せんとて、高知の埠頭にたつたのも、殘暑未だ盛んなる九月であつた。その思ひ出ある九月に錦を衣て郷國に歸省するや、土佐、ことに高知市一圓、五台山村の人々が、氏の歸省を如何に歓迎し、熱狂したかは今更らいふまでもない。二十有余年來、土佐は一人の大臣さへもみることが出來なかつたのに、加藤高明内閣成るに及んで、まづ濱口雄幸氏は大藏大臣となつた「我等の濱口氏來る」、「大藏大臣濱口氏の來高」、それは正しく熱狂に價した。しかもそれ



は人間のみではなかつた。浦戸灣も波をしづめ、沿岸の草木は一層色鮮やかに景色をそへて氏を迎えた。汽船が漸くにして埠頭に着すれば、そこには數万の人達が黒山の如く雲集し、大臣としての濱口氏を迎え、且つは見んものと詰めかけてゐた。其處此處に起る萬歳の聲、誰かこの情景に接して血汐の躍るを覺えなかつたものがあらうか。

氏は九月廿日、高知市民の請によつて高知座に於て大講演をなし、さしにも廣き高知座も聴衆によつて立錐の余地なく、市民に多大の感銘を與へたのであつた。

高知縣の第一區に於て、濱口氏のために金城湯池の地盤を開拓した、功勞者の筆頭こそ實に宇田翁であつた。濱口氏が土佐から初めて衆議院議員候補者に打つて出た時、仙石貢氏から特に「濱口の將來を頼む」との依囑をうけたのは宇田翁であつた。然諾を重んずること人一倍の翁は、爾來陰になり日向になつて濱口氏を守りつゞけた。その濱口氏が自己の商業會議所會頭時代に、大藏大臣として歸省したのだから其の歡喜は、他人の想像以上であつたに相違ない。藏相旅館の特別室には時々翁と、森下高茂翁の喜色満面姿を見受けたことであつた。

×

片岡商工大臣は、同年十一月廿四日高知に着した。そして商業會議所が主催者となり、二十七日盛大なる歡迎會を催した。

## 五 大衆の味方

大正十五年頃から、昭和五年頃迄は、矢張り憲政黨内閣の時代だから、中央への運動は、翁の手で行けば、頗る好都合に進捗した。當時本縣の二大重要案件は、浦戸港の改修工事と、省線山田、池田間の鐵道工事速成であつた。故に翁は、此の間、數次上京して、大に運動に力めたのであつた。そして昭和三年度には、一般商工業者の聲を代表し、卒先して、鐵道貨物運賃着拂扱の存續を鐵道省に要望した。その理由は

着拂扱は、一般公衆の便利とする處にして、多年持續せられたる良制度であり、殊に商工業者は賣買行爲の慣習上、商品が買主の手許に到着の上、取引の決濟をなすべきものなれば、金融關係上多大の便益あるのみならず、特に中小商工業者の蒙る利益甚大なものがある。

といふのであつて、翁が居常、中小商工業者の利害休戚に、至大の關心を有ち、その要望を實現せしむるが爲めに、尋常ならぬ苦心を拂つたかゝ窺はれる。

## 六 記念の三層樓

大正十四年、伊野町は、土地遠隔その他の理由をもつて脱會したが、同年市區の擴張に伴ひ、土佐